

千葉市猪鼻城跡

1999

千葉市教育委員会
財団法人千葉市文化財調査協会

千葉市猪鼻城跡

1999

千葉市教育委員会
財団法人千葉市文化財調査協会

序 文

財団法人千葉市文化財調査協会は、埋蔵文化財の発掘調査と考古学上の学術・技術等の研究を行い、文化財保護思想の涵養と普及をはかり、広く市民生活や地域文化の充実に寄与することを目的として昭和60年5月に設立されました。

当調査協会では、この趣旨にもとづき、現在までに数多くの発掘調査を行い、その調査成果をまとめた報告書を刊行すること等により地域の埋蔵文化財の公表に努めてきたところです。

このたび、千葉市立郷土博物館の別館建設計画に先だって発掘調査を実施した「猪鼻城跡」の調査報告書を刊行する運びとなりました。

猪鼻城は、千葉氏繁栄の礎といわれる千葉常重が大治元年（1126年）この地に構えたと伝えられ、その後、一族の内紛によって廃城に至るまでの13代330年の長きにわたって居城とされた城です。

調査の結果、千葉氏がこの房総の地を舞台に活躍していた頃の建物跡や掘跡などが発見されただけでなく、それに遡る弥生時代・古代の集落跡や時代が下って幕末頃と考えられる遺構・遺物が発見され、この地域の歴史を語る上で重要な資料を得ることが出来ました。

刊行にあたり、この報告書が学術的な資料としてのみならず、郷土史資料としても広く活用していただけることを希望します。

終わりに、調査に際しご指導とご協力をたまわりました千葉県教育委員会、千葉市教育委員会、千葉市立郷土博物館、千葉市建築部工務課および関係各位の皆様に対し深く感謝申し上げます。

平成11年3月

財団法人千葉市文化財調査協会
理事長 古川 誠

例 言

- 1 本書は千葉県千葉市中央区亥鼻1-23-1外に所在する猪鼻城跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は千葉市立郷土博物館の別館建設及び関連事業に伴うものであり、千葉県県教育委員会ならびに千葉市教育委員会の指導のもと、財団法人千葉市文化財調査協会が千葉市からの受託契約に基づき実施した。
- 3 調査期間・面積および整理期間は下記のとおりである。

本調査	平成8年7月1日から平成8年12月25日まで
	調査面積4,412㎡
整理作業	平成10年7月1日から平成11年3月31日まで
- 4 整理作業時における遺物の写真撮影は、青柳すみ江が行った。
- 5 本遺跡の発掘調査および報告書の作成は、倉田義広が担当した。
- 6 使用した地図は、国土地理院地形図1/25,000（千葉西部、千葉東部、蘇我、五井）他である。
- 7 挿図の方位は、すべて座標北である。
- 8 遺跡の航空写真は、沢本吉則写真事務所にて依頼したものを使用した。
- 9 遺構集中箇所の空中写真測量と図化は、中央航業株式会社に委託した。
- 10 弥生式土器のまとめについては、明治大学考古学博物館学芸員黒沢治氏より「猪鼻城跡出土の弥生中期土器群」とする玉稿を頂戴することができた。また弥生土器については佐藤順一氏、菊池健一氏、中世城跡については築瀬裕一氏ら同僚諸氏から有益な教示や協力を得た。記して感謝する。
- 11 本書に収録した出土遺物・調査記録及び整理記録は、千葉市埋蔵文化財調査センターにおいて収蔵・保管している。
- 12 発掘調査の実施から本書の作成に至るまで、千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会文化課、千葉市立郷土博物館、千葉市工務課ならびに諸氏よりご指導・ご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

凡 例

- 1 本書で使用した遺構番号は、編集の都合上新たな番号に振り直しており、発掘調査から整理当初の段階まで使用していた旧番号は（ ）書きで遺構番号の脇に記載した。
- 2 本文中の図版について、その縮尺は遺構実測図は住居1/60、炉・かまど1/30、土壌は1/60を基本とした。溝・掘立柱建物跡については遺構の規模にかなり幅があるため遺構毎に任意の縮尺を用い、いずれも図ごとにスケールを付した。
遺物実測図・拓影図では、奈良・平安時代の竪穴住居に関する遺物は1/4、他の遺物は1/3を基本とした。ただし大型の遺物については一部任意の縮尺とし、それぞれ図ごとにスケールを付した。土器正面の拓影は、表面は断面の左側に、内面は右側に表示している。
- 3 遺構実測図中の土層説明および出土遺物観察表中の色調の説明については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』1996年後期版により表記した。
- 4 遺構実測図の方位は、公共座標の北を表示し、また計測値はこれに基づいて表示した。
- 5 遺構・遺物実測図中の竈粘土範囲、炉等の焼土範囲、須恵器の断面等は、それぞれスクリーンで表示した。

本文目次

序文

例言

凡例

目次

第1章 序	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と諸環境	1
第3節 猪鼻城跡と地域に纏わる主な記録	5
第4節 猪鼻城跡の区画割りについて	7
第5節 調査の経過と方法	8
第2章 調査の成果	9
第1節 調査の概要	9
1. 配管部での調査	9
2. 平坦部での調査	9
第2節 検出した遺構と遺物	12
1. 弥生時代	12
(1) 竪穴住居跡	12
2. 古墳～平安時代	40
(1) 竪穴住居跡	40
3. 中世以降	72
(1) 掘立柱建物跡等	72
(2) 溝跡	79
(3) 土壇等	95
(4) その他の遺物	108
第3章 まとめ	116
付編	
猪鼻城跡出土の弥生中期土器群	121
報告書抄録	

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺地形図	2
第2図	主な周辺遺跡分布図	3
第3図	猪鼻城跡概念図	8
第4図	猪鼻城跡地形測量図	11
第5図	第1号竪穴住居跡と炉と遺物実測図	13
第6図	第1号竪穴住居跡遺物実測図	14
第7図	第2号竪穴住居跡実測図	15
第8図	第2号竪穴住居跡遺物実測図	16
第9図	第3・4号竪穴住居跡実測図	18
第10図	第3号竪穴住居跡遺物実測図	19
第11図	第3号竪穴住居跡遺物実測図	20
第12図	第5号竪穴住居跡実測図	21
第13図	第5号竪穴住居跡炉と遺物実測図	22
第14図	第5号竪穴住居跡遺物実測図	23
第15図	第5号竪穴住居跡遺物実測図	24
第16図	第6号竪穴住居跡実測図	27
第17図	第6号竪穴住居跡炉と遺物実測図	28
第18図	第6号竪穴住居跡遺物実測図	29
第19図	第7号竪穴住居跡遺物実測図	29
第20図	第7号竪穴住居跡実測図	30
第21図	第8号竪穴住居跡と炉と遺物実測図	32
第22図	第8号竪穴住居跡遺物実測図	33
第23図	第9号竪穴住居跡と炉実測図	34
第24図	第9号竪穴住居跡遺物実測図	35
第25図	第9号竪穴住居跡（旧）実測図	35
第26図	第10号竪穴住居跡遺物実測図	36
第27図	第10号竪穴住居跡（新・旧）実測図	37
第28図	第11号竪穴住居跡実測図	38
第29図	第11号竪穴住居跡（旧）と炉実測図	39
第30図	第12号竪穴住居跡と竈と遺物実測図	41
第31図	第12号竪穴住居跡遺物実測図	42
第32図	第13～15号竪穴住居跡と第14号竪穴住居跡竈実測図	43
第33図	第15号竪穴住居跡竈と第13・14号竪穴住居跡遺物実測図	46
第34図	第15号竪穴住居跡遺物実測図	47

第35図	第16号竪穴住居跡と遺物実測図	48
第36図	第17号竪穴住居跡と遺物実測図	49
第37図	第18・23号竪穴住居跡と遺物実測図	50
第38図	第18号竪穴住居跡遺物実測図	51
第39図	第19号竪穴住居跡と遺物実測図	53
第40図	第19号竪穴住居跡(旧)実測図	54
第41図	第20号竪穴住居跡遺物実測図	54
第42図	第21号竪穴住居跡と竈と遺物実測図	56
第43図	第22号竪穴住居跡と遺物実測図	57
第44図	第24号竪穴住居跡と竈と遺物実測図	58
第45図	第25・26号竪穴住居跡と遺物実測図	59
第46図	第27号竪穴住居跡と竈実測図	61
第47図	第27号竪穴住居跡(旧)と遺物実測図	62
第48図	第27号竪穴住居跡遺物実測図	63
第49図	第28号竪穴住居跡と遺物実測図	64
第50図	第29号竪穴住居跡と竈と遺物実測図	65
第51図	第30号竪穴住居跡と竈と遺物実測図	67
第52図	第31号竪穴住居跡と竈と遺物実測図	68
第53図	第32号竪穴住居跡と竈と遺物実測図	70
第54図	第33号竪穴住居跡実測図	71
第55図	第33号竪穴住居跡遺物実測図	72
第56図	第1号ピット列と第2号掘立柱建物跡実測図	74
第57図	第3・7号掘立柱建物跡実測図	75
第58図	ピット集中区実測図	76
第59図	第4号掘立柱建物跡実測図	77
第60図	第5号掘立柱建物跡実測図	78
第61図	第2号溝跡実測図	80
第62図	第3～6溝跡変遷図	80
第63図	第3～6号溝跡実測図	81
第64図	第3・4号溝跡断面図	82
第65図	第7～9号溝跡実測図	84
第66図	第11・12・18号溝跡実測図	85
第67図	第13・14号溝跡実測図	87
第68図	第15・16号溝跡実測図	89
第69図	第10・17溝跡と第1号土壇実測図	90
第70図	第2・4・7・11号溝跡遺物実測図	92

第71図	第11～17号溝跡遺物実測図	93
第72図	第2・3号土壌実測図	97
第73図	第4～10号土壌実測図	99
第74図	第11～13号土壌実測図	100
第75図	第14号～15号土壌実測図	102
第76図	第16号～20号土壌実測図	103
第77図	第21号土壌実測図	104
第78図	第1・2号土壌遺物実測図	105
第79図	第12～14・17・20号土壌遺物実測図	107
第80図	出土地点を有する遺物実測図(1)	109
第81図	出土地点を有する遺物実測図(2)	110
第82図	グリッド一括遺物実測図(1)	111
第83図	グリッド一括遺物実測図(2)	112
第84図	グリッド一括遺物実測図(3)	113
第85図	猪鼻城跡出土中世遺物の種類産地別割合	117
第86図	本佐倉城跡出土陶磁器組成グラフ	118
第87図	Ⅲ文様帯の分割	122
第88図	猪鼻城跡出土の御新田式と関連資料	126
第89図	猪鼻城跡出土の足洗式と関連資料	127
付 図	遺構配置図	

表 目 次

第1表	周辺地区の土地利用変遷表	7
第2表	第1号竪穴住居跡出土遺物観察表	12
第3表	第2号竪穴住居跡出土遺物観察表	14
第4表	第3号竪穴住居跡出土遺物観察表	17
第5表	第5号竪穴住居跡出土遺物観察表	20
第6表	第5号竪穴住居跡出土遺物観察表	25
第7表	第6号竪穴住居跡出土遺物観察表	26
第8表	第7号竪穴住居跡出土遺物観察表	29
第9表	第8号竪穴住居跡出土遺物観察表	31
第10表	第9号竪穴住居跡出土遺物観察表	35
第11表	第10号竪穴住居跡出土遺物観察表	36
第12表	第12号竪穴住居跡出土遺物観察表	40
第13表	第13号竪穴住居跡出土遺物観察表	44

第14表	第14号竖穴住居跡出土遺物觀察表	44
第15表	第15号竖穴住居跡出土遺物觀察表	45
第16表	第16号竖穴住居跡出土遺物觀察表	47
第17表	第17号竖穴住居跡出土遺物觀察表	48
第18表	第18号竖穴住居跡出土遺物觀察表	51
第19表	第19号竖穴住居跡出土遺物觀察表	52
第20表	第20号竖穴住居跡出土遺物觀察表	55
第21表	第21号竖穴住居跡出土遺物觀察表	55
第22表	第22号竖穴住居跡出土遺物觀察表	57
第23表	第24号竖穴住居跡出土遺物觀察表	59
第24表	第25・26号竖穴住居跡出土遺物觀察表	59
第25表	第27号竖穴住居跡出土遺物觀察表	60
第26表	第28号竖穴住居跡出土遺物觀察表	63
第27表	第29号竖穴住居跡出土遺物觀察表	66
第28表	第30号竖穴住居跡出土遺物觀察表	66
第29表	第31号竖穴住居跡出土遺物觀察表	66
第30表	第32号竖穴住居跡出土遺物觀察表	69
第31表	第33号竖穴住居跡出土遺物觀察表	71
第32表	第2号溝跡出土遺物觀察表	94
第33表	第4号溝跡出土遺物觀察表	94
第34表	第5号溝跡出土遺物觀察表	94
第35表	第7号溝跡出土遺物觀察表	94
第36表	第11号溝跡出土遺物觀察表	94
第37表	第13号溝跡出土遺物觀察表	95
第38表	第14号溝跡出土遺物觀察表	95
第39表	第15号溝跡出土遺物觀察表	95
第40表	第16号溝跡出土遺物觀察表	95
第41表	第17号溝跡出土遺物觀察表	95
第42表	第1号土壇出土遺物觀察表	104
第43表	第2号土壇出土遺物觀察表	104
第44表	第12号土壇出土遺物觀察表	106
第45表	第13号土壇出土遺物觀察表	106
第46表	第14号土壇出土遺物觀察表	108
第47表	第17号土壇出土遺物觀察表	108
第48表	第20号土壇出土遺物觀察表	108
第49表	出土地点を有する出土遺物觀察表	110

写真図版目次

- 図版 1 1.調査区全景（北から撮影） 2.調査区全景（東から撮影）
- 図版 2 1.第1号竪穴住居跡 2.第2号竪穴住居跡 3.第3・4号竪穴住居跡 4.3号住居炉跡
5.第5号竪穴住居跡遺物出土状況 6.5号住居炉跡 7.5号住居遺物出土状況
8.第6号竪穴住居跡
- 図版 3 1.6号住居炉跡 2.第7号竪穴住居跡 3.第8号竪穴住居跡 4.8号住居炉跡（土器片を壁体とする炉） 5.8号住居遺物出土状況 6.8号住居遺物出土状況（不明ピット内）
7.8号住居遺物出土状況 8.第9号竪穴住居跡
- 図版 4 1.第10号竪穴住居跡 2.第11号竪穴住居跡 3.11号住居炉跡 4.第12号竪穴住居跡
5.第13・14号竪穴住居跡 6.第14号竪穴住居跡 7.第15号竪穴住居跡 8.15号住居カマド跡
- 図版 5 1.第17号竪穴住居跡 2.第18・23号竪穴住居跡 3.第19号竪穴住居跡 4.第21号竪穴住居跡
5.21号住居カマド跡 6.第22号竪穴住居跡 7.第24号竪穴住居跡 8.第25号竪穴住居跡
- 図版 6 1.第27号竪穴住居跡 2.第28号竪穴住居跡 3.第29号竪穴住居跡 4.29号住居カマド跡
5.第30号竪穴住居跡 6.30号住居カマド跡 7.第31号竪穴住居跡 8.第32号竪穴住居跡
- 図版 7 1.32号住居カマド跡 2.第33号竪穴住居跡 3.第1号ピット列跡 4.第2号掘立柱建物跡
5.第3号掘立柱建物跡 6.第3・4号掘立柱建物跡 7.第2・3号掘立柱建物跡
8.5号掘立柱建物跡周辺
- 図版 8 1.第5号掘立柱建物跡（西から撮影） 2.北東コーナーピット集中ヶ所（西から撮影）
- 図版 9 1.第7号掘立柱建物跡 2.第3号溝跡開口部分 3.第3号溝跡 4.第5・6号溝跡
5.5・6号溝土層断面（箱薬研から薬研堀へ） 6.7号溝南東コーナー部 7.第7号溝跡
- 図版10 1.第7・9号溝跡周辺 2.7号溝横断面 3.第9号溝跡 4.第10号溝跡
- 図版11 1.第11・12号溝跡（真上から撮影） 2.第13・14号溝跡（西上方から撮影）
3.13号溝覆土上面（性格不明の長方形プラン）
- 図版12 1.第13・14号溝跡（西から撮影） 2.14号溝東壁土層断面 3.14号溝上部の道遺構
4.14・15号溝の西壁 5.第14・15号溝跡 6.第1号土壇
- 図版13 1.第2号土壇遺物出土状況（西から撮影） 2.第2号土壇（南から撮影） 3.第3号土壇
4.第4号土壇人骨出土状況 5.第5・6号土壇 6.第8号土壇獣骨出土状況
7.第12号土壇
- 図版14 1.第12号土壇遺物出土状況 2.第13号土壇 3.第14号土壇 4.第16号土壇（小竪穴）
5.第17号土壇人骨出土状況（北から撮影） 6.17号土壇出土状況（東から撮影）

7. 第19号土壌 8. 第20号土壌遺物出土状況

図版15 1. 第21号竪穴跡 2. 第Ⅱトレンチ溝跡検出状況 3. 第Ⅲトレンチ溝跡検出状況

図版16 第1・2号竪穴住居跡出土遺物

図版17 第3号竪穴住居跡出土遺物

図版18 第5号竪穴住居跡出土遺物(1)

図版19 第5号竪穴住居跡出土遺物(2)

図版20 第6号竪穴住居跡出土遺物

図版21 第8～10号竪穴住居跡出土遺物

図版22 第12～15号竪穴住居跡出土遺物

図版23 第17～21号竪穴住居跡出土遺物

図版24 第22・24・27号竪穴住居跡出土遺物

図版25 第27・28・31～33号竪穴住居跡出土遺物

図版26 第7・12～16号溝跡出土遺物

図版27 第1・2・12・13号土壌出土遺物

図版28 第19・20号土壌, 出土地点を有する遺物

図版29 グリッド一括出土遺物(1)

図版30 グリッド一括出土遺物(2)

第I章 序

第1節 調査に至る経緯

千葉市立郷土博物館は、当初、市経済部観光課所管の「千葉市郷土館」として外観は近世小田原城の天守閣を模した4層5階建ての城郭様式で建築され、昭和42年4月「一般市民および青少年を対象とし、郷土の歴史、文化財ならびに産業、文化、自然科学等の資料を展示し市民の学習の場を提供する。」ことを目的として開館した。その後昭和51年7月に教育委員会社会教育課に所管替えとなり、さらに昭和54年4月の文化課の新設に伴い文化課所管となった。昭和58年4月には、「千葉市立郷土博物館」と館名を改めて現在に至っている。

博物館の外観は、猪鼻城の本来の姿を表したものであるものではないもののライトアップされて夜空に映える雄姿は市民の間で「千葉城」の名で親しまれてきた。しかし開館以来30余年を経て建物の老朽化が進み、また建物の構造上から展示室等も手狭になり、空調などの設備の面においても現在の要求を満たすことは困難となった。またおりからの阪神・淡路大地震によって喚起された建物の耐震性においても良好な結果を得ることができなかったため現在の建物の東隣に別館を建設する計画が持ち上がった。

またこれとは別に博物館北側にある崖面が、長年の風雨による浸食により地山が露頭し、崩落の可能性も予見されたため、これを防止するための擁壁工事も併せて行うこととなった。

博物館の一带は中世の猪鼻城跡であることは既に周知されており、工事の規模・内容からしても、工事に先立つ発掘調査が不可避と考えられた。埋蔵文化財の保護行政を所管し、かつ郷土博物館を所管する文化課が中心となって市の関係各課と協議を重ねた結果、先の工事箇所の他に電気および下水道配管の切り替えに伴う工事も生じることも新たに分かり、調査の対象範囲が確定された。「発掘期間中にあっても博物館の休館期間は、最小限にとどめたい。」とする市教育委員会の基本姿勢のもと、工事工程と調査工程・方法等とのすり合わせが行われた。また発掘調査は、財団法人千葉市文化財調査協会が担当することとし、千葉市との委託契約に盛り込まれることとなった。

第2節 遺跡の位置と諸環境

猪鼻城跡は、千葉県庁や千葉地方裁判所が立ち並ぶ千葉市の中心街からほど近い台地上に占地しており、そのうち今回の調査対象となったのは千葉市中央区亥鼻1-23-1を代表地番とする約4,400㎡の範囲である。周辺には県文化会館、県立中央図書館、千葉大学医学部施設等々が集まり文教地区をなしている。

千葉市の中心市街地には、市内高田町地先に源を発し、市域を東から西に貫流して東京湾へと注ぐ市内最大の流域面積を持つ都川が流れる。河口からほど近くに架かる「都橋」あるいは「吾妻橋」の周辺では、左岸に県庁、右岸には裁判所等の役所建物が並んでいる。県庁の裏手には衛兵のように視線を遮る小高い丘が見える。古くより猪（亥）鼻台あるいは猪鼻山と呼ばれ、台上からは北方に広がる千葉市街を一望のもとに見下ろすことができる。この台の先端部には周囲を土塁で囲んだ「主郭」（近世城という本丸）と考えられる区画が認められ、この区画に接した南東に千葉市立郷土博物館が



第1図 遺跡の位置と周辺地形図 (国土地理院昭和63年発行「千歳西部、千歳東部、五井、蘇我」1/25,000)



第2図 主要な周辺遺跡分布図(陸軍参謀本部 明治15年測量「千葉町」の一部を1/25,000に縮小)

1. 猪鼻城跡 2. 猪鼻城跡(調査地点) 3. 院内遺跡 4. 砂子遺跡 5. 新畑遺跡 6. 戸張作遺跡 7. 浜道遺跡
8. 石神遺跡 9. 高島城跡 10. 舌田遺跡 11. 東田遺跡 12. 草刈場貝塚 13. 東辺田遺跡(荒屋敷北貝塚)
14. 荒屋敷西遺跡 15. 荒屋敷貝塚(国指定史跡) 16. 台門貝塚 17. 姥ヶ作遺跡 18. 車坂遺跡 19. 宝導寺台遺跡
20. 天神台遺跡 21. 山王遺跡 22. 向ノ台遺跡 23. 蛤谷津遺跡 24. 立本南遺跡 25. 聖人塚古墳
26. 矢作貝塚 27. 井台遺跡 28. 尾久喜遺跡 29. 城の腰遺跡 30. 新山遺跡 31. 千葉寺遺跡 32. 新久古墳
33. 新久古墳 34. 月ノ木貝塚(国指定史跡) 35. 中野台遺跡 36. 鷲谷津遺跡 37. 観音塚遺跡 38. 松ヶ丘遺跡
39. 山王遺跡 40. 大北遺跡

所在している。

地形的に見ると東京湾の海岸低地に面する下総台地の西縁に位置し、台上での標高は20m前後を測る。埋め立て前の海岸線は約1km西側に位置している。海岸低地との境は海食崖をなし、また北側でも海蝕と都川の開析によって急峻な崖面が形成されている。南側には海側から進入する小さな谷津が入り、北あるいは西側ほどではないにしろ一応の台地の区切りとなる。東側のみが唯一基部となる台地と繋がっているものの東北側の大学附属病院新館を乗せる台地とか、南側の県立千葉高校や千葉寺が築かれている台地との接合部分では北と南の2方向から谷津が進入しネック状の地形となる。つまり台地上で南北約300m東西約830mの約25,000㎡が他の地区から隔離された城の範囲と考えられる。

周辺遺跡としては、本遺跡の北側には都川あるいはその支流である霞川によって形成された沖積低地が発達しており、東京湾への谷口部に生じた砂州上の微高地でこそ院内遺跡-No.3-（旧地形図上の遺跡番号、以下同じ）が確認されるものの、それ以外に明確な遺跡はとらえられない。しかしこの微高地上には中世千葉氏と関連する町並みが発達していたことが文献等に記述されており、本来であれば関連する遺構がとらえられるはずである。ところがこの旧町並みはその後の旧千葉町を経て、さらには現在の市の中心市街地へと変貌を遂げたため遺跡として特定することが困難な状況となっている。

翻って、この谷底低地を取り囲む台地上には数多くの遺跡が所在している。すべてを網羅することは出来ないが主立ったものをあげると東北東へ2.5kmほどの地に、高速道路建設の際に開削工事を中断させ、トンネルを削り抜かせることで地上の遺構群を現状保存した国指定史跡の荒屋敷貝塚-No.15をはじめ縄文時代の大貝塚群が多数分布し「貝塚町貝塚群」と総称される一画があり注意を引かれる。猪鼻城跡で検出された弥生、古代、中世と同時代性を持ち、かつ調査履歴のある遺跡を北から順にあげると、弥生時代から平安時代に及ぶ集落跡と方形周溝墓・古墳が検出された戸張作遺跡-No.6-、弥生時代から古墳時代にかけての集落跡と主体部より石枕と立花が出土した東寺山石神2号墳などの古墳群よりなる石神遺跡-No.8-、弥生時代から平安時代にかけての集落跡と中世城跡からなる高品城跡遺跡-No.9-などが知られる。また本遺跡からは東南東に約2kmの都川が本谷と支川都川とに分岐する台地南縁には縄文時代中期と弥生時代から平安時代におよぶ集落跡と中世城跡からなる城の腰遺跡-No.29-が立地し、また支川を隔てた西側の河岸段丘上には弥生時代の方形周溝墓が調査された星久喜遺跡-No.28-が遺されている。本遺跡を乗せる台地と連続する台地上にも数多くの遺跡が立地している。南へ約1kmの地には、和銅2年(709年)の開基といわれる縁起を持ち現在にまで法灯を伝える千葉寺-No.31-があり、また寺の北側には当財団が調査し、古墳～平安時代の集落跡と中世溝が検出された新田遺跡-No.30-がある。南東の方角にあたる県立青葉の森公園内には、旧石器時代の石器集中地点と弥生時代～古墳時代にかけての集落跡さらには奈良時代以降の墳墓群よりなる新久遺跡-No.32-があり、新久遺跡の南には、1辺9mを測る方墳で内部に凝灰質砂岩の切石積み横穴式石室を持つ新久古墳-No.33-が所在する。なお千葉寺と新久古墳については千葉市の史跡に指定されている。

分布図の作成に際しては、調査履歴を持つものを優先し、遺跡としての実体が不明なものについて意図的に除外したため遺跡分布はやや散漫な印象を与えるが、それらをも含めたものとなれば谷津に面した台地上には何某かの遺跡が立地しており、遺跡の分布密度がかなり高い地域と見なすことが出来る。

第3節 猪鼻城跡と地域に纏わる主な記録

南関東でも有数の名族である千葉氏に関わる猪鼻城跡については数多くの歴史的資料遺されている。

それらを大略すると、万寿四年(1027年)房総に乱を起こした平忠常から数えて5代目にあたる千葉介常重が、大治元年(1126年)上総国大椎城(現在の千葉市緑区大椎町)からこの猪鼻の地に居城を移したと伝えられ、以後一族の消長と歩みを共にしながら、享徳四年(1455年)一族の内紛によって落城にいたるまでの約330年の間、千葉氏宗家の本城として用いられたとされている。

下記に時代順に記載された事象を列記することとする。ただし文献の中には、千葉氏にとっても特別な意味をもつ城でもあることから様々な配慮のもとに年代を遡って記載されたのではと指摘されている文献もあるが、ここでは触れない。

- 大治元年(1126) 千葉介常重が土気町大椎城から猪鼻城に移り、一族の守護神「妙見尊」を池田郷堀内の千葉寺の宮に移す。 【千葉大系図】
- 大治二年(1127) 千葉寺内の守護神を常重の三男が盗み出されるが、間もなく探し出されて城中の主殿にあらためて奉られる。 【千葉妙見大縁起】
しかし伊勢神宮の神託により北斗山金剛授寺(現千葉神社)の境内に妙見宮を造営して遷座した。 【千学集抜粹】
- 治承4年(1180) 石橋山の合戦に敗れ安房に逃れた源頼朝が、使者として藤九郎盛長を千葉介常胤に使わす。 【吾妻鏡】
下総国香取郡千田庄の領家判官代の平親正(平忠盛の婿)が千葉常胤を攻撃するために結城野・結城浜(猪鼻城北西の低地)に進出し、常胤の孫成胤と合戦となる。 【源平闘諍録】
【千学集抜粹】
源頼朝が千葉館に来訪し、妙見宮・八幡宮に参詣する。 【千学集抜粹】
【紙本着色千葉妙見大縁起絵巻】
- 建武2年(1335) 足利尊氏側の風将で千葉氏の支族でもあった相馬親胤と千田大隅守(胤貞)の連合軍が新田義貞の軍に従軍して上方にいた千葉貞胤の居城「下総国千葉城発向之時・・・」を攻める。 【相馬文書】
- 享徳4年(1455) 千葉宗家の重臣原胤房が千葉氏の支族である馬加康胤と結んで猪鼻城を攻略する。千葉胤直親子は多古・志摩両城に逃れるものの包圍されて自殺し、千葉氏宗家は滅亡。 【鎌倉大草紙】
(しかし、守護神である「妙見尊」は北斗山金剛授寺尊光院(現在の千葉神社)に留め置かれたため、以後、千葉氏の本宗家は元服の度に佐倉から尊光院に出向くことになる。)
馬加康胤流が千葉介を名乗る。

文明3年(1471)頃馬加康胤の子輔胤が下総国内の統一に成功し、本拠を本佐倉城に移す。

永正3年(1508) 下総の千葉氏一族が「千葉井花ニテ打死」とある。 【本土寺過去帳】

天正18年(1590) 豊臣秀吉の小田原城攻めにより、北条氏の属将であった千葉重胤ら千葉一族も滅亡。

その後、千葉氏についての記述は途切れるが、延宝二年(1674)水戸光圀による房総を経て鎌倉まで史料採取の旅についての紀行文『甲寅紀行』には「古城の山根に水あり、…(東照宮御茶の水)右の方に松の森あり…(東照宮御旅館の跡なり)…」、4月27日には「妙見寺の東に、千葉屋敷あり。」などの記述が見える。

改訂房総叢書刊行会1959『改訂房総叢書第4号地誌(二)日記紀行』

享保(18世紀前半)の俳人成美は「若菜摘む人さえ見えず千葉屋敷」の一句を残す。

幕末に入ると再度歴史の表舞台に登場してくることになる。

幕末期の国際情勢の緊張が高まるにつれ東京湾の警備が重要な課題となった。千葉周辺は17世紀後半には佐倉藩領(『続々群書類従』に納められている「寛文印知集」等)に組み込まれており幕府は安房・上総の海岸警備を佐倉藩に命じることになる。

文政8年(1825) 佐倉藩は房総警備のため、「猪鼻山を保塁とし、仮屯所を山と御殿跡に建設し、ここにつとめる人達のために居小屋(住居)を建て、上総富津にある幕府の陣屋の代官からの要請により海路出動する拠点とし、その勤番を命じられた面々とその子弟のための教育機関として千葉猪鼻山問所(猪鼻山問所は佐倉藩藩校である「成得書院」の分校として「成得南庠」と呼ばれた。)を開設した。」という。

天保15年(1844) 幕命により役所は閉鎖され、佐倉藩では居小屋の跡を塩役所と炭御用の仕事を行う場として使用した。 【佐倉市史 巻2】

明治44年(1911) 刊行された『千葉街案内』によれば「千葉県師範学校下より、東北に向ひて猪鼻山上なる千葉城址に登る可き険坂あり。これを池田の坂と云ふ。坂路の幅五尺に足らずして其長さ約二町、崎嶇羊腸として頗る険峻なり伝へ云ふ、これ往年千葉城の掃手にして、城内より池田の郷に通ずる間道なりしを以て池田の坂と名づくと。此坂を登りて城址に達せむとすれば、其左方に数頃の畑あり、試みに此畑を発掘すれば赭黒色せる米粒形の小石を出すことあり。里人の口碑に曰く、これ康正元年千葉城の兵火に罹れる時、兵糧米化して石となりしものなりと。伝へて以て今日に来るまで之を奇蹟と称す。」とある。

明治以後のこの地域の土地利用については、地図等に詳しく別表に取りまとめることにする。

第1表 地図等から見た土地利用変遷一覧

西暦	和暦/現況	主郭部分	現様土館	増築部	県文化会館	図書館	千葉大医学部	医学部(大千部)	出典
1881	明治14年	(城跡の記号)			畑地		畑		千葉市街地図
1882	明治15年	千葉城跡			畑地		(鳳皇寺・高得寺境内との間に畑地)		千葉市街地図
1889	明治22年						県立千葉病院		
1890	明治23年						県立千葉病院	第一高等中学校医学部が新築移転	
1906	明治39年	猪鼻台宅	地		千葉県師範学校	附属小	県立千葉病院	千葉医学専門学校	美耐千葉市街図
1911	明治44年	猪鼻台			師範学校		県病院	医学専門学校	千葉郡地図
1916	大正5年	公園地宅	地宅		千葉師範学校		県立千葉病院	千葉医学専門学校	地番簿・評定千葉町全図
1918	大正7年3月	猪鼻台公園	紅谷別荘	内海館	千葉師範学校	付属小			千葉市街実測図
1921	大正10年7月		紅谷別荘	内海館	千葉師範学校	付属小			千葉市街実測図
1922	大正11年						千葉医学専門学校附属病院		
1927	昭和2年	猪鼻公園	南側に建物		千葉師範	附属小	大学附属病院		鳥籠図
1934	昭和9年								美耐地図
1935	昭和10年	猪鼻台							市街図
1936	昭和11年	猪鼻公園			千葉師範	附属小	医科大学附属病院	医大新館	地割図・市街図
	昭和11年3月	亥鼻台公園							
	昭和11年8月	猪鼻台公園					千葉医大旧附属病院	千葉医大新附属病院	
1940頃	昭和15年頃	猪鼻公園			千葉県師範学校	付属小	大学附属病院	大学附属医院	職業別明細図
1943	昭和18年		(遺国神社移築)						
1958	昭和33年頃	猪鼻公園	遺国神社	民家(旅館)	千葉大学教育学部と付属中	付属小	大学病院	千葉医大附属病院(旧名称か?)	地形図
1965	昭和40年～				千葉大学教育学部と付属中				
1967	昭和42年		(郷土館開館)						

主に1993年「絵にみる国で読む千葉市図誌」より作表

以上のごとく猪鼻城(千葉城)にまつわる記述は諸処に見受けられる。しかし、近世段階の記述であっても現在この地にこれを裏付ける痕跡は遺されていない。

第4節 城の区画割りについて

猪鼻城跡の縄張りについては、調査歴に乏しくまた開発によって既に大きく改変された場所も多いことから全容を復元するには問題も多い。ここでは今回の調査資料をも加味して猪鼻城跡(千葉城跡)について言及している築瀬裕一の意見(築瀬1998)を参考とした。築瀬の示す第3図によれば、台地西端の土塁で囲まれたⅠ郭を主郭とし、この土塁が開口する東側の現在博物館建物の立っている台地を、今回の調査結果によって得られた溝(堀)によって東西に分けⅡ郭とⅣa郭としている。Ⅰ郭の土塁越しの南側に一段下がった現在茶店が置かれている小規模な土曲がありこれをⅢ郭とする。Ⅳa郭の南から東にかけての鉤の手状の一段低い部分はⅣb郭、さらにその南の一段下がった台地先端部をⅣc郭とした。都川に面した地区は、千葉大学医学部の敷地となっており中央部入る大きな谷によって一応区切られ、この範囲を中程にある谷によりⅤ・Ⅵ郭に分けている。築瀬によれば猪鼻城(千葉城)の基本的な縄張りは、台地上に郭を連続させた「連郭式」とし、亥鼻公園側が「内城」、千葉大学医学部側が「外城」に相当するという。



第3図 猪鼻城跡概念図

盗瀬1996より転載加筆

第5節 調査の経過と方法

発掘に際しては、管理用道路下に埋設される電気と下水道の共同配管部分をまず調査する事とし、表土及び舗装部分については重機で除去した後、遺構の最終的な確認面までを手掘りで掘削した。これと平行して館の北側から東側にかけての土手状に残された範囲の樹木伐採と表土の除去を行った。しかし土手の部分には博物館機能の維持に不可欠な浄化槽や高圧電線が埋設されており、休館期間を最短にするため本調査の着手は、下水・電気配管への切り替え工事が完了するのを待つこととした。

調査区の設定は、下水・電気配管部については任意でのトレンチ調査としトレンチの中に基準線を通し、これを基線に1m方眼を設定し区割りを行い遺構の図化及び遺物の取り上げに用いた。北側および東側地区については、現状の地形にそって任意の基線を設け、これを基準に東西と南北方向に10m刻みの方眼を設定し、この10m×10mの1グリッドを大グリッドと呼び、さらにこの中を5m×5mのグリッドに4分割し、小グリッドとした。グリッドラインの呼称は、北から南へH・I・J・・・の大文字のアルファベット、また西から東へは、11・12・13・・・アラビア数字をあてた。4分割された小グリッドには、北西区画をa、北東をb、南東をc、南東をdの小文字のアルファベットを付した。したがって1小グリッドは、H-19-a等として表記した。遺構の実測及び遺物の取り上げについては、この小グリッドを基準として実施した。

第2章 調査の成果

第1節 調査の概要

1. 配管部での調査

博物館北西の現在資料搬入用通路に設けたIトレンチでは、採石混じりの表土を20cmほど掘り下げるとハードルーム層が露出した。トレンチの最北端で主郭を載せる台地の先端部と博物館が載る台地(2郭)とを区切る堀の落ち際を検出した。しかし後日土手状の高台部を調査した折りに検出された4条の堀についてはいずれも確認することはできず、この通路は博物館建設時に大きく開削されて出来たものと判断した。

館の西側に配置したIIトレンチでもIトレンチ同様の堆積状況を示していたが南端近くで北東から南西へと抜ける薬研堀の溝1条を検出した。館東側の管理用道路沿いに入れたIIIトレンチ北半部で重複しあう箱薬研の溝(深さと幅からすれば「堀」とすべきか)3条が検出され、最も北側の溝からは覆土中に掘り込まれた土壌の端部が検出され、土壌の覆土には人骨片が混じり墓塚である可能性が高い。またこの溝等から少し南から東西方向に走る薬研堀の溝1条が検出された。ただいずれの遺構も調査トレンチの幅が1mあまりと狭く、溝によっては埋土の状態が不安定で土砂崩落の危険があるため底面まで掘り上げることができないものもあり、したがって今回の調査では、溝の存在を確認したにとどまり遺構細部については他日を期すこととなった。IIIトレンチの最南端ではさらに東南に向けて下降する傾斜面を検出することが出来た。この傾斜面の堆積土中からは比較的古めの煉瓦片などが出土した。しかしこの傾斜面は予想以上に深く底面等を確認することは出来なかった。この傾斜面の性格は東南側に存在したテラス(昭和33年の地形図では護国神社と千葉大学の東南側に一段下がった平場が表現されている。)との間の斜面をあらわすものと考えられる。この一段下がった平坦地を造成した時期は、千葉大学ないしはそれに遡る師範学校の段階であろう。

なおIIIトレンチは、基本的に既設の埋設管に沿って再掘削したため、良好な土層堆積を知ることは出来なかった。

2. 平坦部での調査

平坦部での調査は、館北側の崖に面した細長い土手状の部分と館東側の方形に近い部分の2カ所に分けて記すことが出来る。

北側の土手状の部分は、当初地形図で見ると土塁の可能性も考えられた。しかし調査の結果、この部分は先の配管部の調査の際にも触れたように、本来平場であったものが、博物館建設時に資料の搬入用通路を設けるために大きく掘り下げ、その結果土手状に残されたものであることが判明した。

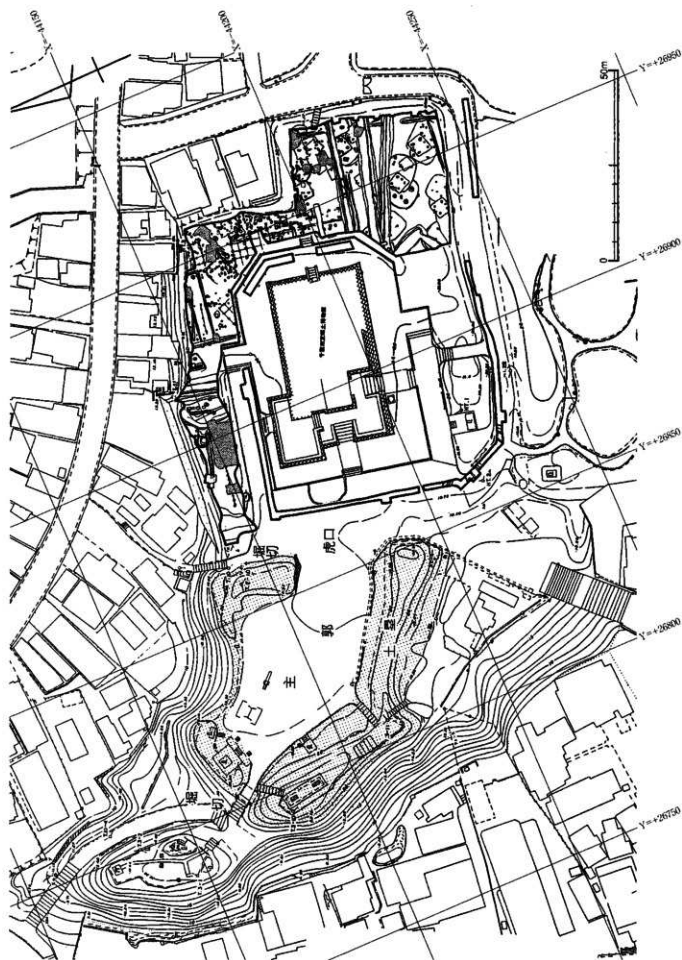
北西端部では竪穴状遺構(21号竪穴として後述するが、遺構を完全に掘り出すことは出来なかったため全容は不詳。)の一部が確認され、覆土中からは近世から近代のものと思われる遺物が出土した。この竪穴西端の踏み固められた底面下から主郭とII郭とを区切る堀の落ち込みを確認することが出来た。ここから約10m東南側で今回の調査で唯一の地下式土壌が検出された。しかし崖沿いの遺構上部は斜面崩落により大きく削り取られている。このことから台地としてはもう少し谷側にせり出してい

たことは間違いない。中央付近からは箱薬研と薬研堀のそれぞれ2条の併せて4条の溝が検出された。同じ断面形状の溝はそれぞれ一定の間隔で平行に配置されており、それぞれ「二重堀」として設置されたものと考えられる。箱薬研と薬研堀の関係ではそれぞれ重複関係を持ち、どちらも薬研堀が箱薬研を切っていることが確認された。最も西の溝では崖面に開口する虎口状の遺構を伴うが、崖の崩落による削平を受け、またこの場所には博物館の浄化槽が埋設されていたことなどから遺構説明の項で述べる以上に明らかにすることは出来なかった。調査区の北東コーナー付近では柱穴の堀り方底面に礎石を据えた大型の掘立柱建物の一部が確認され、また周囲からも同様な掘立柱建物や溝さらに多数のピット群が検出された。しかし遺構の多くは、博物館建設時の造成や民有地側からの開削を受けており全容を窺える遺構は僅かしかない。

館東側では比較のまとまった調査範囲を確保することが出来た。しかしやはり西端は博物館通路により掘り下げられ、東端では民有地と市道および通路により切り落とされて崖状を呈している。台上と最も低い道路面とは3mほどの比高差を持ち、縁辺に沿って検出された遺構はいずれも断ち切られた状態であり、本来の台地はさらに東に延びていたことが判明した。

調査区の中程には5条の溝が東西に走り、中央部の1条は幅も広く踏固された面もあることから道遺構と考えられた。また最も南側のものは薬研堀を示しているが溝の埋没中の窪みに沿って硬化面が確認され道として再利用されたものと考えられ、さらにこの南側の道と中央の道は、西端で交差し南側の道の方がより古いことが判明している。調査区の北西側ではL字状に屈曲した箱薬研の溝が検出された。従来博物館の周囲、南西側にも土塁状の高まりが残されており、崖側の土手状の高みと併せて土塁の可能性も考えられてきた、しかし今回検出されたL字の溝は、いわゆる土塁の下部にもぐり込むことから土塁の成立時期そのものに疑念を抱かせる結果となった。

また東側の地区では弥生時代の竪穴住居や奈良～平安時代の竪穴住居も多数検出されているが、ここで興味深いことは薬研堀の溝から北側で検出された各遺構は床面近くまで削平され、砂質気味の表土直下で遺構確認面でもあるローム面となるのに対し、南側では表土直下に褐色土が残り遺構の保存状態も良好であったことである。したがって溝の北側ではある時期に大規模に削平されたことは明らかであり、またこの砂質気味の土層は先に述べた「二重堀」の埋土とも類似することから造成の時期が中世にほぼ限定されると考えられた。ただ削平の範囲が薬研堀の溝以北なのかあるいは南側にも及ぶのかについては特定することは出来なかった。なぜなら溝の南側は緩やかに下降する斜面地形であり、遺構の保存状態が良かったのは削平が下面まで及ばなかった可能性もあり、また表土除去の段階では表土直下で北側からの連続する平坦面を意識することが出来なかったことに起因する。ちなみに東側地区での遺構確認面の標高を縦断的に押さえると標高20.2mの高さから±20cmほどしか変化しておらず、中世段階で平坦面が必要であったならば南西側を大きく削平する必要が無かったのかも知れない。



第4圖 猪鼻城跡地形測量圖

第2節 検出した遺構と遺物

1. 弥生時代

猪鼻城跡では、博物館東側の調査区域から弥生時代中期を中心とする竪穴住居跡11軒が検出された。遺構の広がりは、東側調査区のほぼ中央から検出された1号住居を北限とし南側に向かうにつれ次第に遺構数が増加する傾向が認められた。ただし1号住居は、床面の一部と柱穴・炉の検出等によってかろうじてその存在が確認されたように、この付近から北側にかけての区域では中世段階と考えられる大規模な造成によりハードルーム面まで削平されている。したがって掘り込みの浅い遺構があったとしても既に消失してしまった可能性は否定できない。

弥生時代での住居以外の遺構については、調査区の南端を東西に横切るV字状の断面をした溝（14号溝）に「環濠」の可能性を考慮して調査にあっていたが、発掘時点での所見と整理作業の時点で溝の覆土中から小破片ではあるが古墳時代以降の遺物が多数混入していることが確認されたことから当該時期の遺構ではないと判断した。

(1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（旧第12号竪穴住居跡）（第5・6図）

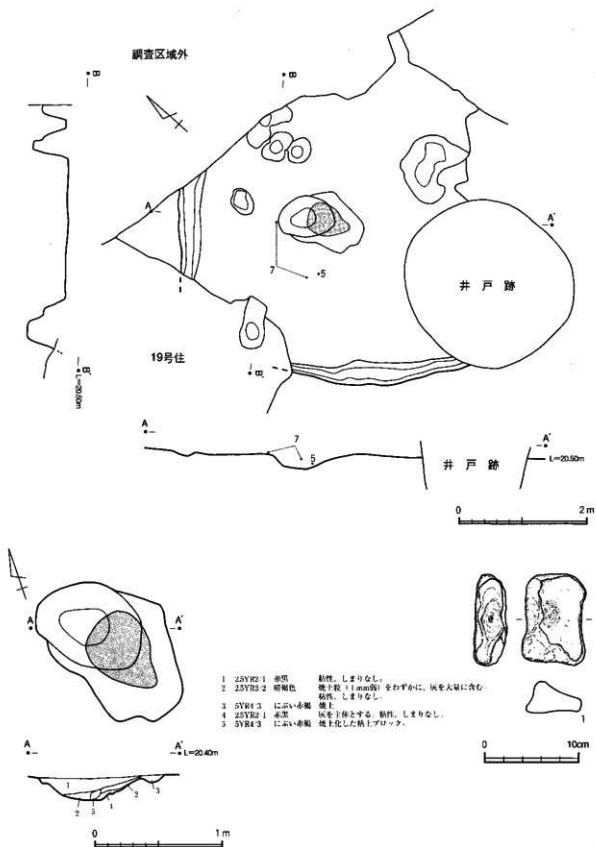
K-19-dグリッドに主体を置く。住居の北半部は調査区外にかかり、また西側は19号住居によって切り取られる。南～東側にかけては防空壕と言われる落ち込みと最近まで使われていた井戸により大きく壊されている。さらに遺構上部は中世段階と考えられる造成により大きく削平され、周溝および床面・炉・柱穴等によってかろうじて住居の存在を確認することができた。

遺構の規模と形状は攪乱のために全体を窺うことは出来ないが、残存する範囲での主軸長は4.5mを測り、本来は5mを越える予想され、また四隅が隅丸を呈する方形プランと考えられる。柱穴については南側の1穴は井戸跡のために消滅しているが、4穴の主柱穴を持っていたと考えられる。柱穴は、長軸長50～80cm深さ60cmを測る。竪穴の掘り込み（壁高）は床面直上までおおよそ造成のために確認できない。炉は主柱穴に囲まれた内側に配され、長軸長86cm短軸長65cmの洋梨形を呈し深さ18cmを測る。

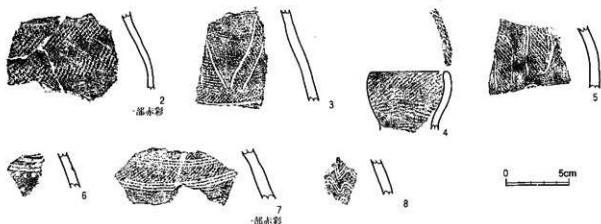
出土遺物は、石皿片と弥生式土器片7点がある。第6図5,7の土器片は床面のほぼ直上から出土した。

第2表 第1号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法重cm 口径	は元径 底径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	石	器	凹石	長さ 9.6	幅 0.7	厚み 3.4		
2	弥生土器	甕					LR単節斜縄文による横線文 一部赤彩	
3	弥生土器	甕					LR単節斜縄文とヘラ描きによる沈線区画 結紐文	
4	弥生土器	甕					外面および口唇部にLR単節斜縄文	口縁部
5	弥生土器	甕					LR単節斜縄文とヘラ描きによる沈線区画 結紐文	
6	弥生土器	甕					ヘラ描き沈線文と刺突文	
7	弥生土器	甕					LR単節斜縄文 3本節曲による直線文 一部赤彩	
8	弥生土器	甕					3本節曲による波状文	



第5図 第1号竪穴住居跡と炉と遺物実測図



第6図 第1号竪穴住居跡遺物実測図

第2号竪穴住居跡 (旧第21号竪穴住居跡) (第7・8図)

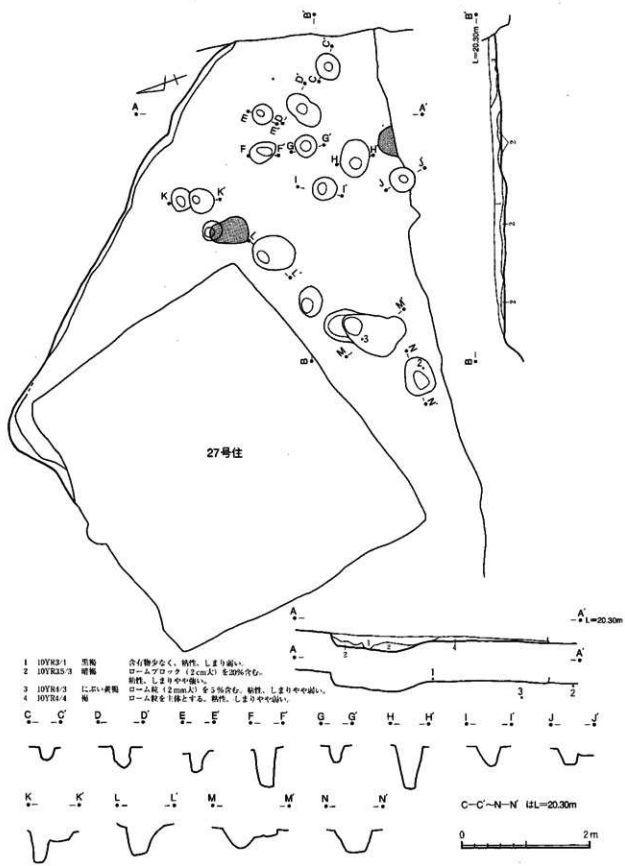
N-21-cグリッドに主体を置く。住居の南側は調査区南端の傾斜地にかかり、また西側は27号住居によって壊されている。27号住居を間に挟んでさらに西側に位置する7号住居との新旧関係は確認できなかった。東側は17号溝により壊され、南側には16号溝が走る。周溝は検出されず、直線的に延びる北側壁面と床と思しき平坦面及びこの面上に残された焼土痕跡を持つ。なお焼土については明確な掘り込みを伴わないため炉とは考えられない。柱穴については適当な位置関係を有する規模・形状のものは認め難いため検出したすべてのピットを図示した。住居として表示したが竪穴遺構とすべきかもしれない。

遺構の規模は、削平等のために判然としなが、東西長7m以上、南北長6m以上、深さは0.3mを測る。

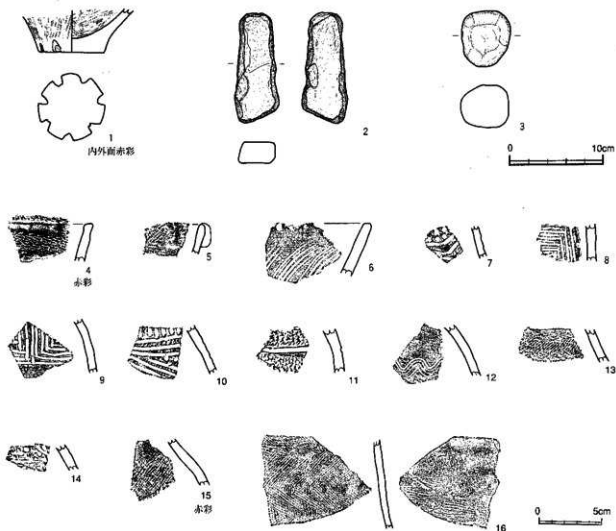
遺物としては、石製品2点と土器片15点を図示したが、第8図1の壺底部が床面直上から出土した以外はいずれも覆土一括の遺物である。

第3表 第2号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量 口径	口徑 底径	口徑 器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	弥生土器	甕	-	6.6	4.5	5YR6/4にぶい橙 長行、焼成長	内外面に丁寧なヘラ磨き 底面に7箇所のかかり入り 内外面赤彩	底部のみ
2	石	器	砥石	長さ 11.5	幅 厚み 4.8 2.3			
3	石	器	磨石	長さ 5.9	幅 厚み 5.2 4.5			
4	弥生土器	壺					口唇と口縁外面に2段のS字状結節文 結節文等の 上下および口唇・内面に赤彩	口縁部 後期土器
5	弥生土器	壺					棒状浮文貼付 LR単節斜縄文	口縁部
6	弥生土器	薬or鉢					口唇部をヘラ状工具による刻目 ハケメ調整後に4 本櫛歯による文	口縁部
7	弥生土器	壺					ヘラ状工具による沈線と凹形刺突	
8	弥生土器	壺					ヘラ状工具による重四角文	
9	弥生土器	壺					ヘラ状工具による重四角文	
10	弥生土器	壺					ヘラ状工具による沈線文と刺突文	
11	弥生土器	壺					縦線文	
12	弥生土器	壺					4本櫛歯による波状文	
13	弥生土器	壺					LR単節斜単節斜縄文 S字状結節文	
14	弥生土器	壺					ヘラ描き?	
15	弥生土器	壺					LR単節斜縄文 赤彩	
16	弥生土器	薬or鉢					表裏をハケメ調整後、表は5本櫛歯による横羽状文	



第7図 第2号竈穴住居跡実測図



第8図 第2号竪穴住居跡遺物実測図

第3号竪穴住居跡 (旧第22号竪穴住居跡) (第9～11図)

東側調査区の中央やや南よりのL・20-dおよびM・20-bグリッドに主体を置く。住居の北と南の両端を、東西に並行して走る12号溝・13号溝の2条の中世溝によって切りとられる。また竪穴東側には28・29号住居が後世に築かれたため、本遺構としては竪穴の西辺の一部を残して大きく壊されている。柱穴は竪穴西側の2本については本住居床面上で確認できたが、北東柱穴については11号溝の底面下から、また南東柱穴は北側肩部を28号住居により壊されながら検出された。炉跡は4柱穴を結んだ内側に位置し、わずかな窪みと焼土の堆積および被熱した遺構面を確認したが、本体部分は28号住居によって既に切り取られていた。

規模と形状は、両端の分かる東西方向で長さ8.4m、深さ0.4mを測り、隅丸方形を呈するものと考えられる。柱穴は長軸長150cm前後、短軸長100cm深さ100cmの楕円形を呈し、掘り抜き痕が認められる。南西柱穴覆土上部には炉からの焼土が混入していた。炉は確認できた範囲で径50cmほど、深さ5cmの皿状の窪みとなる。周溝は幅30cm深さ20cmを測る。

遺物は1・3・4が床面のほぼ直上から出土し、2・5は南西柱穴の掘り抜き痕からの出土である。

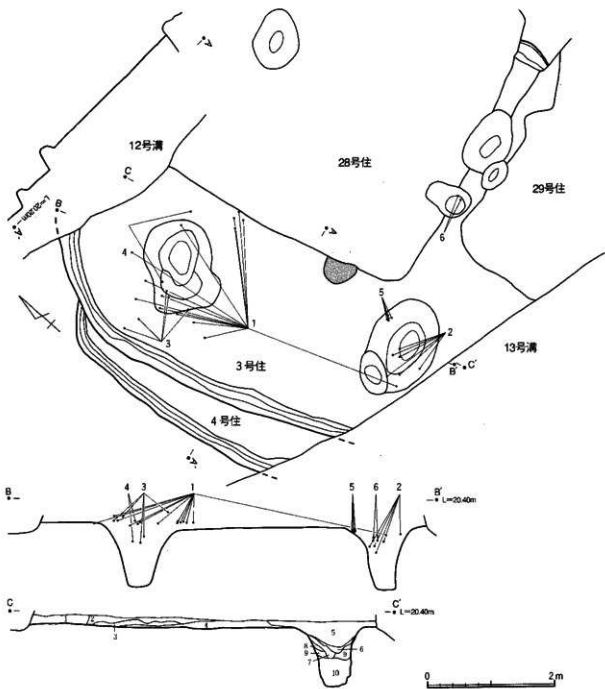
第4表 第3号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	注量cm. 口径	口徑	底徑	器高	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	弥生土器	壺	29.8	—	18.3		5YR3/3暗赤褐 長石 焼成良	口唇部を交互に指頭押捺 胴部外面と口縁部内面をハケム調整	底部欠
2	弥生土器	壺	—	7.8	21.0		10YR4/2灰黄褐 焼成良	ハケム調整後底面も含めて粗いヘラ磨き	体部1/2残
3	弥生土器	壺	—	7.0	13.8		7.5YR6/3にぶい 褐 長石、焼成良	ハケム調整 木の葉底	底部のみ
4	弥生土器	鉢	18.6	—	10.2		5YR3/黒褐 長 石、焼成良	口唇部にヘラ状工具による刻目ハケ目調整	口縁部1/3 残
5	弥生土器	壺	8.6	—	8.2		7.5YR5/4にぶい 褐 長石、焼成良	口唇部と口縁部にLR単筋斜縄文	口縁部のみ
6	弥生土器		—	—	7.5		7.5YR5/4にぶい 褐色 規成やや良	ヘラ撫で	胴部のみ
7	弥生土器	甕or鉢						表裏ハケム調整後 口唇部を交互に指頭押捺 胴部に浮文貼付	口縁部
8	弥生土器							LR単筋斜縄文 ヘラ状工具による沈線区画	
9	弥生土器	壺						ヘラ描き文 刺突文	
10	弥生土器	壺						磨きによる弱い波状文の下位に刺突文を施す	
11	弥生土器	壺						ヘラ描きによる弱い波状文 一部赤彩	
12	弥生土器	壺						LR単筋斜縄文 貼付隆帯に刺突による列点文	
13	弥生土器	壺						縄文を地文にヘラ描き文	
14	弥生土器	壺						LR単筋斜縄文の後ヘラ描きによる沈線区画	8と同一 個体
15	弥生土器	壺						ヘラ描きによる弱い波状文	
16	弥生土器	壺						LR単筋斜縄文を地文にヘラ描き文 刺突文	
17	弥生土器	壺						4本櫛歯による文と2本1組の棒状浮文貼付	
18	弥生土器	壺						縄文施文後4本櫛歯による波状文	
19	弥生土器	壺						3本櫛歯による波状文 丁字文	
20	弥生土器	壺						LR単筋斜縄文 ヘラ描きによる直線と円弧状文 円形刺突文	
21	弥生土器	壺						ヘラ描きによる三角文	
22	弥生土器	壺						LR単筋斜縄文 ヘラ描き文	
23	弥生土器	壺						LR単筋斜縄文 5本櫛歯による棒描き文	
24	弥生土器	壺						ヘラ描きによる沈線文	
25	弥生土器	壺						半截竹管による三角文	
26	弥生土器	壺						LR単筋斜縄文をヘラ描きで沈線区画 結縷紋	8・14と同一 個体
27	弥生土器	壺						ヘラ描きによる弱い波状文	
28	弥生土器	壺						LR単筋斜縄文をヘラ描きで沈線区画 結縷紋	
29	弥生土器	壺						LR単筋斜縄文 4本櫛歯による波状文	
30	弥生土器	壺						4本櫛歯による横羽状文	
31	弥生土器	壺						ヘラ描き文と刺突文	

第4号竪穴住居跡(旧第23号竪穴住居跡)(第9図)

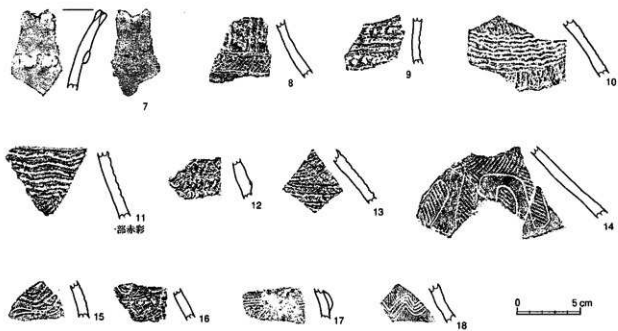
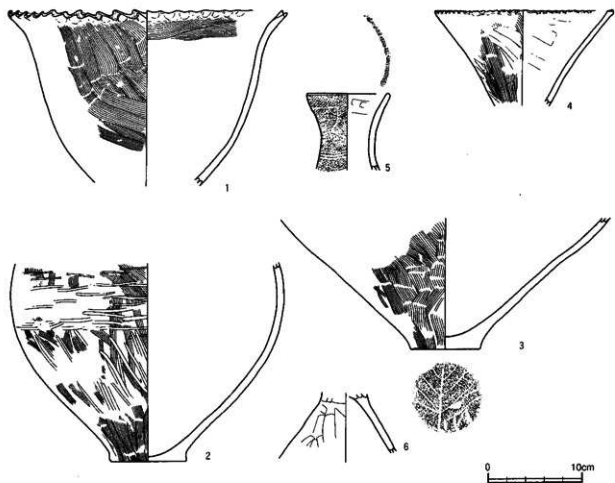
4号住居は先の3号住居とほぼ同位置、M-20-bグリッドに所在する。本住居は西側以後から掘り込ま3号住居とほぼ重なり合っており、また3号住居の方が掘り込みが深いことから、本住居は西側の周溝付近を残すのみで大半を消失している。柱穴は3号住居西辺の2柱穴よりさらに西寄りに本住居のものと思われる柱痕を確認することができた。炉跡は不明である。

規模と形状は、確認された部分で直径5m以上、深さ0.2mであり、周溝は幅20cm深さ10cmを測り隅丸方形を呈すると考えられる。本住居に伴う遺物は無い。

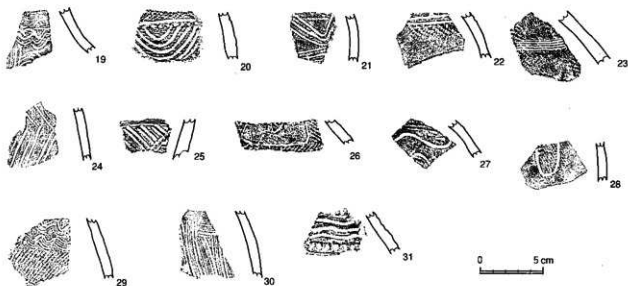


- | | | | |
|----|----------|----|------------------------------------|
| 1 | 10YR2/2 | 黒褐 | ローム状 (2~3mm大) を15%含む。粘性強く、しまり強い。 |
| 2 | 7.5YR2/1 | 赤 | ローム状 (2~3mm大) を10%含む。粘性なし、しまり強い。 |
| 3 | 7.5YR4/4 | 褐 | ロームブロックを60%含む。断面積出し、粘性弱く、しまり強い。 |
| 4 | 10YR2/1 | 赤 | ローム状 (2~3mm大) を10%含む。粘性弱く、しまり強い。 |
| 5 | 7.5YR2/2 | 黒褐 | ローム状 (1~2mm大) を5%含む。粘性強く、しまり強い。 |
| 6 | 7.5YR2/3 | 暗褐 | ローム状 (1~2mm大) を60%含む。粘性やや強く、しまり強い。 |
| 7 | 7.5YR4/4 | 褐 | ローム状 (2~3mm大) を1%含む。粘性やや弱く、しまり弱い。 |
| 8 | 7.5YR2/1 | 赤 | ローム状 (1mm大) を1%含む。粘性、しまり弱い。 |
| 9 | 7.5YR4/4 | 褐 | ローム状 (1mm大) を1%含む。粘性強く、しまり強い。 |
| 10 | 7.5YR4/4 | 褐 | ローム状・ロームブロックを主体とする。粘性、しまり強い。 |

第9図 第3・4号竪穴住居跡実測図



第10图 第3号竖穴住居跡遺物実測図



第11図 第3号竪穴住居跡遺物実測図

第5号竪穴住居跡（旧第27号竪穴住居跡）（第12～15図）

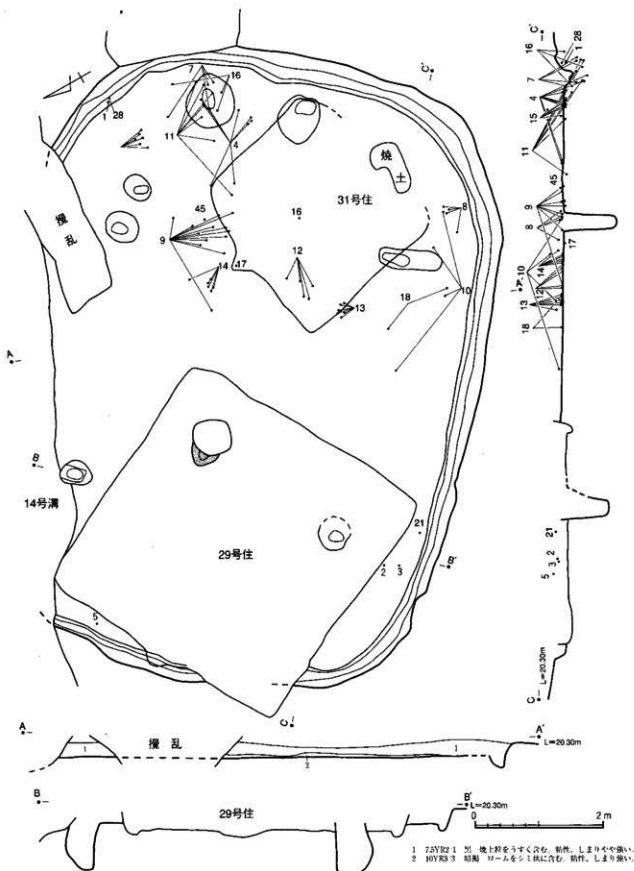
5号住居は東側地区の南半N-20-aに主体を置く。竪穴北側を13号溝により切り取られ、覆土中には奈良～平安時代の竪穴住居跡2軒（29号・31号住居）が掘り込まれている。竪穴西辺では6号住居を壊している。炉跡は竪穴の中央近くに築かれているが、29号住居の東側柱穴により大半を壊されている。

規模と形状は、長軸長9.8m短軸長7.4m深さ0.4mの隅丸長方形を呈する。周溝は、全周幅25cm深さ20cm断面U字形、柱穴は径約50cm深さ60～90cmの主柱穴4本と、竪穴北東コーナー付近に径80cm深さ40cmの貯蔵穴がある。

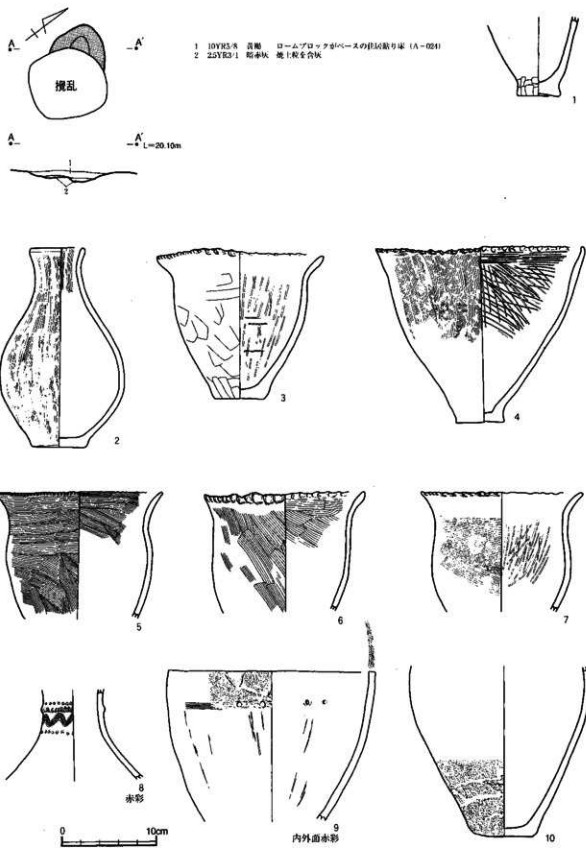
出土物のうち小型の壺2と甕3は、西端の床面直上から完形で出土した。

第5表 第5号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
1	弥生土器	甕	—	4.4	8.4	10YR4/6褐 長石、焼成良	緻密な縦へら磨き調整	底部のみ
2	弥生土器	甕	5.4	5.6	21.2	5YR4/4にふい赤褐 長石、焼成良	緻密な縦へら磨き調整	口縁部一部欠
3	弥生土器	甕	17.2	5.0	16.0	5YR5/4にふい赤褐 長石、焼成良	口唇部を交互に指頭押捺 胴部外面へら磨で内面へら磨き	1/2残
4	弥生土器	甕	22.0	5.0	19.8	5YR5/4にふい赤褐 長石、焼成良	口唇部を交互に指頭押捺 外面ハケム調整 内面へら磨き	2/3残
5	弥生土器	甕	17.3	—	13.5	10YR3/2黒褐 長石、焼成良	口唇部をへら状工具による刮削 内外面ハケム調整	胴上半部のみ
6	弥生土器	甕	16.8	—	13.7	7.5YR6/4にふい橙 長石、焼成良	口唇部を交互に指頭押捺 内外面ハケム調整	胴上半部2/3残
7	弥生土器	甕	16.8	—	12.8	5YR2/1黒褐 長石、焼成良	口唇部を交互に指頭押捺 外面ハケム調整 内面へら磨き	胴上半部1/3残
8	弥生土器	壺	—	—	9.8	7.5YR6/4にふい橙、焼成良	円形刺突 隆帯に帯歯による連続刺突 4本帯歯による波状文 円形刺突 外面赤彩	胴部のみ
9	弥生土器	鉢	21.7	—	15.9	2.5YR3/6暗赤褐 長石、焼成良	口唇部にLR単節斜縄文 5本帯歯による波状文と直線文 2孔1対の焼成前穿孔を両側に持つ 内外面へら磨き内外面赤彩	胴上半部一部残

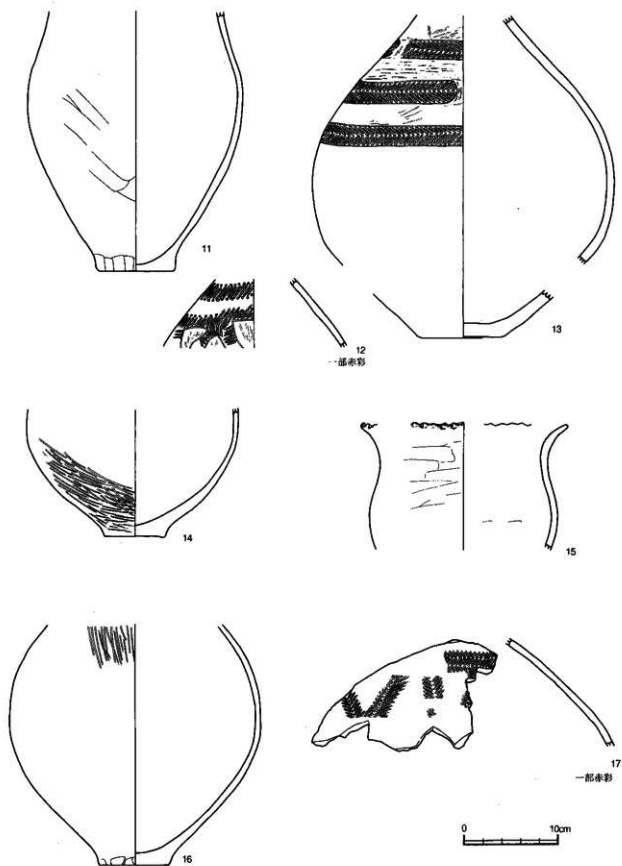


第12図 第5号竪穴住居跡実測図

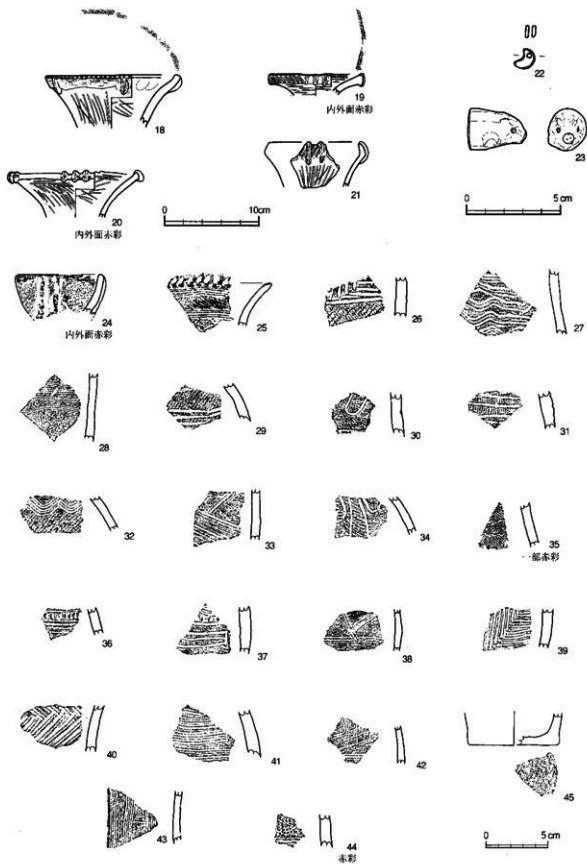


- 1 10YR3/6 黄緑色 ローム質ロッキングベースの粗粒鉄りぼ (A-024)
- 2 2.5YR3/1 暗赤灰 地上粉を混合

第13図 第5号竪穴住居跡炉と遺物実測図



第14图 第5号竖穴住居跡遺物実測図



第15图 第5号竖穴住居跡遺物実測図

第6表 第5号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm. 口径	は復元 口径	元器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
10	弥生土器	甕	—	6.0	17.2	10YR4/3にぶい黄褐 長石、石英 焼成やや不良	粗いヘラ磨き	胴部1/2残
11	弥生土器	甕	—	7.8	26.8	7.5YR6/3にぶい褐 長石、黒色粒 焼成良		1/2残
12	弥生土器	壺	—	—	7.3	7.5YR7/3にぶい 褐色 長石、石英焼 成良	LR単節斜縄文帯を円形刺突文により区画 無文部に赤彩 結紐紋	
13	弥生土器	壺	—	8.9	33.9	5YR6/3にぶい橙 長石、砂粒、焼成 やや良	胴上半部にヘラ磨きで区画された3段の羽状縄文帯	胴部1/4残
14	弥生土器	壺	—	6.2	13.5	外7.5YR6/4にぶい 橙、焼成良	外面緻密なヘラ磨き	底部1/5残
15	弥生土器	甕	21.6	—	13.5	外7.5YR3/1黒褐 長石、焼成良	口唇部を交互に指頭押搾外面は弱いハケ目調整	胴上半部1/4残
16	弥生土器	壺	—	7.4	25.3	10YR6/4にぶい黄 褐、焼成やや良	胴上半部には粗いヘラ磨き	1/4残
17	弥生土器	壺	—	—	16.0	7.5YR6/4にぶい 褐色 長石、白色粒 石英焼成良	羽状縄文による結紐文 無文部に赤彩	口縁部
18	弥生土器	甕	14.8	—	5.5	5YR5/4にぶい赤 褐 長石、焼成良	口唇部にLR単節斜縄文 口縁部に1本を単位とする 棒状浮文貼付 (5~6本)	口縁部1/3 残
19	弥生土器	壺	10.0	—	2.3	2.5YR4/4にぶい 赤褐 長石	口唇~口縁部外面にLR単節斜縄文 口縁部に3本1 組の刻目を持つ棒状浮文の貼付 内外面赤彩	口縁部1/4 残
20	弥生土器	壺	13.1	—	5.0	7.5YR6/4にぶい 褐色 長石、焼成良	口縁部に3本1組の穿孔を持つ棒状浮文の貼付 内外面赤彩	口縁部1/4 残
21	弥生土器		9.6	—	4.8	7.5YR6/4にぶい 褐色 長石、焼成良	受け口状口縁 口縁部はLR単節斜縄文を施した後に 2本1組の棒状浮文の貼付	口縁部1/6 残
22	石製品	勾玉	長さ 1.2	幅 0.65	厚み 0.7			滑石製
23	土製品	イノシシ	長さ 3.2	幅 2.0	厚み 2.2			頭部から胴 上半部まで
24	弥生土器	壺					櫛描き波状文 刻み目が入る2本1組の棒状浮文 貼付 内外面赤彩	
25	弥生土器	甕or鉢					口唇部にヘラ状工具による刻目 3本櫛歯による櫛描 き文	口縁部 履代式土器
26	弥生土器	壺					ヘラ描き重四角文	
27	弥生土器	壺					3本櫛歯による波状文	
28	弥生土器	甕					3本櫛歯による文	
29	弥生土器	壺					LR単節斜縄文 4本櫛歯による波状文	
30	弥生土器	壺					LR単節斜縄文 ヘラ描きによる沈線区画	
31	弥生土器	壺					ヘラ描き文	
32	弥生土器	壺					LR単節斜縄文 5本櫛歯による波状文	
33	弥生土器	甕					4本櫛歯による横羽状文	
34	弥生土器	壺					LR単節斜縄文 ヘラ描きによる沈線区画	
35	弥生土器						LR単節斜縄文 S字状鉛部 結節文と結節文の間 無文帯を赤彩	後期土器
36	弥生土器	壺					櫛描き文	
37	弥生土器	壺					ヘラ描き工字文	
38	弥生土器	壺					3本櫛歯による文	
39	弥生土器	壺					重四角文	
40	弥生土器	壺					櫛描きによる横羽状文	
41	弥生土器	壺					5本櫛歯による文	
42	弥生土器	壺					ヘラ描きによる斜格子	
43	弥生土器	甕					5本櫛歯による文	
44	弥生土器	壺					櫛描き文横羽状文 赤彩	
45	弥生土器						底面に平織り布底	底部1/6残

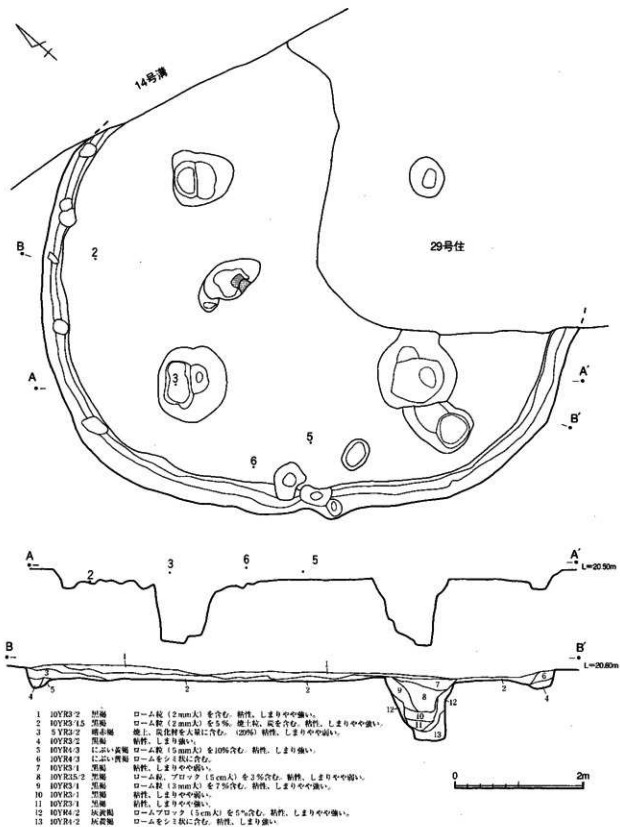
第6号竪穴住居跡（旧第28号竪穴住居跡）（第16～18図）

6号住居は先の5号住居の西側に位置しN-19-bに主体を置く。竪穴北側は14号溝に切られ、また北東の一面を同時代の5号住居によりまづ壊された後、奈良時代に入ってから29号住居によって再度掘り込まれている。床面の全体から焼土の堆積と炭化材が検出され、焼失住居と考えられる。ただし、柱穴の立ち割り断面では掘り抜き痕が認められるものの堆積土には炭化材や焼土の混入が見られないことから、意図的か否かは別として柱材を掘り抜いた後に火出したと考えられる。

規模と形状は、主軸長8.5m、これに直交する軸長は残存した部分で約7.4m、隅丸の方形を呈し、壁高は0.2mを測る。炉跡は主柱穴に囲まれた枠内のわずかに内側に設けられ、長軸長100cm短軸長60cmの長楕円形を呈し、深さは10cm程の皿状を示す。周溝は竪穴の壁直下を全周すると考えられ、幅30cm深さ10cm断面U字形をとり、また一部ではあるが周溝内に小ピットが認められた。主柱穴4本のうち北東の柱穴は29号住居の床面下から検出された。原形に分かる3柱穴について径100～120cm深さ90～110cmでいずれも建て替え痕跡が見られ、また竪穴の廃棄段階で柱が抜き取られたものと考えられる。南西コーナーには長軸90cm短軸70cm深さ40cmほどの貯蔵穴らしき落ち込みが検出された。周溝は、幅30cm深さ15cmを測る。

第7表 第6号竪穴住居跡出土遺物観察表

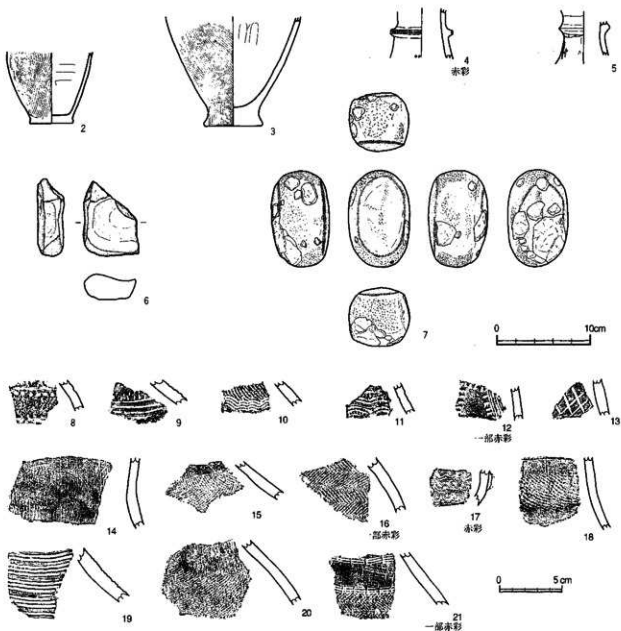
番号	種類	器種	法量cm、口径	は復元重底径	器高	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	弥生土器	壺	—	5.9		褐 長石、焼成良	4本帯歯による新統的直線文	口縁部欠
2	弥生土器	甕	—	4.4	7.5	5YR3/2暗赤褐 長石、焼成良	ハケメ調整	底部残
3	弥生土器	甕	—	4.9	11.5	5YR5/4にぶい赤 褐 長石、焼成良	ハケメ調整	底部残
4	弥生土器	壺	—	—	5.3	5YR5/6明赤褐 長石、焼成良	頸部に刺突を付けた1条の貼付隆帯 外面赤彩	頸部1/3残
5	弥生土器	壺	—	—	5.6	10YR6/3にぶい 黄橙 長石、白色 靫、焼成良	頸部に1条の貼付隆帯	頸部のみ
6	石 器	凹石	長さ 7.9	幅 5.9	厚み 2.7			
7	石 器	磨石	長さ 10.3	幅 6.6	厚み 6.3			
8	弥生土器	壺					櫛掻き文 刺突文	
9	弥生土器	壺					ヘラ掻き文 刺突文	
10	弥生土器	壺					LR卑部斜縄文 4本帯歯の櫛掻き波状文	
11	弥生土器	壺					ヘラ掻き文	
12	弥生土器	壺					懸垂文 列点で区画した中を赤彩	染林式土器
13	弥生土器	甕					ヘラ掻きによる斜格子文	
14	弥生土器	壺						
15	弥生土器	壺					羽状縄文	
16	弥生土器	壺					羽状縄文 一部赤彩	
17	弥生土器	壺					4本帯歯の櫛掻き波状文 棒状厚文の貼付 内外面 赤彩	口縁5柱の 24と同一
18	弥生土器	壺					ハケ目調整 斜縄文	
19	弥生土器	壺					3本帯歯による直線文	
20	弥生土器	壺					LR卑部斜縄文 ヘラ磨き	
21	弥生土器	壺					羽状縄文 簾状文で区画した中を赤彩	
22	弥生土器	壺					羽状縄文	
23	弥生土器	壺					LR卑部斜縄文 簾状文で区画した中を赤彩	21と同一
24	弥生土器	壺					LR卑部斜縄文 ヘラ掻きによる沈線区画	
25	弥生土器	壺					5～6の抉り入りを持つ	底部
26	縄文土器						LR卑部斜縄文	底部 混入



第16図 第6号竪穴住居跡実測図



炉跡



第17図 第6号竪穴住居炉と遺物実測図



第18図 第6号竪穴住居跡遺物実測図

第7号竪穴住居跡 (旧第29号竪穴住居跡) (第19～20図)

7号住居はN-20-dグリッドに主体を置き、その北西コーナーは5号住居の南東コーナーと背中合わせの状態で接し、重複関係は持たない。東側は、27号住居に切られる。また南側では、16号溝および南側斜面の造成時に削り取られている。27号住居を間に挟んで南東側に位置する2号住居との関係については、重複した可能性が高いものの覆土に大きな違いがなくまた後生の攪乱等の影響もあって新旧を明らかにすることは出来なかった。

炉跡については27号住居による攪乱のためか痕跡さえ残されていない。

規模と形状は、径6.4m前後、深さ0.2mの隅丸方形を呈するものと考えられる。柱穴は、支柱穴4本が検出された。東辺の2柱穴については、27号住居床面下から検出した。遺存状態の良い2柱穴では、径50～60cm、深さ60cm前後を測る。また北西隅から直径65cm深さ10cmほどの性格不明の皿状の窪みが発見された。周溝は幅15cm深さ5～10cmで断面U字状を呈し、全周するものと考えられる。

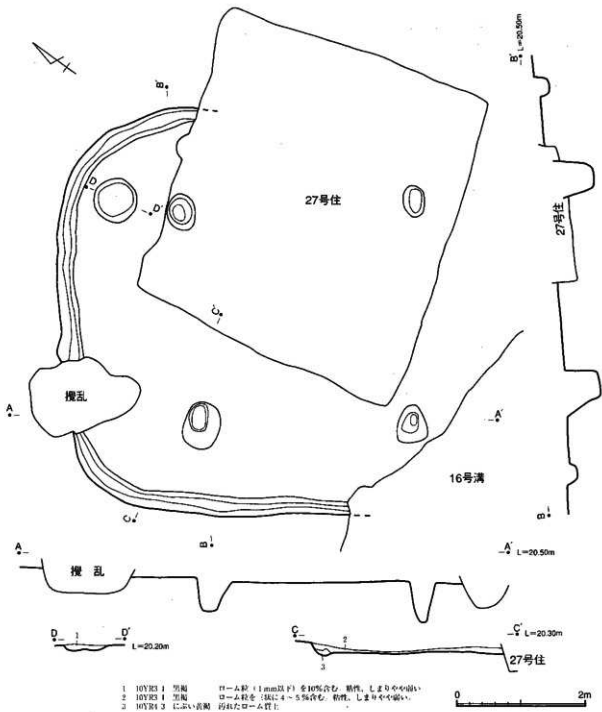
出土遺物は全体的に少なく、図示し得たものは、覆土中からの一括として取り上げた弥生式土器の底部片のみである。



第19図 第7号竪穴住居跡遺物実測図

第8表 第7号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
1	弥生土器		-	-	-		平織り布圧痕	底部



第20図 第7号竪穴住居跡実測図

第8号竪穴住居跡（旧第30号竪穴住居跡）（第21・22図）

8号住居は東側地区の南端に位置し、O-19-bグリッドに主体を置く。西側は32号住居に切り取られ、南側は斜面部にかかって消滅しているため竪穴全形を窺うことはできない。

規模と形状は、長軸長7.0m深さ0.2mの隅丸方形を呈すると考えられる。柱穴は主柱穴4本が検出され、遺存状態の良いものは径40cm深さ70cmを測る。西隅から直径40cm深さ30cmの性格不明の窪みが発見されている。周溝は幅20cm深さ20cmで断面U字状を呈し、全周するものと考えられる。炉は4本の主柱穴を結んだ内側に位置し、直径30cm深さ15cmで炉壁の一部として11の土器片が張り付けられ、炉内には灰が充満していた。

第9表 第8号竪穴住居跡出土遺物観察表

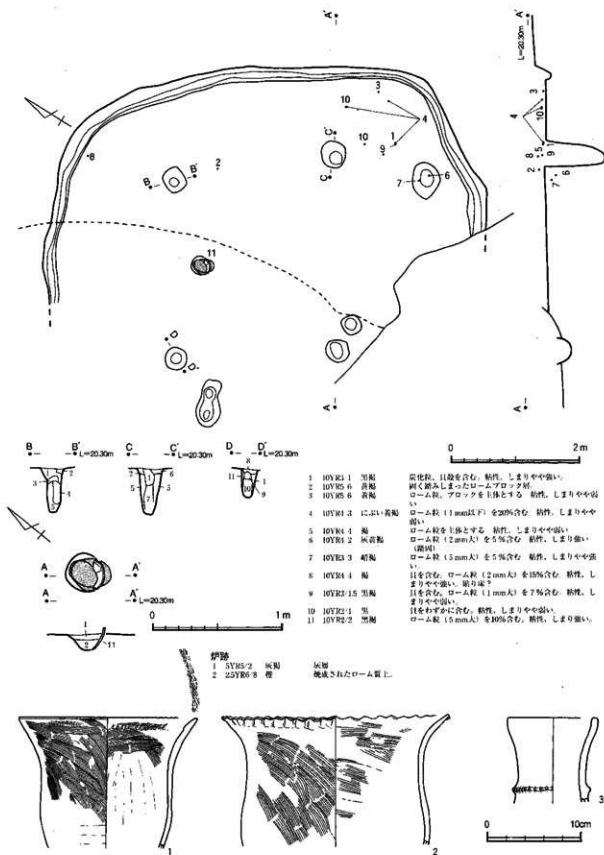
番号	種類	器種	法量cm		焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考	
			口径	器高				
1	弥生土器	壺	18.6	—	13.8	5YR2/黒褐 長石、石英焼成良	口唇部にLR単節斜縄文 口縁部内面の折返し部分に刻目 ハケメ調整	胴上半部1/2次
2	弥生土器	壺	24.2	—	13.8	7.5Y黒 長石、雲母焼成良	口唇部を交互に指頭押捺 縁部をハケメ調整	胴上半部1/2次
3	弥生土器	壺	9.4	—	14.1	5YR5/4にぶい赤褐 長石、	頸部に刺突による列点を持つ1条の貼付隆帯	胴部欠
4	弥生土器	壺	7.1	—	7.9	7.5YR7/2明褐色 長石、焼成良	受け口状口縁 穿孔と刻目を持つ梯状浮文を貼付頸部に刺突による列点を持つ1条の貼付隆帯 口唇部と口縁部に縄文 肩部には羽状縄文 内外面赤彩	胴部欠
5	弥生土器	鉢	10.5	4.7	12.7	10YR5/2灰黄褐 長石、焼成良	口唇部を交互に指頭押捺 胴部はヘラ無で	ほぼ正形
6	弥生土器	壺	—	—	14.8	7.5YR5/4にぶい褐 焼成良	ヘラ磨き調整	胴上半部1/2次
7	弥生土器	壺	—	8.6	19.5	7.5YR5/4にぶい褐 焼成良	ヘラ磨き調整	胴上半部1/2次
8	弥生土器	壺	—	—	24.3	10YR5/2灰黄褐 長石、石英、焼成良	ヘラ磨き調整	胴上半部1/3残
9	弥生土器	壺	—	—	24.0	5YR3/1黒褐 長石、焼成良	ハケメ調整	
10	土製品	円盤	直径8.8	—	—	7.5YR5/4にぶい褐 焼成良	ハケメ調整痕を残す 全体を磨き調整	土器片の転用
11	弥生土器	壺					ハケメ調整 胴上部赤彩	炉内い使用
12	土師質土器	内耳	36.2	—	3.8	7.5YR6/4にぶい橙、焼成良	内耳	近世 混入

第9号竪穴住居跡（旧第31号竪穴住居跡）（第23・25図）

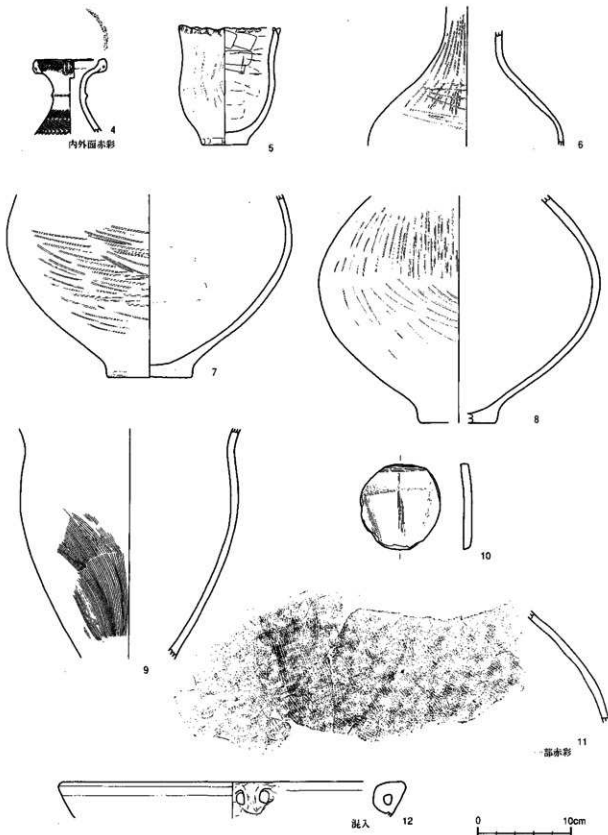
9号住居は先の8号住居とほぼ同じO-19-a・bグリッドに主体を置く。竪穴西側は32号住居に切り取られ、南側は斜面にかかるため消失する。東側は8号住居によって切られるもののほぼ同じ床面高のため本住居の周溝も遺存しており、住居の形状を掘り出すことができた。

規模と形状は、残存する長軸長6.0m深さ0.2mの隅丸方形を呈する。柱穴は、南西柱穴以外の3本が検出された。竪穴のほぼ中央から径90cm深さ20cmの炉跡が検出された。周溝は幅10cm深さ10cmで断面U字状を呈し、全周するものと考えられる。

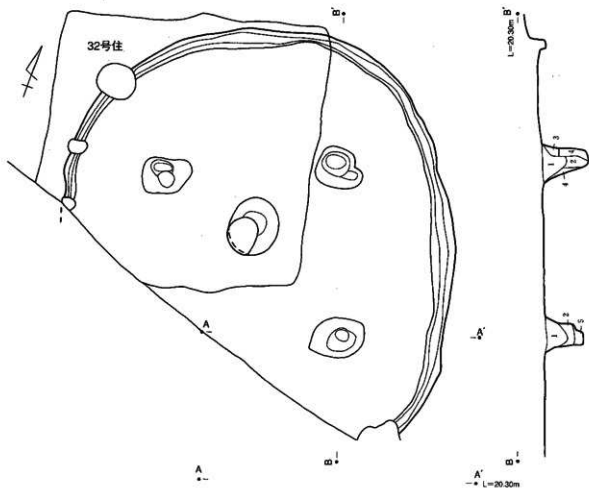
また本住居では床面下から一回り小さい住居プランがとらえられ、建て替え以前の旧住居と考えられよう。残存する主軸長は約5m、炉跡は不明である。周溝は、幅15cm深さ10cm程度である。柱穴としては径40cm前後深さ50～70cmのものが5本検出された。



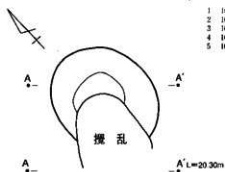
第21図 第8号竈穴住居跡と炉と遺物実測図



第22图 第8号竖穴住居跡遺物実測図



- | | | | |
|---|----------|-------|-----------------------------------|
| 1 | 10YR23-1 | 灰層 | 硬土層と貝ブロッカ（ハマグリ主体）を多く含む。粘性、しまり強い。 |
| 2 | 10YR23-3 | 灰層 | ローム粒（5mm大）と地中砂を2～3%含む。粘性、しまり弱くない。 |
| 3 | 10YR4-5 | 灰層 | ローム粒、ブロッカを主体とする。粘性、しまりやや強い。 |
| 4 | 10YR23-2 | 灰層 | ローム粒（2～5mm）を10%含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 5 | 10YR4-3 | にがい土層 | ローム粒wp1層とする。粘性、しまり強い。 |



- | | | | |
|---|---------|-----|------------------------------|
| 1 | 10YR6-8 | 明炭層 | ハードロームブロッカ A-0220層底 |
| 2 | 10YR2-2 | 灰層 | 貝ガクを多量に含む、ローム粒（2～5mm大）を7%含む。 |
| 3 | 10YR6-2 | 灰炭層 | 灰層 |



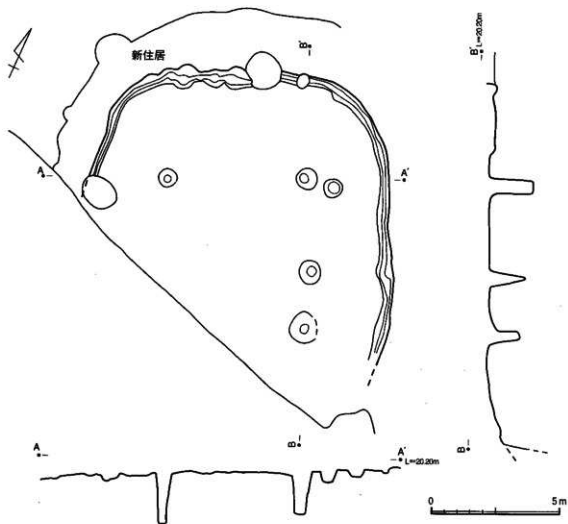
第23図 第9号竪穴住居跡と炉実測図



第24図 第9号竪穴住居跡遺物実測図

第10表 第9号竪穴住居跡出土遺物観察表

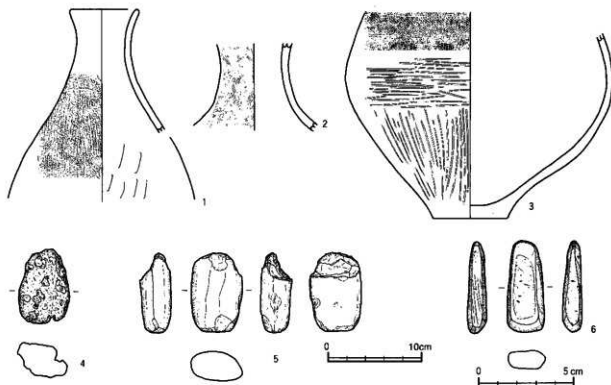
番号	種類	器種	法量cm 口径	径径 底径	高さ 器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法 他	備考
1	弥生土器						へら描き文 円形刺突文	
2	弥生土器	壺					LR単原斜綫文 へら描きの沈線区画 結紐文無文 部分を赤彩	



第25図 第9号竪穴住居跡(旧)実測図

第10号竪穴住居跡（旧第33号竪穴住居跡）（第26・27図）

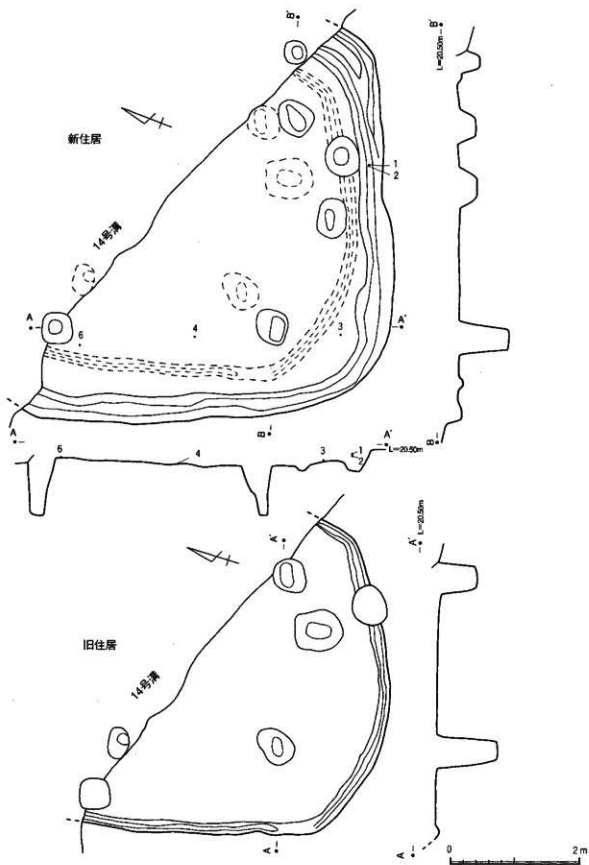
10号住居は、東側調査区南西の、N-18-bグリッドに主体を置く。北東部を14号溝に切り取られる。本住居は床面下に一回り小さい住居プランがとらえられ、建て替え前の旧住居であると考えられた規模と形状は、南北長5.5m（残存値）、東西長5.8m（残存値）、深さ0.2mの隅丸方形を呈する。柱穴は主柱穴3本が検出されたものの、北および西側の柱穴は溝にかかり、全形をつかむことは出来なかった。遺存状態の良い柱では径50cm前後深さ70～90cmを測る。炉は検出出来なかった。また南東隅から直径60cm深さ15cmの性格不明の皿状の窪みが発見されている。周溝は幅35cm深さ10cmで断面U字状を呈し、全周するものと考えられる。



第26図 第10号竪穴住居跡遺物実測図

第11表 第10号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm 口径	は復元量 底径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	弥生土器	壺	6.7	-	20.4	10YR5/4に 黄橙長石、焼成良	ハケメ調整	上半部残
2	弥生土器	壺			9.3	10YR6/4に 黄橙長石、焼成良	ハケメ調整	頭部のみ
3	弥生土器	壺	-	7.9	21.8	5YR5/1に 赤褐色長石、焼成良	胴部上位に羽状縄文 下位は横～縦のへら磨き調整	上半部欠
4	軽石	軽石	長さ 7.9	幅 5.4	厚み 3.5			
5	石器	石	長さ 8.6	幅 5.5	厚み 3.2			
6	石器	石斧	長さ 5.0	幅 2.0	厚み 1.0			



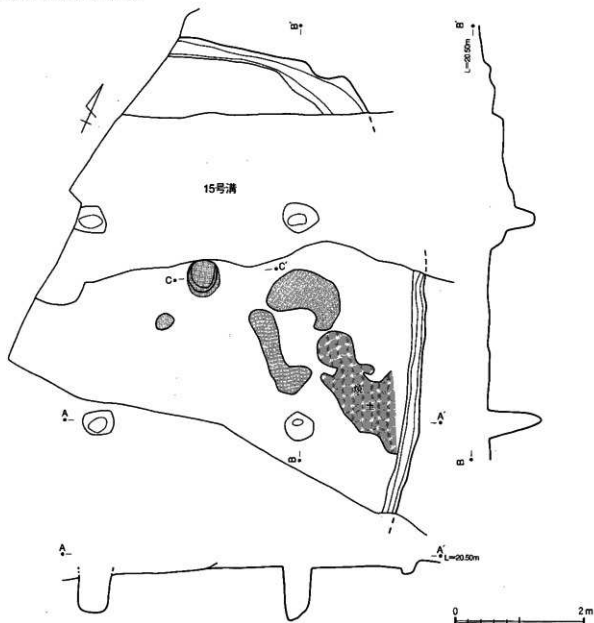
第27图 第10号竖穴住居跡(新・旧)実測图

第11号竪穴住居跡（旧第35号竪穴住居跡）（第28・29図）

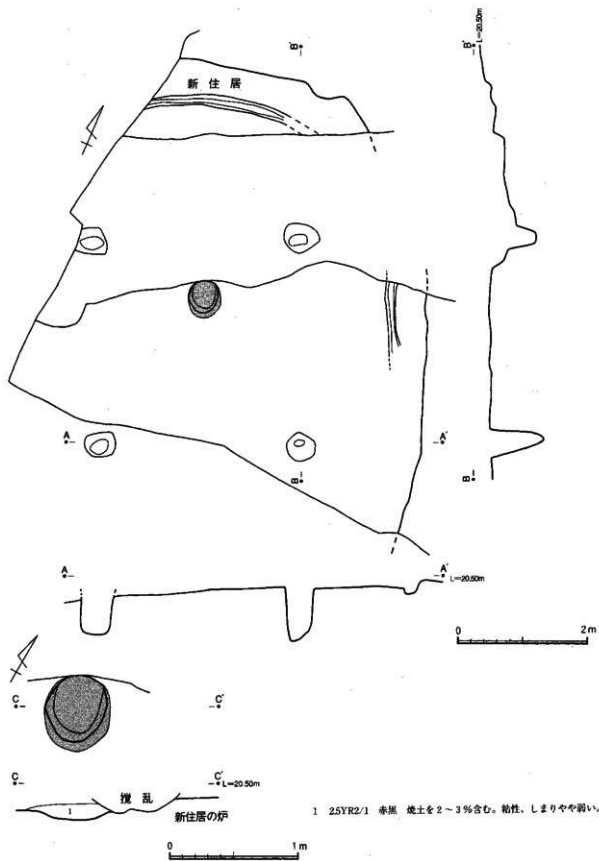
11号住居は調査区南西端のに位置し、O-18-bグリッドに主体を置く。竪穴北西部分を15号溝に切り取られ、また西側は調査区域外にかかり、南側は斜面のため消失する。床面上には一部焼土が堆積していた。また内側に一回り小さい住居プランがとらえられ、建て替え以前の旧住居であると考えられる

規模と形状は、南北長5.5m（残存値）、東西長5.8m（残存値）、深さ0.2mの隅丸方形を呈する。柱穴は主柱穴4本が検出されたが、北および西側の柱穴は溝にかかり、南側は斜面地での検出のため全形を窺うことはできず、東側の1本のみをかりうじて全掘することができた。

図示し得る遺物は無い。



第28図 第11号竪穴住居跡実測図



第29図 第11図竪穴住居跡(旧)と炉実測図

2 奈良時代・平安時代の遺構

奈良・平安時代の遺構としては竪穴住居跡22軒を検出した。住居は調査区域のほぼ全域から認められるものの、北側区域では弥生時代の遺構同様に、竪穴の立ち上がりをほとんど削り取られ、わずかに周溝の一部や柱穴からその存在が窺われる状況であり、既に消失した遺構があることを予想させる。掘立柱建物については、明確に本期に属するものは検出出来なかった。

第12号竪穴住居跡（旧第2号竪穴住居跡）（第30・31図）

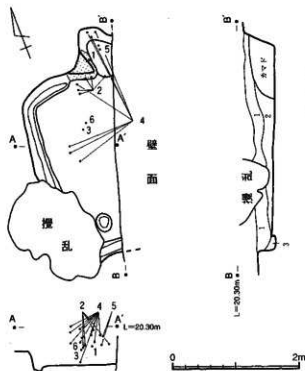
本号住居は調査区中央の東端に位置し、K-21-dグリッドに主体を置く。竪穴東側は調査区と外側の市道との間を仕切る土手下にもぐりこんでいるため、竪穴の西半分のみ調査となった。また南西コーナーは現代の攪乱により壊されている。

規模と形状は、主軸長2.7m×直交する軸長1.5m（現存値）の方形を呈すると考えられる。壁高は0.3を測る。主軸方位はN-1°30'-Wをとる。竪は北壁中央から検出された。壁面を大きく掘り込み、燃焼室の中心は両側の壁面を結ぶラインよりもやや外側に位置する。周溝は幅20cm前後深さ5～10cmで断面U字状を呈し、竪下を除き壁直下を巡るものと考えられる。柱穴は調査範囲内では検出されず、南西コーナー近くから径30cm深さ10cm弱の窪み1カ所が検出された。

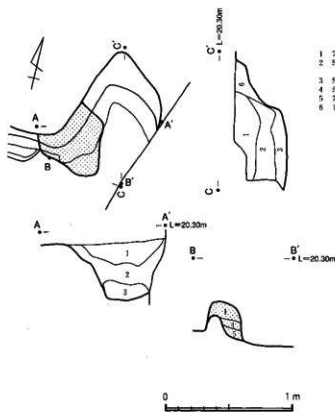
出土遺物としては、土師器高台付の皿、甕、「コ」の字口縁の武蔵甕、須恵器甕、鉄製刀子断片がある。

第12表 第12号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
1	土師器	高台付皿	14.5	7.2	2.8	2.5YR4/8赤褐長石、石英、焼成良	ロクロ整形 付け高台 底面に光沢有り	1/2欠
2	土師器	甕	19.3	-	19.0	7.5YR3/2黒褐長石、石英 焼成良	胴上半部縦へら削り下部横へら削り	胴部1/2
3	土師器	甕	18.0	-	15.0	5YR6/6橙長石、焼成良	胴上部は横へら削り、下部は縦へら削り「コ」の字口縁	胴部1/3 武蔵甕
4	土師器	甕	23.0	-	24.0	2.5YR5/6明赤褐白色粒、長石、焼成良	胴上部は縦へら削り、下部は横へら削り	
5	須恵器	甕	21.0	-	14.7	YR4/2灰褐長石、焼成良	叩き整形後胴下部は横へら削り、胴部内面にはアテ具痕	
6	鉄製品	刀子?						

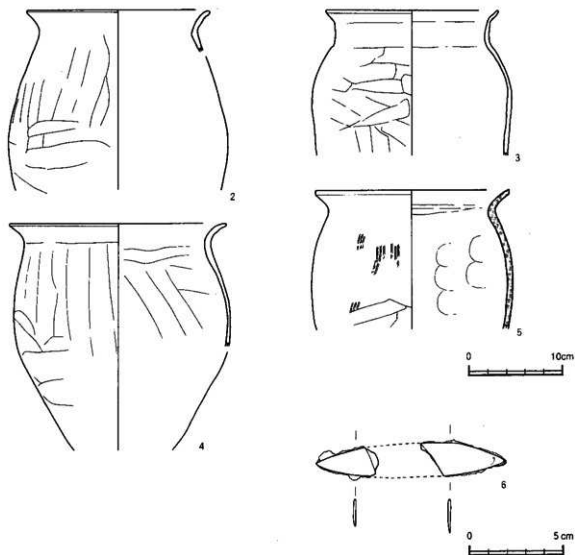


- 1 HOYR3/3 珪層 ローム粒(2~5mm大)を2~3%含む。粘性、しまり中不強い。
- 2 HOYR3/3 珪層 ローム粒(2~5mm大)を2~3%含む。粘性、しまり中不強い。
- 3 HOYR3/3 珪層 ローム粒(1mm大)を2~3%含む。粘性、しまり中不強い。



- 1 TSYR3/2 珪層 ローム粒を2~3%含む。粘性、しまり中不強い。
- 2 SYR4/2 珪層 白色粘土層を20~30%。地成粘土層を4~5%含む。粘性、しまり中不強い。
- 3 SYR3/2 珪層 灰、礫土層、灰を多数に含む。
- 4 OYR3/2 珪層 粘土層を10%含む。粘性、しまり中不強い。
- 5 TSYR4/2 珪層 ローム粒を20%以上含む。粘性、しまり中不強い。
- 6 IOYR4/1 珪層 ローム粒を主体とする。粘性、しまり中不強い。

第30図 第12号竪穴住居跡と竈と遺物実測図

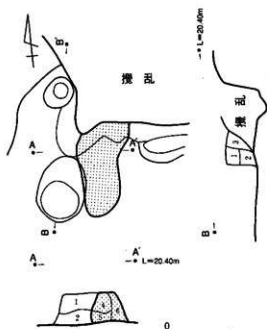
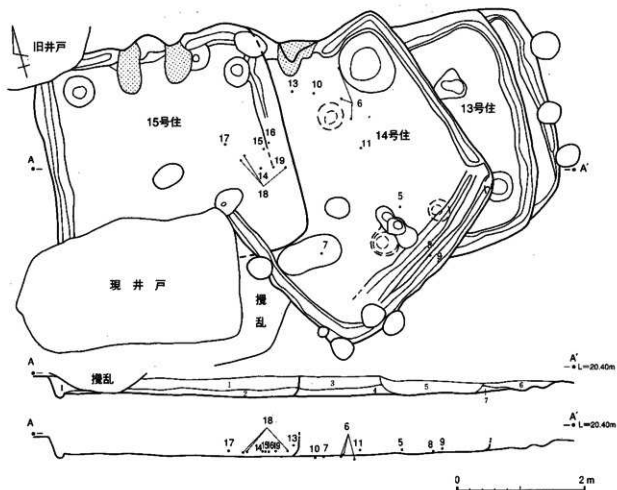


第31図 第12号竪穴住居跡遺物実測図

第13号竪穴住居跡 (旧第3号竪穴住居跡) (第32・33図)

13号住居は調査区中央のやや東寄りに位置し、K-21-cグリッドに主体を置く。この付近は、上部が大幅に削平されており、本住居のごとく掘り込みの浅い遺構は周溝等の遺構下部のみが検出されるにとどまり、また竪穴西半部は14号住居により壊されている。東辺の外側にはほぼ並行して走る浅い周溝が検出され、その帰属が問題となる。しかし本住居は周溝を含めても掘り込みが浅く、東側周溝も同様の掘り込みしかもたない。また周溝プランも鮮明ではないため遺構としての扱いに躊躇せざる得ない。よって東辺部分については本住居の拡張の可能性を考慮するにとどめたい。

規模と形状は、主軸長3.5mで方形を呈すると考えられる。壁高は遺存の良いところで約15cmを測る。主軸方位はN-1°30'-Wをとる。竈は検出できなかった。周溝は幅15cm前後深さ2~10cmで断面U字状を呈し、調査範囲内では確認することができた。柱穴等は東側の2本は本住居床面で確認でき、西側の2本および梯子ピットは西隣14号住居の床面下から検出された。本住居に明白に伴う遺物は無い。



- | | | | |
|---|----------|----|--|
| 1 | 10YR3-2 | 黒土 | ローム粒 (2mm大) を2-3%含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 2 | 10YR2-3 | 硬土 | ローム粒 (2mm大) を4-5%とブロック (2cm大) を1-2%含む。粘性、しまりは強い。 |
| 3 | 10YR2-2 | 黒土 | ローム粒 (2mm大) を4-5%含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 4 | 10YR25-2 | 黒土 | ローム粒 (5mm大) を4-5%含む。 |
| 5 | 10YR2-3 | 硬土 | ローム粒 (2mm大) を2-3%含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 6 | 10YR2-3 | 硬土 | 粘性、しまりやや強い。 |
| 7 | 10YR5-6 | 黄土 | ローム粒を主体とする。粘性、しまりは弱い。 |

- | | | | |
|---|---------|-------|-------------------------|
| 1 | 5YR4-2 | にじい赤土 | 砂質粘土。やや硬成をうけている。 |
| 2 | 5YR3-2 | 硬赤土 | 灰、硬上ブロック。砂質粘土よりなる。 |
| 3 | 10YR4-4 | 黄 | ローム粒 (2mm大) を20%含む。 |
| 4 | 10YR5-4 | にじい黄土 | 砂質粘土。 |
| 5 | 10YR4-2 | 灰黄土 | 砂質粘土を40%含む。 |
| 6 | 10YR4-1 | 黄土 | 粘土を10-20%含む。粘性、しまりやや強い。 |

第32図 第13~15号竪穴住居跡と第14号住居電実測図

第13表 第13号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量m 口径	は復元 口径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	土師器	坏	-	7.0	2.7	7.5YR6/4に ぶい 橙白色粒、焼成良	ロクロ整形 底部は回転糸切り後磨ナデ	体部下半の 一部残
2	土師質土 器	坏	-	5.5	1.7	10YR6/4に ぶい 黄橙 焼成良	ロクロ整形 底部は回転糸切り未調整	体部下半 一部残 混入
3	土師器	甕	19.8	-	5.2	5YR6/6橙 長石、 焼成良	「コ」の字 口縁、胴部内面に指頭痕	武蔵甕
4	鉄製品	刀子	長さ 6.8	幅 1.2	厚み 0.2			

第14号竪穴住居跡(旧第4号竪穴住居跡)(第32・33図)

本号住居は13号住居の西隣に位置し、K-21-c, L-21-aグリッドに主体を置く。竪穴西半部は15号住居により壊され、東側では13号住居を壊す。

規模と形状は、主軸長3.9m、直交する軸長3.5mのほぼ方形を呈する。壁高は30m前後を測る。主軸方位はN-22°30'-Wをとる。竪は北壁中央から検出されたが左袖は既に15号住居の建設時に削平されており、右袖のみが検出された。周溝は幅20cm前後深さ5cmで断面U字状を呈し、調査範囲内では確認することができ、また南壁の内側には旧周溝が確認でき、南壁側に拡張されたことが判明した。柱穴等では主柱穴は確認できず南壁沿いの中央から掘り替え痕を持つ梯子ピットが検出された。また本住居の北東コーナーには径90cm深さ5cmほどの性格不明の窪みが検出された。

出土遺物には混入品も認められるが、概ね第33図の5～10までの須恵器蓋と坏、13の土師器「コ」の字武蔵甕が本住居に伴うと考える。

第14表 第14号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量m 口径	は復元 口径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
5	須恵器	蓋	16.0	-	3.55	2.5Y6/1黄灰 砂粒、 黒色粒焼成良	ロクロ整形、やや扁平な覆宝珠つまみ	1/4残
6	須恵器	蓋	13.4	-	3.3	5YR6/3に ぶい 橙長石、 石英、 焼成良	ロクロ整形、扁平つまみ	1/2欠 火摩
7	須恵器	坏	13.2	7.9	4.2	7.5Y黒 長石、 雲母、 焼成良	ロクロ整形 後体部下端から は手持ちへラ削り	3/4残
8	須恵器	坏	11.2	7.2	4.1	N3/暗灰 長石、 雲母、 焼成良	ロクロ整形 体部下端回転へラ削り	1/3残
9	須恵器	坏	12.4	7.0	4.0	N3/暗灰 長石、 石英、 焼成良	ロクロ整形	1/4残
10	須恵器	坏	11.2	7.4	3.7	7.5YR4/2 灰褐 長石、 焼成良	ロクロ整形 体部下端手持ちへラ削り	1/5残
11	土師質土 器	坏	7.2	3.4	2.0	10YR6/4に ぶい 黄橙、 長石、 焼成良	ロクロ整形 回転糸切り未調整	混入 1/4残
12	土師質土 器	坏	-	6.0	1.4	7.5YR6/4に ぶい 橙 長石、 焼成良	ロクロ整形 回転糸切り未調整	混入 底部のみ
13	土師器	甕	21.2	-	27.8	2.5YR4/3に ぶい 赤褐長石、 焼成良	口縁部上部に接合痕を持つ、胴上半部は横へラ削り 下部は斜めへラ削り	底部欠 武蔵甕

第15号竪穴住居跡（旧第5号竪穴住居跡）（第33・34図）

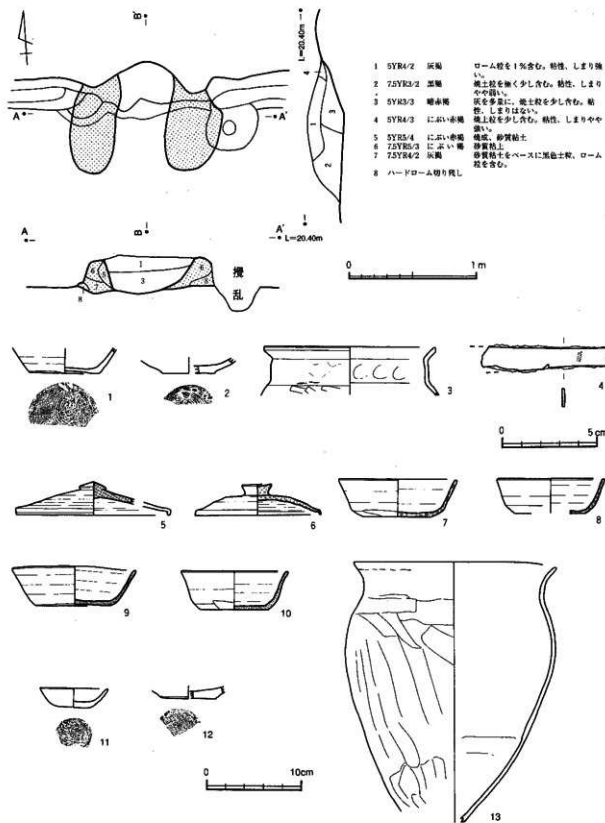
本号住居は1号住居の南側，13号住居の西隣に位置する。K-20-d，L-20-bグリッドに主体を置く。竪穴の南東コーナーで14号住居を切る。北東コーナーと南西コーナーを現代の井戸等により壊される。

規模と形状は，主軸長2.8m（残存値），直交する軸長3.6mのほぼ方形を呈すると考えられる。壁高は30m前後を測る。主軸方位はN-30°-Wをとる。竪は北壁中央から検出され，壁への掘り込みは浅く燃焼室は壁面ラインより手前に位置する。周溝は幅20cm前後深さ5cmで断面U字状を呈し，西壁沿いと竪両脇の壁沿いでは確認することができた。柱穴等としては北辺の両隅から径40cm深さ cm前後のピットが各々1本検出されたが，柱穴とは考えにくい。

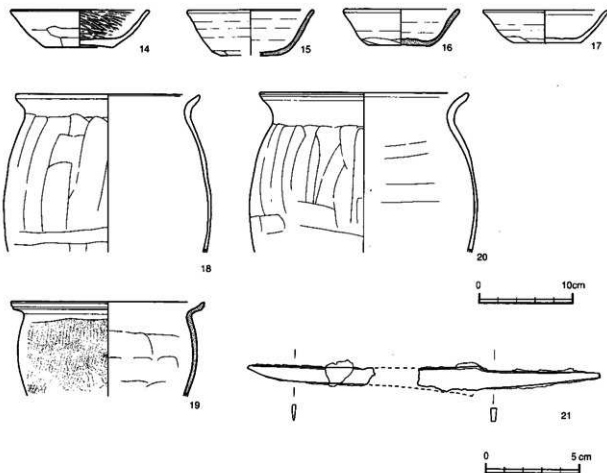
出土遺物のうち第34図の14以降の遺物が本住居に伴うと考える。

第15表 第15号竪穴住居跡出土物観察表

番号	種類	器種	法量cm			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
14	土師器	碗	14.4	7.1	4.0	5YR5/6明赤褐長石、焼成良	ロクロ整形 体部下端回転削り、体部内面はヘラ磨き	1/2欠
15	須恵器	环	13.4	6.4	4.8	7.5YR4/1褐灰長石、石英、焼成良	ロクロ整形 体部下端手持ち寛削り	1/2欠
16	須恵器	环	12.0	6.4	3.8	7.5YR4/3褐長石、石英、焼成良	ロクロ整形 体部下端手持ち寛削り	ほぼ完形
17	須恵器 土師器	环	13.1	7.0	4.4	2.5YR4/4にぶい赤褐長石、焼成良	ロクロ整形 体部下端手持ち寛削り	1/2欠
18	土師器	壺	19.2	-	16.8	7.5YR5/3にぶい褐	胴上半部は縦ヘラ削り	胴部1/3残
19	須恵器	壺	20.3	-	10.1	10YR3/1黒褐長石、焼成良	口縁部をやや肥厚させ、胴部は縦位の平行叩き整形 内面には無文のアテ具痕とその後にはナデ整形	胴部1/5残
20	須恵器	壺	21.8	-	17.0	5YR6/3にぶい橙長石 焼成良	胴上半部は縦ヘラ削り下半部は横ヘラ削り	胴部2/3残
21	鉄製品	刀子	長さ 18.5	幅 1.0	厚み 0.3			



第33図 第15号住居竈と第13・14号竪穴住居跡遺物実測図



第34図 第15号竪穴住居跡遺物実測図

第16号竪穴住居跡 (旧第6号竪穴住居跡) (第35図)

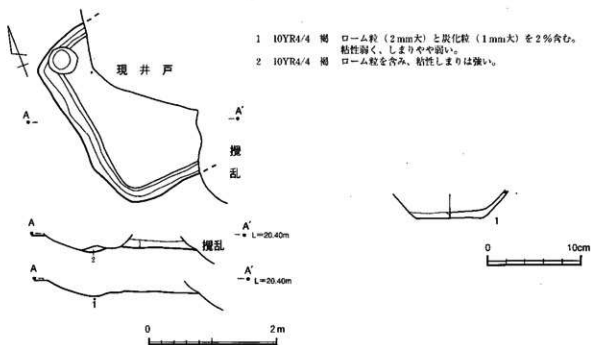
本住居は調査のほぼ中央に位置し、L-20-a・bグリッドに主体を置く。竪穴の西半分は現代の井戸により壊されており、東側のみの調査となる。

規模と形状は、主軸長2.4mで方形を呈すると考えられる。壁高は10cm前後を測る。主軸方位はN-12°-Wをとる。周溝は幅20cm前後深さ5cmほどで断面U字状を呈し、調査範囲では確認することができた。竈と柱穴等とは不明である。

出土遺物は、床面直上からの土師器坏1点である。

第16表 第16号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm. は復元量			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
1	土師器	坏	-	6.8	3.0	2.5YR5/6明赤褐焼成良	ロクロ整形	体部上半欠



第35図 第16号竪穴住居跡と遺物実測図

第17号竪穴住居跡 (旧第7号竪穴住居跡) (第36図)

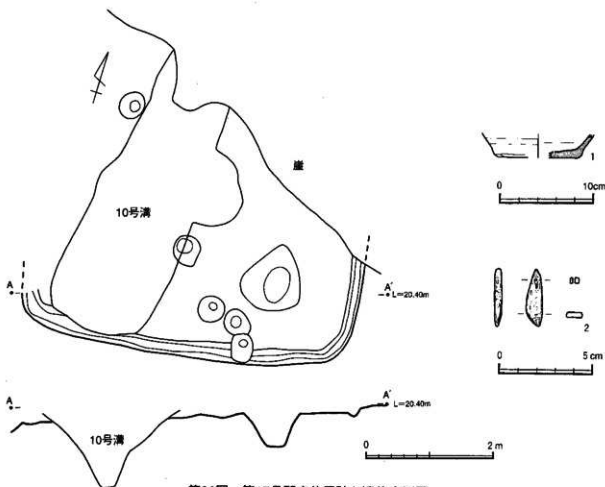
北側調査区の中央部崖跡、H-15-d グリッドに主体を置く。竪穴の北半分は崖の崩落に伴い消失しており、中央部には南北に走る10号溝と1号土壇が穿たれている。

規模と形状は、南北長5.0m (残存値)、東西長5.2mの方形を呈すると考えられる。壁高は50m前後を測る。主軸方位はN-11°30'-Wをとる。周溝は幅25cm前後深さ5cmで断面U字状を呈し、調査した範囲では検出することができた。柱穴等としては南辺の中ほどやや東寄りに径40cm深さ10cm前後のピットが検出され、梯子ピットと考えたい。

出土遺物は、須恵器坏底部と石製品1点である。

第17表 第17号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量 口径	法量 底径	法量 器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法	備考
1	須恵器	坏	-	8.2	2.5	2.5YR5/2暗灰黄 白色粒・焼成良	ロクロ整形	上半部と体部の1/2欠
2	石製品	玉	長さ 3.0	幅 0.9	厚み 0.35			潜石製



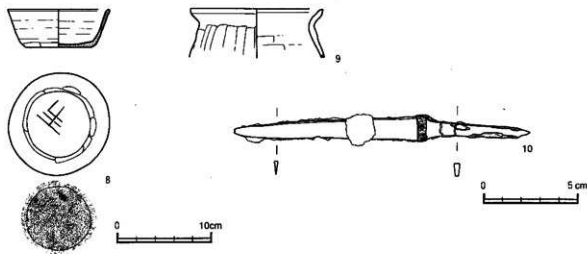
第36図 第17号竪穴住居跡と遺物実測図

第18・23号竪穴住居跡（旧第8号竪穴住居跡）（第37・38図）

東側調査区の中央部東端、L-21-dグリッドに主体を置く。竪穴の東半分は調査区外とを隔てる土手の下部になるため未調査とした。また北辺部分は調査区中央部を東西に横切る11号溝によって切られ、中央部付近にも現代のものと考えられる大きな攪乱が2箇所穿たれており遺存状況は不良であった。南側では23号住居の南辺部をわずかに残して断ち切っている。

規模と形状は、主軸長6.3m、直交する軸長5.0m（残存値）の方形を呈すると考えられる。壁高は50cm前後、主軸方位はN-1°30'-Wを測る。周溝は幅20cm深さ約5cmで断面U字状を呈し、調査した範囲では竈下も含めて検出した。なお南壁沿いでは本来の周溝の内側に周溝が巡り、住居の拡張に伴う掘り替えと考えられる。竈は11号溝による開削を免れた北壁中央付近から白砂質粘土が検出され、竈の痕跡と判断した。柱穴等としては住居床面上で西側の2柱穴を、また北東柱穴を11号溝の底面下から検出した。南辺の中ほどからは梯子ピットを検出した。遺存状況の良い西側の2柱穴と梯子ピットについては立替痕が見られ、南側に拡張したことが判明した。最終床面の柱穴は柱痕が確認でき、柱の抜き取りは行われていない。また南壁からさらに南側に竪穴状の掘り込み（23号住居）が認められた。

出土遺物は、須恵器蓋・坏・高台付坏・高台付皿、土師器甕、鉄製刀子がある。大半の遺物が床面直上ないしは壁際から検出されており、本住居に伴うものと考えられる。須恵器坏7・8の底面には「生？」が刻まれている。



第38図 第18号竪穴住居跡遺物実測図

第18表 第18号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
1	須恵器	蓋	11.4	—	2.3	5Y6/1灰 長石、石英、焼成良	ロクロ整形、扁平つまみ	1/2欠
2	須恵器	蓋	13.8	—	2.3	5Y2/1黒 長石、石英、焼成良	ロクロ整形	3/4欠
3	須恵器	高台付皿	14.1	8.7	3.1	10Y2/1黒 長石、白色粒、蟹母、焼成良	ロクロ整形、付け高台	1/3欠
4	須恵器	高台付坏	—	8.5	1.8	5Y5/1灰 長石、砂粒、焼成良	ロクロ整形、付け高台	体部欠
5	須恵器	坏	12.6	7.2	4.2	7.5Y5/1灰 長石、焼成良	ロクロ整形	1/2欠 刻書
6	須恵器	坏	12.2	8.4	4.3	10YR3/2黒褐 長石、焼成良	ロクロ整形	3/4欠
7	須恵器	坏	—	6.0	0.6	10YR4/2灰黄褐 長石、焼成良	ロクロ整形	底部のみ残 刻書「生」
8	須恵器	坏	10.6	6.8	4.0	7.5YR6/4に よ い 橙 長石、焼成良	ロクロ整形、体部下端から底部を手持ちへら削り	刻書「生」
9	土師器	甕	13.9	—	5.2	5YR4/3に よ い 赤 褐 長石、石英、 焼成良	胴上部は縦へら削り	胴上半部 1/2残
10	鉄製品	刀子	長さ 15.6	幅 1.4	厚み 0.3			

第19号竪穴住居跡 (旧第9号竪穴住居跡) (第39・40図)

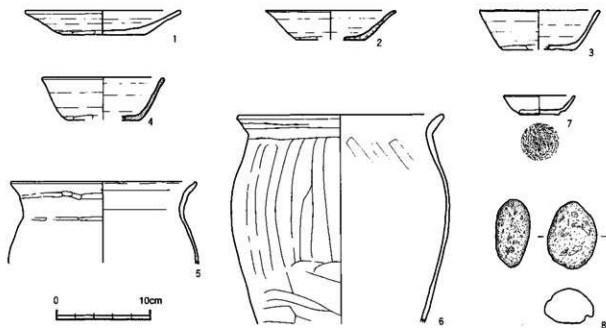
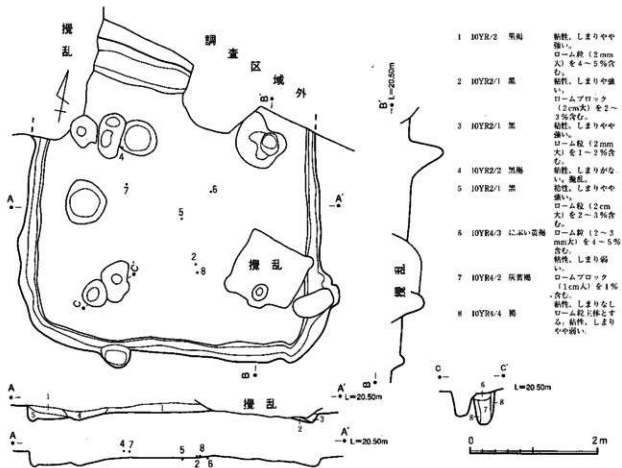
東側調査区の中央部、K-19-d グリッドに主体を置く。東側の辺で1号住居を切る。本住居の北西コーナーは攪乱により壊され、北東コーナー部分は土手の下にもぐるため未調査とした。また床面近くまで削平を受けている。

規模と形状は、主軸長4.4m、直交する軸長4.6mのほぼ方形を呈すると考えられる。壁高は5~10cm、主軸方位はN-9°-Wを測る。周溝は幅20cm深さ約5cmで断面U字状を呈し、調査した範囲では竈下も含めて検出しが、北辺の周溝は他の3辺に比べて幅が広く、方向性にも乱れがあるため、攪乱が重なっている可能性がある。また床面下から一回り内側に巡る周溝が3辺から検出され、拡張の痕跡と判断した。竈本体は検出できなかったが、北辺中央付近の床面上で白砂質粘土の散布が認められ、竈の痕跡と考えた。柱穴としては住居床面上で西側の2柱穴を、また北東柱穴を11号溝の底面下から検出した。南辺の中ほどからは梯子ピットを検出した。遺存状況の良い西側の2柱穴と梯子ピットについては立替痕が見られ、南北の2方向に拡張したことが判明した。最終床面の柱穴は柱痕が確認でき、柱の抜き取りは行われていない。

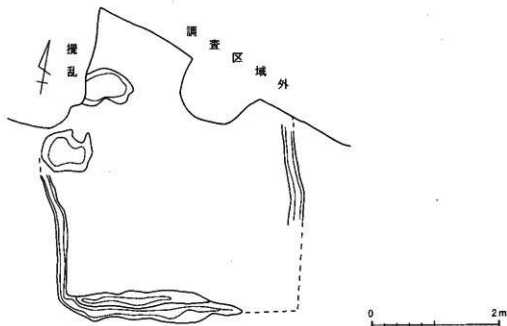
出土遺物は、須恵器蓋・坏と土師器皿・甕等が検出されたが、遺構覆土が極めて薄いため出土層位だけでは混入か否かの判断が難しい、ちなみに第39図7の土師質土器小皿は混入品と考える。

第19表 第19号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm		焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径			
1	土師器	皿	16.4	8.5	2.5YR4/4にぶい 赤褐 長石、石英 赤色粒焼成良	ロクロ整形	2/3欠
2	須恵器	坏	13.8	7.2	2.5Y3/2黒褐 長石、焼成良	ロクロ整形	3/4欠
3	須恵器	坏	12.6	7.6	7.5YR7/4にぶい 橙 長石、焼成良	ロクロ整形	4/5欠
4	土師器	坏	12.8	7.5	7.5YR4/3褐 長 石、石英、焼成良	ロクロ整形	4/5欠
5	土師器	甕	19.4	-	5YR4/6赤褐 長石、白色粒、雲 母焼成良		武蔵塚 割上半部 1/2残
6	土師器	甕	21.6	-	10YR5/4にぶい 黄褐 長石、石英 焼成良	割上半部は縦へら削り、下半部は斜めへら削り	割部1/2欠
7	土師質土器	小皿	7.6	4.1	7.5YR6/4にぶい 橙 赤褐色粒、長 石、焼成良	ロクロ整形、回転糸切り未調整	体部1/2欠 僅付着 混入
8	軽石		長さ 7.0	幅 5.1	厚み 3.6		



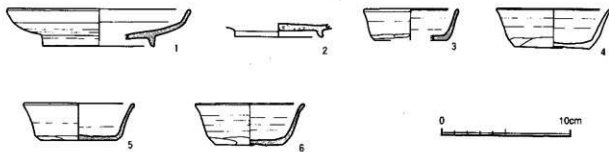
第39図 第19号竪穴住居跡と遺物実測図



第40図 第19号竪穴住居跡（旧）実測図

第20号竪穴住居跡（旧第10号竪穴住居跡）（第58図中に範囲を表示）

東側調査区の北部に位置し、I-19-cグリッドに主体を置く。本住居のあたりは最も削平の激しい地区で表土直下がハードロームとなっており、竪穴住居も周溝、柱穴の一部しか残されていない。そのため遺構全形を窺うことはできないが西辺から南辺にかかるの部分と比較的まとまって出土した須恵器高台付皿・坏、土師器坏によって竪穴住居の存在を確認した。



第41図 第20号竪穴住居跡遺物実測図

第20表 第20号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量 口径	法量 口径	法量 口径	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	須恵器	高台付皿	19.1	10.7	4.0	7.5YR5/3にぶい 褐 長石焼成良	ロクロ整形 付け高台	2/3欠
2	須恵器	高台付皿	-	9.2	1.4	5Y5/1灰 長石、 石英焼成良	ロクロ整形 付け高台	転用磁
3	須恵器	坏	9.9	7.4	3.8	5YR5/3にぶい赤 褐 長石、焼成良	ロクロ整形	1/4欠
4	土師器	坏	11.9	7.8	4.2	7.5YR7/6橙 長 石、焼成良	ロクロ整形	ほぼ完形 赤彩?
5	須恵器	坏	11.5	8.0	3.9	2.5Y5/1黄灰 長 石、焼成良	ロクロ整形	1/4欠
6	須恵器	坏	11.5	7.2	4.4	10YR7/4にぶい 黄橙、赤色粒、焼 成良	ロクロ整形 回転糸切り後手持ち荒削り	1/2欠

第21号竪穴住居跡（旧第11号竪穴住居跡）（第42図）

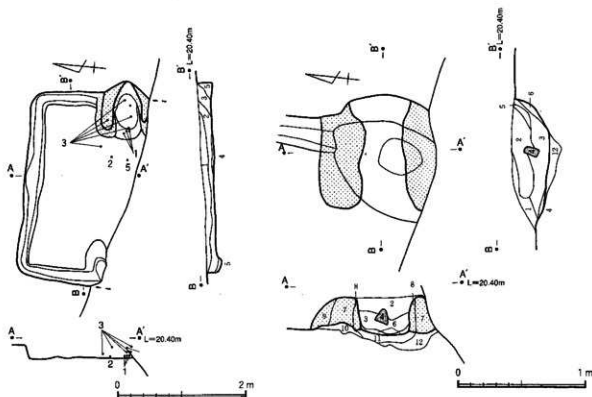
東側調査区の中央部のやや南寄り、L-20-aグリッドに主体を置く。竪穴の南半分は11号溝に切り取られる。

規模と形状は、主軸長2.9m、直交する軸長1.8m（残存値）の方形を呈すると考えられる。壁高は20cm前後、主軸方位はN-90°30'-Eを測る。周溝は幅20cm深さ約10cmで断面U字状を呈し、調査した範囲では竈下も含めて検出した。竈は本遺跡唯一の東竈である。東壁の中央部に壁面をわずかに掘り込んで造られていた。

遺物には竈の中から出土した4の土製支脚の他、竈周辺から出土した土師器高台付皿・坏、須恵器瓶等がある。

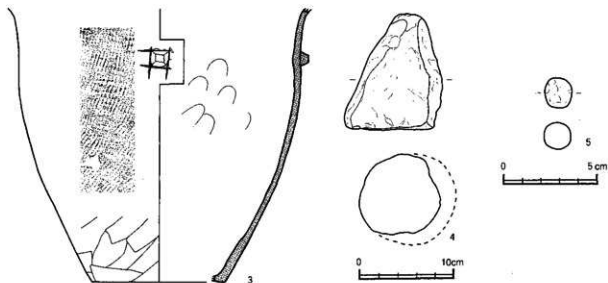
第21表 第21号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量 口径	法量 口径	法量 口径	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	土師器	高台付皿	13.4	6.9	2.8	7.5YR7/4にぶい 橙 長石、焼成良	ロクロ整形 付け高台 体部内面にヘラ磨き	内黒 1/3欠
2	土師器	坏	12.0	8.4	3.7	7.5YR6/6橙 赤 色粒、焼成良	非ロクロ 体部下端手持ちヘラ削り	3/4欠 上総型坏
3	須恵器	瓶	-	13.9	29.3	7.5YR6/4にぶい 橙 長石、焼成良	ロクロ整形 体部外面は縦叩き、下端は手持ちヘラ削り 胴部上位に方形の横み	胴部1/5残
4	土製品	支脚	長さ 12.2	幅 9.5	厚み 8.5			
5	土製品	土玉	長さ 1.6	幅 1.6	厚み 1.5			



- 1 10YR2-2 窯 rome 粒 (2mm大) を1%含む。粘性、しまり強い。
 2 10YR2-2 窯 rome ブロック (1cm大) を1%含む。粘性、しまり強い。
 3 10YR2-2 窯 粘土砂粒をわずかに含む。粘性、しまり強い。
 4 10YR2-2 窯 rome 粒 (3mm大) を5%含む。粘性強く固くしまっている。窯内材
 5 10YR2-15 窯 rome 粒 (5mm大) を2~3%含む。粘性、しまりやや強い。

- 1 5YR3-1 灰燼 白砂粒を1%含む。粘性、しまり強い。
 2 5YR3-2 灰燼 白砂粒、焼成粘土ブロックを7~8%含む。粘性、しまり強い。
 3 7S5YR3-2 灰燼 白砂粒、灰を含む。粘性、しまりやや強い。
 4 5YR17-1 灰燼 灰と炭化材
 5 5YR3-3 灰燼 焼成を受けた灰質土
 6 5YD2-1 灰燼 焼土粒をわずかに含む。灰質土
 7 10YR4-1 灰燼 粘土、一部粘土砂粒が混じる。
 8 7S5YR4-2 灰燼 焼土灰を少し含む。粘土。
 9 7S5YR3-1 灰燼 粘土。粘性、しまり強い。
 10 10YR4-2 灰燼 rome 粒を5~7%含む。粘性、しまり強い。
 11 5YR4-2 灰燼 焼土ブロック (1cm大) 粘土ブロックを多量に含む。
 12 10YR4-2 灰燼 rome ブロック (1cm大) を7%含む。



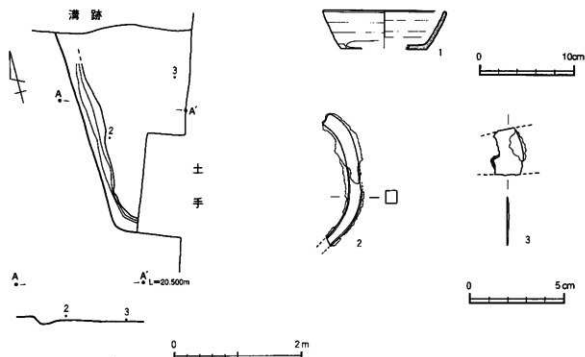
第42図 第21号竪穴住居跡と窯と遺物実測図

第22号竪穴住居跡 (旧第13号竪穴住居跡) (第43図)

東側調査区の中央部東端やや南寄りの土手脇から検出した。M-21-d グリッドに主体を置く。竪穴東半分は土手の下部になるため未調査とした。また北辺部分は調査区中央部を東西に横切る12号溝によって切れ、消失しており遺存状況は不良であった。

規模と形状は、主軸長3m (残存値)、直交する軸長2.0m (残存値) の方形を呈すると考えられる。壁高は5cm前後、主軸方位は不明である。周溝は不揃いで幅20cm深さ約5~10cmを測る。

遺物には須恵器坯および鉄製品がある。



第43図 第22号竪穴住居跡と遺物実測図

第22表 第22号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm 口径	法量cm 底径	法量cm 器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法 他	備考
1	須恵器	坏	12.6	9.6	4.1	10YR5/1褐灰 長石、焼成良	ロクロ整形 体部下端手持ちヘラ削り	3/4次
2	鉄製品	不明	長さ 7.0	幅 0.7	厚み 0.7			
3	鉄製品	鎌?	長さ 1.9	幅 2.5	厚 0.1			

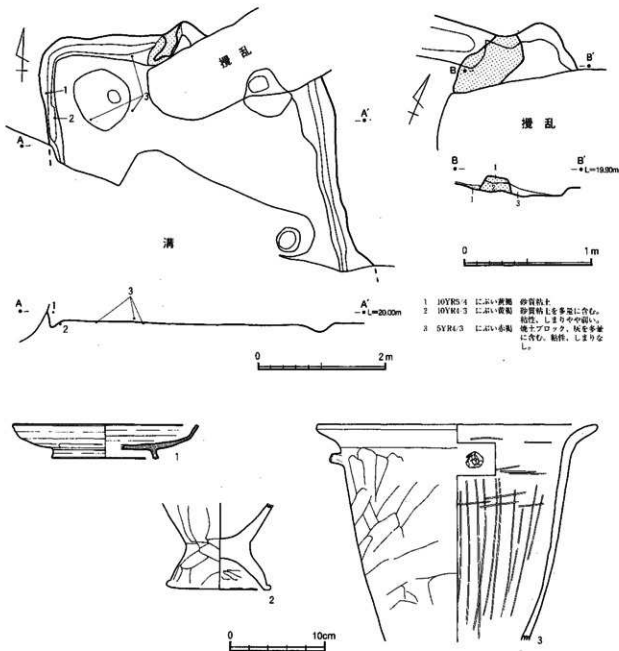
第24号竪穴住居跡 (旧第15号竪穴住居跡) (第44図)

東側調査区の中央部からやや南東寄りに位置し、M-21-a・b グリッドに主体を置く。竪穴の南半分は調査区を東西に横切る12号溝によって切れ、また北東コーナーでは18号住居と重複しながらさらに現代の攪乱を受けているため、18号住居との新旧関係は不明である。

規模と形状は、主軸長2m(残存値)、直交する軸長4.6mの方形を呈すると考えられる。壁高は15cm前後、主軸方位はN-11°30'-Wを測る。周溝は幅20cm深さ約5cmで断面U字状を呈し、調査した範囲では竈下を除き検出した。

竈は手前側に大きな攪乱が入り、右袖は既に消失し、左袖の基部をかろうじて残しているにすぎない。柱穴は北側の径80cm、深さ60cmほどを測る2柱穴と南東の柱穴痕跡を検出した。

遺物は1須恵器高台付皿、2土師器台付壺脚部、3四方に摘みのつく単孔の甕がある。



第44図 第24号竪穴住居跡と竈と遺物実測図

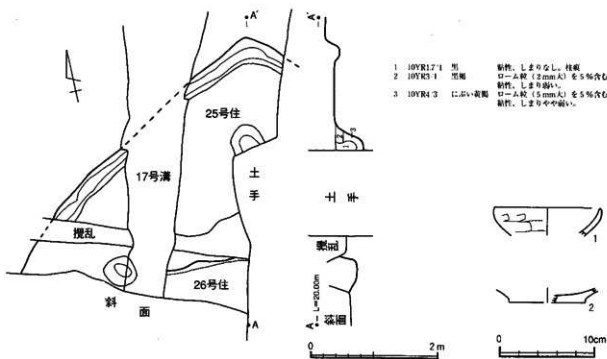
第23表 第24号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm 口径	口徑	底径	器高	は復元原 高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	須恵器	高台付皿	19.0	11.0	—	3.6	—	2.5Y4/1黄灰長石、石英、焼成良	ロクロ整形 付け高台	3/4欠
2	土師器	台付壺	—	10.7	—	9.2	—	5YR4/4にふい赤褐、長石、焼成良		
3	土師器	甗	29.2	—	—	23.2	—	5YR3/4暗赤褐長石、	胴部外面斜めヘラ削り 内面には粗い巖ヘラ磨き	胴部1/5欠

第25・26号竪穴住居跡（旧第16号竪穴住居跡）（第45図）

東側調査区の南東端に位置しN-21-d、O-21-bグリッドに主体を置く。竪穴の東側は土手下にもぐるため未調査である。西側には17号溝が南北にはしり、これに交差する形で現代の配水管理設備が掘られていた。また南半分には26号住居が掘り込まれるとともにその後の斜面の造成時においても壊されている。よって本住居として検出できた部位は、北コーナー周辺の壁と周溝、北東辺の2柱穴、それと床面の一部にすぎない。住居の規模としては検出できた2柱穴をもとに復元すれば5.8m前後の方形を呈し、壁高は20cm、周溝は幅20cm深さ10cm弱を測る。柱穴は径50cm深さ40cmほどで柱痕を持つ。26号住居については、南部での削平のために竪穴の北辺の一部を残すのみで、規模等も不明である。

遺物としては、土師器の1口クロ未使用の坏と2口クロ整形の皿を図示したがいずれも住居に伴う遺物として良いか疑問が残る。



第45図 第25・26号竪穴住居跡と遺物実測図

第24表 第25・26号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm 口径	口徑	底径	器高	は復元原 高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	土師器	坏	11.2	—	—	3.0	—	7.5YR7/4にふい橙、長石、焼成良	非ロクロ 丸底器形 体部内面にヘラ磨き	体部の一部残
2	土師器	皿	—	7.9	—	1.6	—	2.5YR4/6赤褐長石、焼成良		底部の1/3残

第27号竪穴住居跡（旧第18号竪穴住居跡）（第46～48図）

東側調査区の南端の、N-20-d、N-21-cグリッドに主体を置く。弥生時代の所産である2号及び7号住居を切って築かれている。東壁の北寄りの部分は現代の攪乱により壊される。

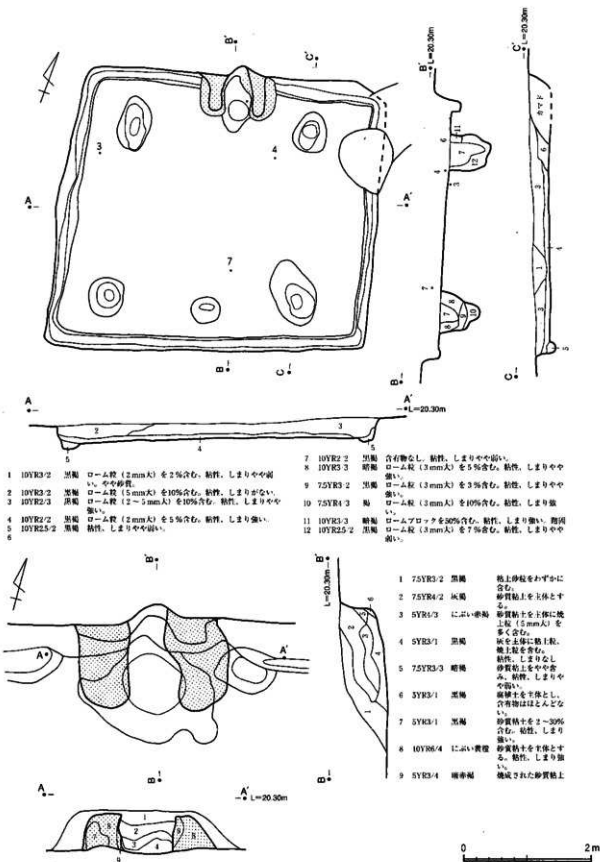
本住居では、壁直下を巡る周溝の他に、ほぼ同一の床面高で一回り内側を巡る周溝が検出され、竪穴の拡張が明白である。

規模と形状は、主軸長4.4m、これに直交する軸長5.8mのやや横長の方形を呈する。壁高は30cm、主軸方位はN-11°30'-Wを測る。周溝は15cm深さ約10cm、断面U字状を呈し、竈下を除き4方の壁直下を巡る。竈は北壁のほぼ中央の壁面をわずかに掘り込んでに造られる。この竈下のやや内側から旧竪穴時の竈の掘り方が確認された。柱穴は竪穴の四隅から主柱穴4本と、南壁沿いの中ほどから梯子ピットが検出された。主柱穴のうち南東柱穴を除く3柱穴については、それぞれ一回り内側に、大きく位置を離れた旧柱穴が検出された。これに対応するように周溝についても一回り内側を巡る旧周溝と旧竈掘り方が検出された。このことから南東柱穴を基準にして、北東壁と南東壁についてはその位置を大きく変えず、北西と南西の2方向に向けて拡張したことが判明した。周溝の規模は幅15cm、深さ5cm前後を測り、竈下を除く4辺を巡る。また旧周溝も竈下には延びないが幅・深さともに拡張時の削平のためか一定しない。

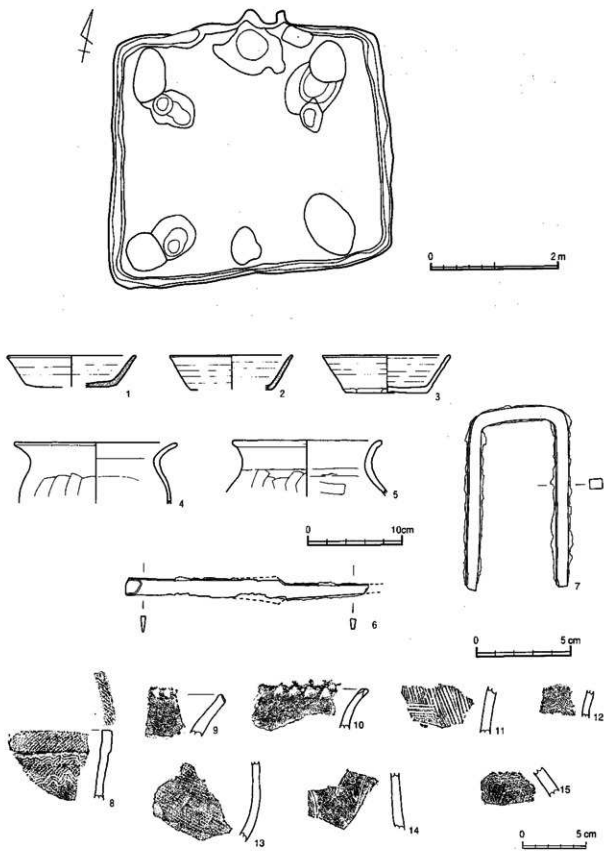
遺物には須恵器坏、土師器坏・甕、鉄製刀子、U字状をした鉄製品がある。その他に弥生の竪穴住居を壊していたこともあって覆土中から弥生土器の破片が多数検出された。

第25表 第27号竪穴住居跡出土遺物観察表

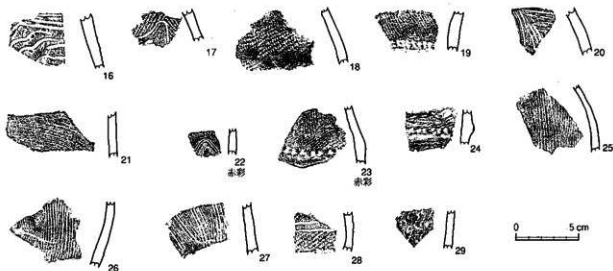
番号	種類	器種	法量cm		は覆元値 口徑	底径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			長さ	幅						
1	須恵器	坏	13.4	9.8	3.3			7.5YR6/6橙白色 粒、雲母、焼成良	ロクロ整形 底部は不定方向への手持ちヘラ削り	1/4残
3	須恵器	坏	13.0	8.6	3.6			2.5Y6/1黄灰 長石、焼成良	ロクロ整形 底部は手持ちヘラ削り	1/5残
4	須恵器	坏	13.5	8.5	4.0			7.5YR5/1褐灰 白色粒、雲母、小石	ロクロ整形 回転ヘラ切り後底部及び体部下端手持ちヘラ削り	体部1/4欠
5	土師器	甕	17.1	-	6.4			7.5YR6/4にぶい 橙 焼成良	胴上半部は縦ヘラ削り	体部上半部 1/5残
6	土師器	甕	15.2	-	6.0			7.5YR4/4褐 長石、焼成良	胴上半部は縦ヘラ削り	体部上半部 1/6残
8	鉄製品		長さ 9.5	幅 5.5	厚み 0.5					
9	鉄製品	刀子	長さ 12.8	幅 1.0	厚み					
8	弥生土器	壺							折返し口縁 口唇部と口縁外面にLR単節斜縄文 3本罫歯による波状文	
9	弥生土器	甕							口唇部をヘラ状工具による刻目	
10	弥生土器	甕							口唇部を交互に指頭押捺	
11	弥生土器	壺							4本罫歯による沈線文	
12	弥生土器								7本罫歯による波状文	
13	弥生土器	壺							布圧痕?	
14	弥生土器	壺							ヘラ描き沈線文	足洗式土器
15	弥生土器	壺							罫歯による波状文	
16	弥生土器								ヘラ描き波状文	
17	弥生土器	壺							LR単節斜縄文 ヘラ描き沈線区画	
18	弥生土器	壺							縄文	
19	弥生土器	壺							縄文	
20	弥生土器	壺							ヘラ描き	
21	弥生土器	壺							ハケメ調整	
22	弥生土器	壺							5本罫歯による波状文 赤彩	



第46図 第27号竪穴住居跡と電実測図



第47図 第27号竪穴住居跡(旧)と遺物実測図



第48図 第27号竪穴住居跡遺物実測図

番号	種類	器種	法量cm. は復元値			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
23	弥生土器	壺					羽状縄文 刺突文 赤彩	
24	弥生土器	壺					縄文 隆帯に刺突文	
25	弥生土器	壺					ハケメ調整	
26	弥生土器	壺					ハケメ調整	
27	弥生土器	壺					LR単筋斜縄文 3本櫛歯による波状文	
28	弥生土器	壺					LR単筋斜縄文 沈線文	
29	弥生土器	壺					縄文	

第28号竪穴住居跡 (旧第20号竪穴住居跡) (第49図)

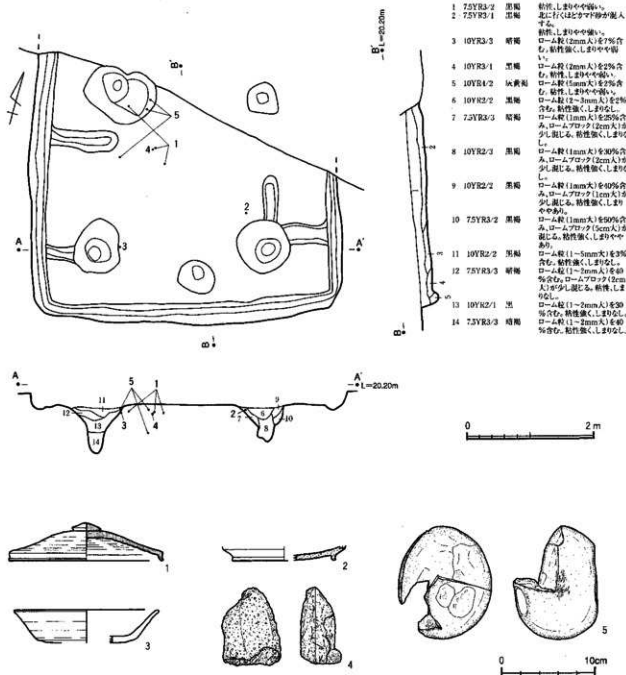
東側調査区中央からやや南東寄りのL-20-d, L-21-cグリッドに主体を置く。北側の辺は中世の11号溝によって竈々切り取られる。また弥生時代の3号住居を切って築かれる。

規模と形状は、主軸長4.0m(現存値)、これに直交する軸長4.9mの方形を呈すると考えられる。壁高は15cm, 主軸方位はN-11°-Wを測る。竈は既に消失していたが北壁側に設置されていたと考えられる。周溝は15cm深さ約8cm, 断面U字状を呈し、調査範囲内では検出した。また東辺では辺に対し垂直に延びる間仕切が2条検出され、うち1条は南西柱穴につながる。西辺では南東柱穴とを結ぶ間仕切り、この南東柱穴から西辺に並行して北に小さく延びる間仕切りが検出された。柱穴は北西・南西・南東の3箇所については床面上で検出され径80cm深さ70cmを測る。北東のものは11号溝の底面下から確認された。柱穴はいずれも柱の抜き取り痕を持つ。遺物としては、第49図に示した東海産の1須恵蓋, 2坏等がある。

第26表 第28号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm. は復元値			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
1	須恵器	蓋	16.4	3.1	4.0	2.5Y8/2灰白 白色粒、焼成やや良	ロクロ整形 やや扁平な隆宝珠つまみ	1/2欠 東海系
2	須恵器	坏	15.4	8.4	4.5	2.5Y4/1黄灰 白色粒、焼成良	ロクロ整形	1/5残 東海系

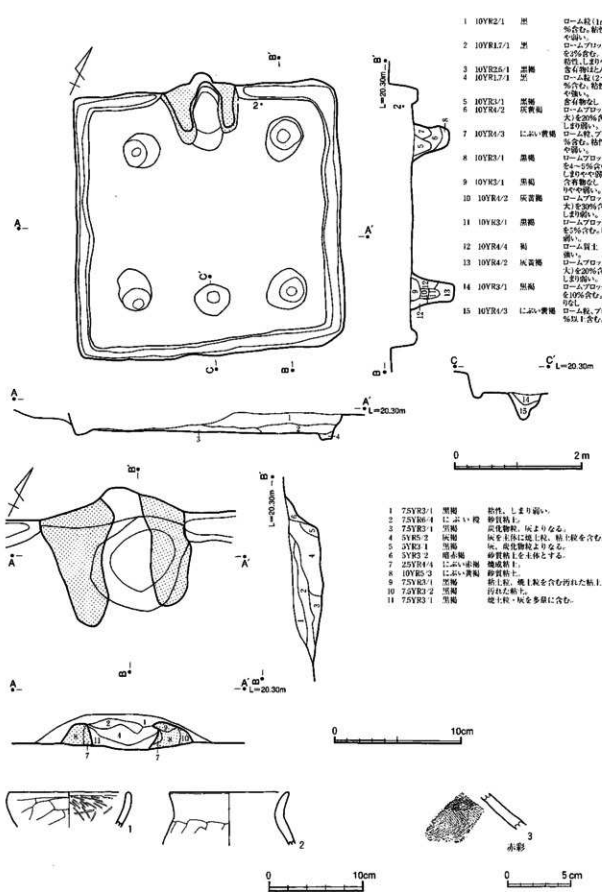
番号	種類	器種	法量cm. 口径	辻径 器高	辻厚cm. 器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
3	須恵器	坏	—	10.8	1.5	2.5Y6/1黄灰 黒色粒、精緻	ロクロ整形 付け高台 底部中央が高台下端と同じ高さ	底部1/3残
4		軽石	長さ 8.1	幅 6.1	厚み 4.3			
5	石器	磨石	長さ 11.9	幅 10.0	厚み 8.9		表面は研磨され光沢を持つ 被熱により破碎	



第49図 第28号竪穴住居跡と遺物実測図

第29号竪穴住居跡(旧第24号竪穴住居跡)(第50図)

東側調査区の南寄りに位置し、N-19-b、N-20-aグリッドに主体を置く。北側コーナーを14号溝



- | | | | |
|----|---------|--------|-----------------------------------|
| 1 | 10YR2/1 | 土 | ローム状(1mm大)を2%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 2 | 10YR1/1 | 土 | ロームブロック(1cm大)を20%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 3 | 10YR2/5 | 炭層 | 粘性、しまりや少ない。含有物ほとんどなし。 |
| 4 | 10YR1/1 | 土 | ローム状(1-3cm)を5%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 5 | 10YR1/1 | 炭層 | 含有物なし。 |
| 6 | 10YR1/2 | 灰質層 | ロームブロック(2-3cm大)を20%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 7 | 10YR1/3 | にぶい黄褐色 | ローム状、ブロックを50%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 8 | 10YR1/1 | 黒褐色 | ロームブロック(1cm大)を4-5%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 9 | 10YR1/1 | 黒褐色 | 含有物なし。粘性、しまりや少ない。 |
| 10 | 10YR1/2 | 灰質層 | ロームブロック(2cm大)を30%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 11 | 10YR1/1 | 黒褐色 | ロームブロック(2cm大)を2%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 12 | 10YR1/4 | 粘 | ローム質土。しまりや少ない。 |
| 13 | 10YR1/2 | 灰質層 | ロームブロック(1-5cm大)を20%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 14 | 10YR1/1 | 黒褐色 | ロームブロック(4cm大)を10%含む。粘性、しまりや少ない。 |
| 15 | 10YR1/3 | にぶい黄褐色 | ローム状、ブロックを50%以上含む。 |

- | | | | |
|----|----------|--------|-------------------|
| 1 | 7.5YR3/1 | 黄褐色 | 粘性、しまり少ない。 |
| 2 | 7.5YR4/4 | にぶい粘 | 砂質粘土。 |
| 3 | 7.5YR3/1 | 黄褐色 | 灰化層状。灰よりなる。 |
| 4 | 5YR5/2 | 灰褐色 | 灰を多量に含む粘土。粘土層を含む。 |
| 5 | 3YR3/1 | 赤褐色 | 粘。灰化層状よりなる。 |
| 6 | 5YR3/2 | 暗赤褐色 | 砂質粘土を主体とする。 |
| 7 | 2.5YR4/4 | にぶい黄褐色 | 塊状粘土。 |
| 8 | 10YR5/3 | にぶい黄褐色 | 砂質粘土。 |
| 9 | 7.5YR3/1 | 黄褐色 | 粘土層。塊状粘土を含む汚れた粘土。 |
| 11 | 7.5YR3/1 | 黄褐色 | 塊状粘土。灰を多量に含む。 |

第50図 第29号竪穴住居跡と竈と遺物実測図

と重複する。本住居は弥生時代の5号住居を切って築かれている。

規模と形状は、主軸長4.7m、これに直交する軸長4.2mのやや縦長の方形を呈する。壁高は40cm深い。主軸方位はN-27°30'-Wを測る。竈は北壁の中央に設置される。柱穴は四隅から4本の柱穴が検出され、南辺の中ほどから梯子ピットが検出された。主柱穴いずれも柱の抜き取り痕を持つ。周溝は西辺側に比べて東辺側は幅広く約25cmと深さ約10cm、断面U字状を呈し、竈兩脇を起点に四辺を巡っている。

遺物には土師器の1坏と2甕、弥生式土器破片があるが、本住居の時期を示しうる明瞭な資料はない。

第27表 第29号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	注量cm、口径、底径、器高	は復元値	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考	
1	土師器	坏	12.6	-	3.8	7.5YR6/4にぶい橙長石、焼成良	非クロロ 丸底器形 内面吸炭	口縁部の一部残 内黒
2	土師器	甕	12.5	-	5.7	5YR6/6橙長石、石英焼成良	胴上半部はへら削り	1/5残
3	弥生土器	甕					羽状縄文 LR縄文によるS字状結節文 赤彩	

第30号竪穴住居跡（旧第25号竪穴住居跡）（第51図）

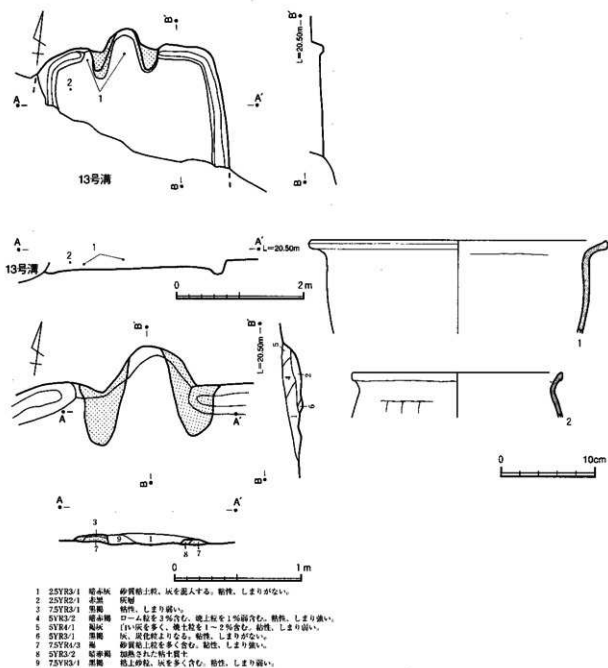
東側調査区中央からやや南寄りに位置し、M-20-aグリッドに主体を置く。竪穴の南半分は中世の13号溝によって切り取られる。樹木の根の繁茂が著しく遺存状況は極めて悪い。

規模と形状は、主軸長1.9m（残存値）、これに直交する軸長2.8mの方形を呈すると考えられる小型の住居である。壁高は10cm弱でソフトロームへの掘り込みも極浅く、軟弱な床面となる。主軸方位はN-16°30'-Wを測る。竈は北壁の中央からやや西寄りに偏って設置される。袖の高さ5cmほどs w、両袖の範囲をつかみに止まった。壁面への掘り込み比較的大きい。柱穴は調査範囲内では確認されず、周溝は軟弱な床面のため部分的に不明瞭な点を残す、遺存の良いところで幅15cm深さ約5cm、断面U字状を呈し、竈下を除き検出した。

遺物には須恵器甕2点がある。

第28表 第30号竪穴住居跡出土遺物観察表

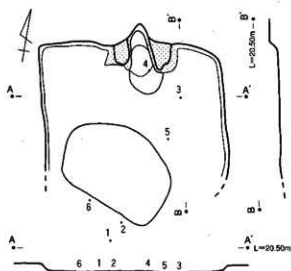
番号	種類	器種	注量cm、口径、底径、器高	は復元値	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考	
1	須恵器	甕	31.0	-	10.0	5YR4/6赤褐長石、石英 焼成良	折り返し口縁 胴部外面はナズ整形	一部残
2	須恵器	甕	22.0	-	4.8	5Y2/1黒長石、焼成良	折り返し口縁 胴部外面はへら削り 内外面吸炭	一部残



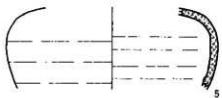
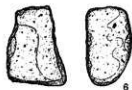
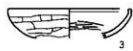
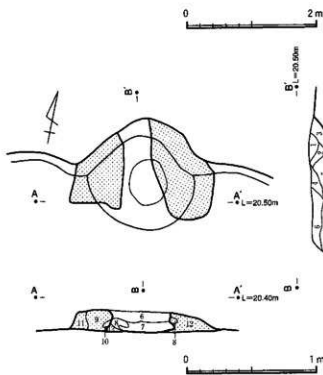
第51図 第30号竪穴住居跡と竈と遺物実測図

第31号竪穴住居跡（旧第26号竪穴住居跡）（第52図）

東側調査区の南側、29号住居の南東に位置し、N-20-a・bグリッドに主体を置く。5号住居の覆土中に築かれ調査当初には砂質粘土（竈）等から住居の存在自体はつかめたものの、平面プランを確定することはできなかった。掘り下げた結果、竈を持つ北壁、東・西の両壁と床面の一部を確認したが、周溝や柱穴の有無は不明で、また住居南半部に掘り込まれた現代の擾乱の影響もあって南壁を把



- | | | | |
|----|----------|-------|-------------------------|
| 1 | 5YR4/2 | 灰層 | 地蔵を受けた砂質粘土。手掘りガリに施している。 |
| 2 | 5YR3/1 | 土層 | 汚れた砂質粘土と灰をベースに焼土粒を含む。 |
| 3 | 5YR2/1 | 赤層 | 焼土粒と灰を少し含む。 |
| 4 | 7.5YR3/1 | 赤層 | 汚れた砂質粘土に焼土粒。灰を含む。 |
| 5 | 7.5YR6/1 | 灰土 | 白灰をベースに焼土粒。焼土粒を含む。 |
| 6 | 10YR4/2 | 灰黄層 | 砂質粘土粒、焼土粒を含む。汚れた粘土 |
| 7 | 10YR2/1 | 赤 | 炭化物質 |
| 8 | 2.5YR6/6 | 赤層 | ガリガリに焼けた内壁 |
| 9 | 10YR7/4 | にじみ黄緑 | 砂質粘土 |
| 10 | 10YR3/1 | 赤層 | 白焼粘土粒が混じる。 |
| 11 | 10YR3/1 | 赤層 | 焼土粒が混じり、粘性。しまりやや強い。壁上 |
| 12 | 10YR5/2 | 灰黄層 | 汚れた砂質粘土 |



第52図 第31号竪穴住居跡と竈と遺物実測図

握ることはできなかった。規模と形状は、主軸長2.3m(残存値)、これに直交する軸長2.9mの方形を呈すると考えられる。壁高は10cm弱、主軸方位はN-11°30'-Wを測る。竈は北壁のほぼ中央に付設されている。遺物には床面直上出土の土師器坏、須恵器壺等がある。

第29表 第31号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm. 口径	はば元値 口径	器高	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	須恵器	坏	12.9	7.8	4.0	5Y6/1R 雲母、白色粒、焼成良	ロクロ整形 底部のみ手持ちヘラ削り	1/7残
2	土師器	坏	14.0	8.8	3.5	2.5YR4/6赤褐長石、石英	非ロクロ平底器形 外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き 内外面赤彩	内面磨き 1/2残
3	土師器	坏	12.8	-	3.1	2.5YR5/6明赤褐長石、焼成良	非ロクロ丸底 外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	1/6残
4	土師器	坏	13.4	-	3.1	7.5YR6/4にふい塵 長石、焼成良	非ロクロ丸底 外面ヘラ削り 内面ヘラ磨き	1/6残
5	須恵器	短頸壺	-	-	8.7	7.5Y6/1R 雲母、焼成良	ロクロ整形	胴部1/5残
6	台石		長さ	8.4	幅	4.9		6.0

第32号竪穴住居跡 (第53図)

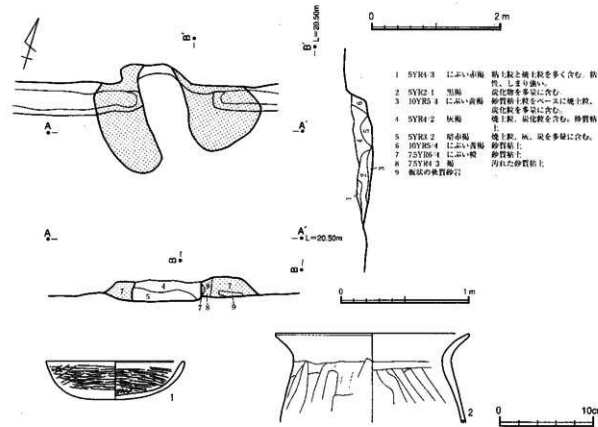
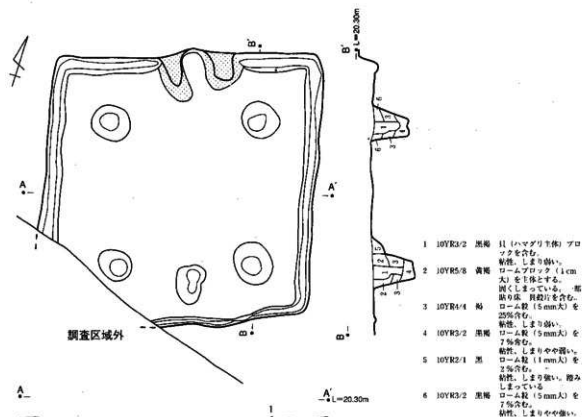
東側調査区の南端に位置し、O-19-aグリッドに主体を置く。住居南西側での壁高は、調査区の南限を区切る道路に向けて下降する斜面にかかるため東壁・南壁ともに遷滅し、コーナーは削り取られている。住居の東辺では弥生時代の住居である8号・9号の各住居を襲している。

規模と形状は、主軸長4.3m、これに直交する軸長4.3mの正方形を呈する。壁高は30cm、掘り込みがハードルーム層におよぶため堅固な床面となる。主軸方位はN-15°30'-Wを測る。竈は北壁のほぼ中央に設置される。周溝は南壁沿いでは不明瞭ながら、遺存の良い他の3辺では幅15cm深さ約5cm、断面U字状を呈し、竈の両袖下までおよんでいる。柱穴は竪穴なの四隅から径50cm前後、深さ60cmの4本が検出され、また南壁沿いの中央から径40cm、深さ20cmの梯子ビットも検出された。主柱穴については柱痕が残り抜き取りは行われていない。

遺物としては土師器坏、甕がある。

第30表 第32号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm. 口径	はば元値 口径	器高	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	土師器	坏	14.5	-	4.1	10YR4/2灰黄褐赤色粒焼成良	非ロクロ丸底 内外面ヘラ磨き 樹脂皮膜	1/2欠
2	土師器	甕	20.3	-	9.5	7.5YR5/2灰褐長石、焼成やや良	胴部外面縦ヘラ削り	胴上半部 1/2残



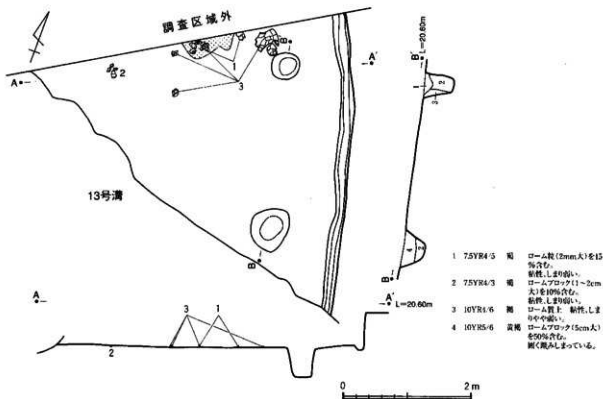
第53図 第32号壁穴住居跡と竈と遺物実測図

第33号竪穴住居跡（旧第34号竪穴住居跡）（第54・55図）

東側調査区やや南寄りの西縁に位置し、M-18-bグリッドに主体を置く。住居の西辺の一部をかわうじて残すものの、北西側は郷土博物館建設時の擁壁工事の際に、また南西側は中世の13号溝によって大きく開削されており、遺存状況は極めて悪い。

規模と形状は、南北長4.5m（残存値）、東西長5.0m（残存値）の、三角形の範囲である。壁高は50cm、主軸方位は不明。床面北側から竈から流失したと考えられる砂質粘土のを確認したにとどまる。周溝は検出できた東壁下で幅15cm深さ約5cm、断面U字状を呈する。柱穴は東壁沿いの2柱穴が検出され、径は50～60cm深さ40～50cmを測る。

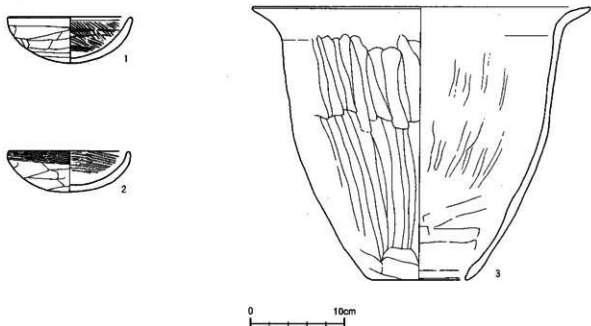
遺物としては第55図に示した土師器坏1・2、甕3がある。



第54図 第33号竪穴住居跡実測図

第31表 第33号竪穴住居跡出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量, 口径	口底径	口底径	高さ	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法 他	備考
1	土師器	坏	13.0	-	4.9		10YR6/3にぶい 黄橙 長石、焼成良	非ロクロ丸底 内面ヘラ磨き 内外面黒色処理	ほぼ完形
2	土師器	坏	12.7	-	4.4		7.5YR6/4にぶい 橙 長石、石英焼成良	非ロクロ丸底 内面、外面の口縁部ヘラ磨き 内外面黒色処理	1/2欠
3	土師器	甕	25.9	11.0	23.9		7.5YR6/4にぶい 橙 長石、焼成良	胴部縦ヘラ削り、内面ヘラ無で	1/2欠



第55図 第33号竪穴住居跡と遺物実測図

3. 中世以降の遺構と遺物

ここでは、主に中世以降の遺構について取りまとめておきたい。

遺構としては、掘立柱建物跡、溝跡、土壇等がある。また遺物としては、各遺構に伴う遺物の他に、出土地点は特定できるものの遺構との関連が直接的に証明出来ないもの、あるいは表土等からの一括として取り上げられた遺物等も別個に記載した。

(1) 掘立柱建物等

ピット列も含めて7ヵ所を検出した。

第1号ピット列跡 (第56図)

北側調査区の西寄りのI-12-bからI-12-a・bグリッドにおいて検出された。しかし東端には大きな擾乱が掘り込まれており遺構としての全容は確認出来なかった。出土遺物は皆無であり時期を特定することは困難であるが、ピット個々の覆土の感触ではさほど古いものとは感じられなかったことを付け加えておく。確認された範囲で全長は約8.4m、ピットは8ヶが見つかり、各々は径約40cm深さ約30cmである。ピット列の軸方位はN-76° 30'-wを示す。

第2号掘立柱建物跡 (第56図)

北側調査区の東よりに位置し、I-16-b・dグリッドに主体を置く。遺構の南部は、博物館の擁壁により壊されている。柱穴は北西辺で4穴、その内側で2穴の都合6穴のが検出されたが内側の柱筋はきれいに通らない。確認された範囲での東西長は7.5mほどである、柱穴の上面径は30~40cmとやや細く、深さは20~90cmを測る。全形は窺えないものの総柱建物を想定した。主軸方位は、北西辺の柱穴

列を基本にするとN-69° 00'-Eを示す。

第3号掘立柱建物跡 (第57図)

2号掘立柱建物跡から北に5mほど離れたH-16-c・d, H-17-cグリッドから礎石を持つ柱穴6穴を確認することができた。基本的には掘り方底面に20~30cm大の石が置かれた掘立柱建物である。ただし南辺の東から2番目の柱穴では石が見られず、柱穴掘り方底面に径10cm深さ45cmの小ピットが検出され、覆土中位から時期不詳の瓦小片(布目瓦ではない)が出土した。小ピットと柱穴との関係は判断できなかった。建物としては南辺の4間と南北2間を想定したが、東端の石等も関係する可能性がある。確認された範囲での東西長約7.2m, 南北長3.6mを測る。各柱穴は径30~50cm深さ10~30cm, 東辺での軸方位はN-12° 20'-Eを示す。

第4号掘立柱建物跡 (第58・59図)

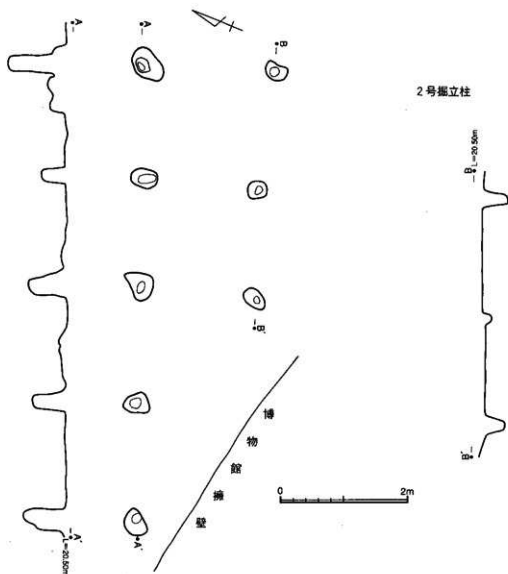
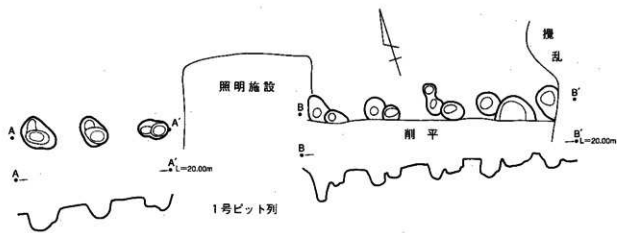
検出された柱穴列は、北東コーナー外縁のH-18-c・dグリッドに主体を置くが、遺構の北半部は既に崖面の崩落により消失しており、本来は北側に大きく延びる建物と判断した。崖面での消失もさることながら、中世以降現代までの攪乱も著しく、本遺構に用いられていたもの(礎石)と同様の石材が周囲からも出土し、本遺構の形状を確定することを困難にさせている。机上の検討では東西5間と南北3間分については妥当と判断した。各柱穴は、掘り方底面に礎石を据えその上に柱を乗せた掘立柱建物と考えられる。柱穴の規模は40cm前後深さ30~50cmを測る。柱穴の軸方位はN-9° 00'-Eを示す。

第5号掘立柱建物跡 (第58・60図)

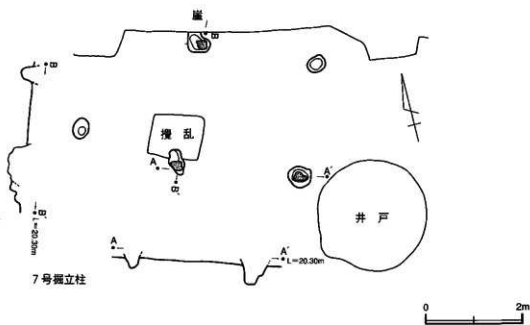
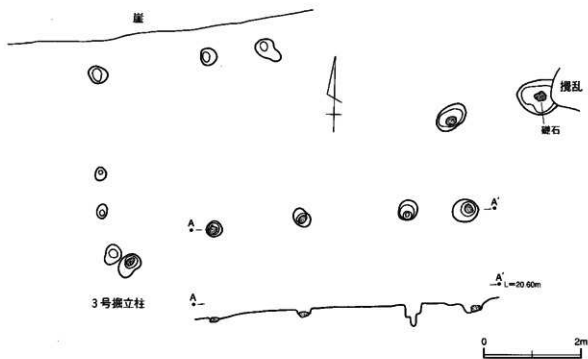
北東コーナー内側のI-18-c・d, J-18-b付近から検出されたが、遺構の西半部を博物館通路により切り落とされ消失している。また遺構中央部には博物館で使用中の給水施設が残されていたため、この部分だけ後日の工事段階で調査したためエレベーション等が途切れる結果となった。4号建物跡同様に柱穴掘り方の底面に30~40cm大の礎石を据え、その上に柱を乗せた大型の掘立柱建物である。調査段階では南北辺では5間、東西辺で4間を確認でき、南北長約10m東西長約8mを測る。柱穴の規模は60~100cm深さ60cm前後、軸方位はN-11° 30'-Eを示す。ただ周辺からも石とピット等が検出され、建物の規模と構造を確定することはできない。東辺の北から4番目の柱穴覆土上部から土師質土器の坏1点(第80図11)が出土し、本遺構の年代の一端を示す遺物と考えたい。

第6号掘立柱建物跡 (第58図中に表示)

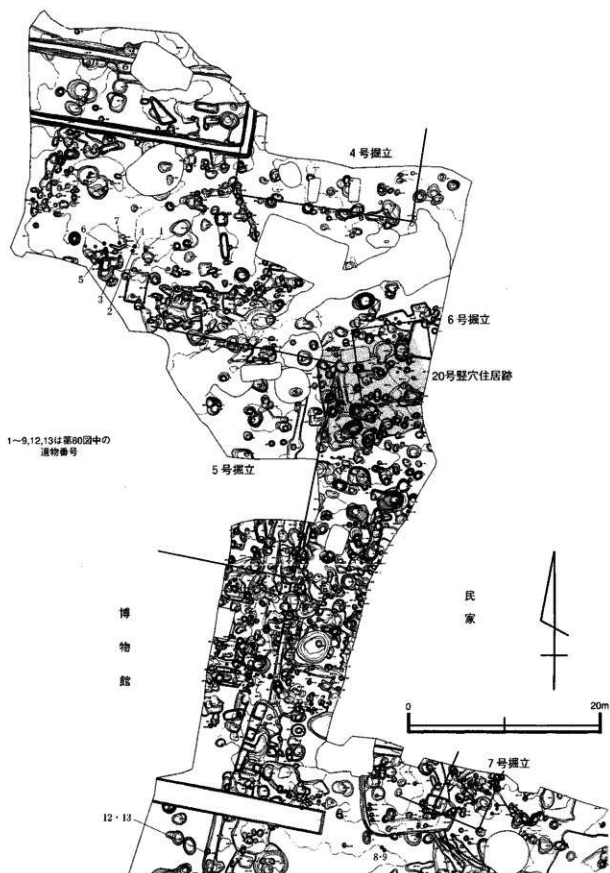
北東コーナーの東の外縁部、I-19-a・c付近に主体を置くが遺構の東半部は崖面により消失し、16号土壌によっても壊されている。東西列・南北列とも2間のみを検出した側柱建物と考えられる。柱穴の規模は径50cm深さ50cm前後を測り、南北列での軸方位はN-8° 40'-wを示す。時間的には前代に遡る可能性が考えられる。



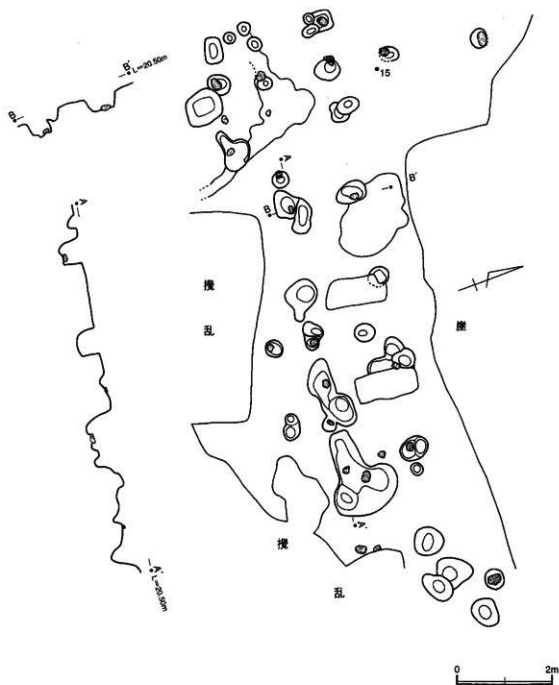
第56図 第1号ピット列・第2号掘立柱建物跡実測図



第57图 第3・7号掘立柱建物跡実測図



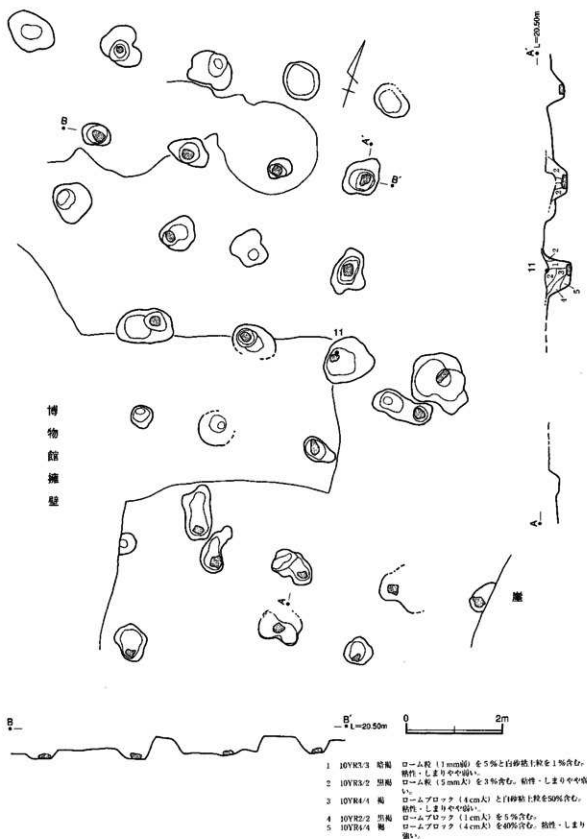
第58図 ビット集中区測量実測図



第59図 第4号掘立柱建物跡実測図

第7号掘立柱建物跡 (第57図)

東調査区の中央部K-19-d, K-20-cグリッドに主体を置くが遺構の北半部は、民有地での掘削等により既に消失している。確認できたのは東西・南北共に1間分、柱間隔は約2mである。柱穴は径約40cm深さ約50cmを測る。南辺と西辺の柱穴では掘り方底面に20~30cm大の石が据えられた掘立柱建物である。軸方位はN-24° 20'-Eを測る。



第60図 第5号掘立柱建物跡実測図

(2) 溝跡

溝跡については、遺構片側の落ち際だけを確認したに過ぎないため図化し得なかった1条(大堀)を含め18条を検出した。ただし博物館西側のトレンチ(II・III)で検出された溝については規模も方向性も確定できないため全体図(付図)と写真(図版15下段)での表示にとどめ遺構数、説明等は省略している。

第1号溝跡(旧第3号溝)

北側調査区の北西端に位置し、主郭と第II郭とを区切る大堀であると考えられる。ただし今回の調査区内には一部しかかかっておらず、土壌の項でも述べるごとく竪穴状の床面下から堀の東側の縁が検出されたに過ぎない。従って幅も深さについても確定することはできなかった、現状で見る限り主郭を形作る土塁との間は10mほど離れており、堀上面での最大幅は8~9mほどが想定できる。

第2号溝(旧第2号溝)(第61・70図)

北側調査区の中央よりやや西よりのH-12-c・d, H-13-c・dで検出され、台地縁辺に沿って東西方向に走る。他遺構との関係では、2号土壌(地下式土壌)の上面をかすめ、3号土壌の南辺と3号溝の覆土上部を切っている。地下式壕との新旧関係では平面での重複ではないため新旧不明であるが本遺構の方が新しいと考えている。規模は長さ約9m幅50cm深さは20cmを測る。

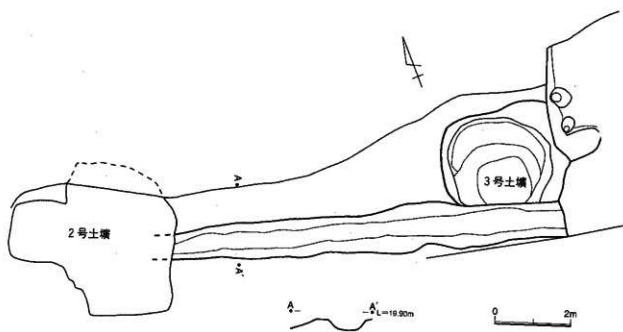
第3号溝跡(旧第1号溝)(第63・64図)

北側調査区中央のH-13-b・dグリッド他から検出された。溝は南北方向に走り北端では大きく東に反れて崖部分で消失している。開口部側の溝西側には竪穴状の落ち込みが見られ付随する虎口のようにも見られるが十字に設定した土層断面の観察による限り、本溝を切って設けられた竪穴状遺構と考えられる。またこの底面から径40~60cm深さ60cm前後の小ピット4穴が確認されたが遺構の性格を明らかにすることは出来なかった。溝の断面はV字を呈する「菜研堀」である。北を基点とした軸方位はN-4°10'-Wを示し、溝の幅としては上面で2.2m下面0.4m深さは確認面から1.5mを測る。覆土中の上部からは何枚かの踏固面が確認され堀底道としての利用が考えられた。ただし調査し得た範囲が狭いため、各踏固面(道)がそれぞれ1時期の道として良いのか判断できない。

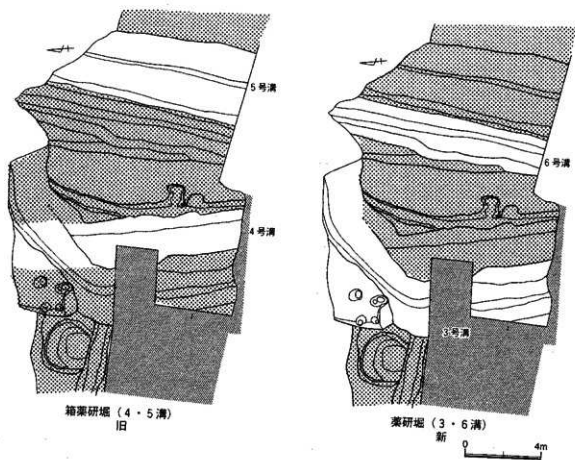
溝の遺物としては、土器の細片が少量しか出土せず図化するにはいたらなかった。竪穴状遺構の覆土上部から第70図の青磁蓮弁文碗の小破片が出土している。青磁碗は龍泉窯系で蓮弁には鏝が見られず横田・森田編年というI-5・aに該当しよう。

第4号溝跡(旧第1号旧溝)(第63・64図)

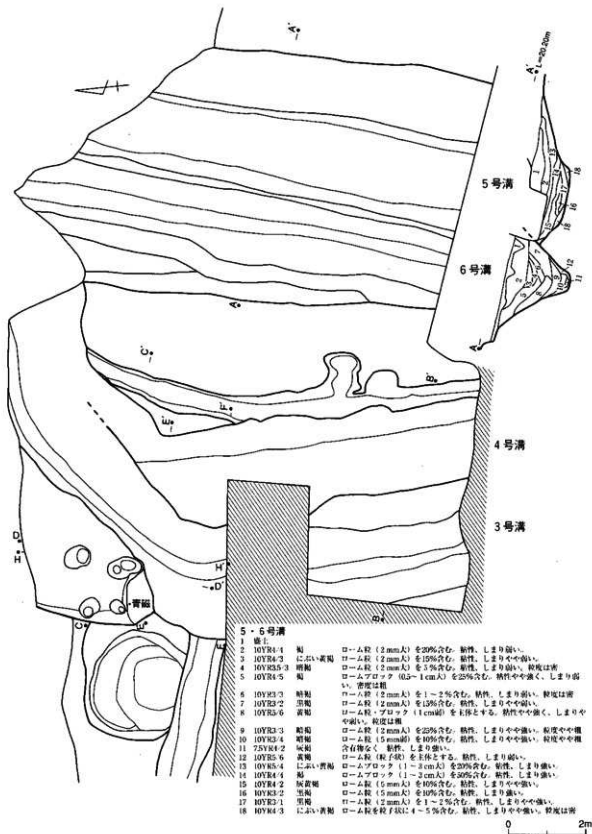
3号溝と平行に延びる箱菜研の堀である。H-14-a・cグリッドに主体を置く。溝の北端部と西側については3号堀によって切り取られている。軸方位はN-1°00'-W、現状での溝幅は上面2m下面1.5mほど深さ60cmを測る。覆土上面には3号溝の覆土上面から延びる踏固面が続き、この面から後述する第4号土壌(墓塚)が検出されている。



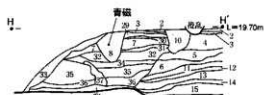
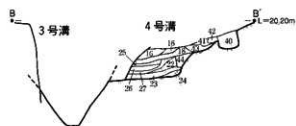
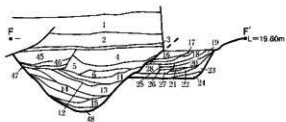
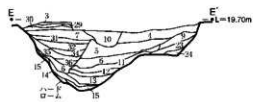
第61図 第2号溝跡実測図



第62図 3～6号溝の変遷図



第63図 第3～6号溝跡実測図



- 1 04YR4 4 堀 ローム殻 (1mm大) を7%含む。炭をわずかに含む。粘性、しまり少ない。腐敗
- 2 04YR3 3 堀殻 ローム殻を7%、ロームアロク(2cm大)を2%含む。粘性、しまり少ない。
- 3 04YR3 2 堀殻 ローム殻を7%含む。同じくしまっている。掘削面
- 4 04YR2 3 堀殻 ロームアロク(1cm大)を3%含む。粘性、しまりやや強い。
- 5 04YR2 2 堀殻 ローム殻 (5mm大) を3%含む。粘性、しまりやや強い。
- 6 04YR2 1 堀殻 ロームアロク(1cm大)を3%含む。粘性、しまり少ない。同じくしまっている。
- 7 04YR4 5 堀殻 ロームアロク(2cm大)を25%含む。粘性、しまり強い。
- 8 04YR3 3 堀殻 ローム殻 (2mm大) を3%含む。粘性、しまり強い。
- 9 04YR2 2 堀殻 ローム殻を1%含む。粘性、しまり強い。
- 10 04YR2 3 堀殻 ローム殻、ロームアロク(2cm大)を10%含む。粘性、しまりやや強い。
- 11 04YR3 4 堀殻 ローム殻を少し1%含む。粘性、しまりやや強い。
- 12 7.5YR3 3 堀殻 ロームアロク(1cm大)を2-3%含む。粘性、しまり強い。
- 13 04YR3 4 堀殻 ローム殻 (2mm大) を5%含む。粘性、しまりやや強い。
- 14 7.5YR2 2 堀殻 腐植土で含有物なし。粘性やや弱く、同じくしまっている。
- 15 7.5YR2 3 堀殻 ローム殻 (2mm大) を1%含む。粘性、しまりやや強い。
- 16 04YR4 3 堀殻 ローム殻 (2mm大) を5%含む。粘性、しまり強い。同じくしまっている。
- 17 04YR5 6 堀殻 ローム殻 (2mm大) を50%含む。粘性、しまり強い。同じくしまっている。
- 18 04YR4 4 堀殻 ローム殻 (2mm大) を20%含む。粘性、しまり強い。
- 19 04YR5 6 堀殻 ローム殻 (1mm以下) を主体とする。同じくしまっている。(腐植層)
- 20 04YR5 5 堀殻 ローム殻 (1mm以下) を主体とする。同じくしまっている。(腐植層)
- 21 04YR3 4 堀殻 ロームアロク(2-3cm大)を20%含む。同じくしまっている。(腐植層)
- 22 04YR5 6 堀殻 ローム殻 (1mm以下) を主体とする。同じくしまっている。(腐植層)
- 23 04YR4 1 堀殻 ローム殻 (2mm大) を主体とする。しまりがなくボロボロする。
- 24 04YR4 4 堀殻 ロームアロク(2-3cm大)を1%主体とする。やわらかい。
- 25 04YR2 2 堀殻 含有物はほとんどない。粘性強く、同じくしまっている。
- 26 04YR3 1 堀殻 ローム殻 (2-3mm大) を20%含む。粘性強く、同じくしまっている。
- 27 04YR3 2 堀殻 ロームアロク(2cm大)を3%含む。
- 28 04YR2 2 堀殻 ローム殻 (2-3mm大) を10%含む。粘性やや強く、しまりはない。
- 29 04YR2 2 堀殻 ローム殻(1mm大)を3%含む。粘性、しまり強い。
- 30 04YR3 3 堀殻 ロームアロク(5mm大)を10%含む。粘性、しまり強い。
- 31 04YR2 2 堀殻 ロームアロク(1.5cm大)白色粘土ローム殻を含む。掘削されている。
- 32 04YR3 3 堀殻 ロームアロク(1-2cm大)を10%含む。粘性、しまりはやや強い。
- 33 04YR3 2.5 堀殻 炭上
- 34 04YR3 2.5 堀殻 ロームアロク(1-2cm大)を5%含む。粘性、しまりやや強い。
- 35 04YR3 3 堀殻 ロームアロク(1-2cm大)を2-3%含む。粘性、しまりやや強い。
- 36 04YR3 2 堀殻 ロームアロク(1-3cm大)を2%含む。粘性、しまりやや強い。
- 37 04YR2 1 堀殻 腐植土。粘性はなく、しまりはない。
- 38 04YR3 3 堀殻 ロームアロク(1.5-2cm大)を10%含む。粘性やや強く、しまりはない。
- 39 04YR5 6 堀殻 ローム
- 40 04YR4 4 堀殻 ロームアロク(1-3cm大)を10%含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 41 04YR5 6 堀殻 ロームアロクを主体とする。粘性、しまり強い。
- 42 04YR4 3 堀殻 ローム殻 (2mm大) を2-3%含む。粘性やや強く、しまり強い。
- 43 04YR3 3 堀殻 ローム殻 (2mm大) を2-3%含む。粘性、しまりやや強い。
- 44 04YR4 4 堀殻 ローム殻 (2mm大) を2-3%含む。粘性、しまりやや強い。
- 45 04YR4 5 堀殻 ローム殻 (2mm大) を5%含む。粘性、しまりやや強い。
- 46 04YR4 5 堀殻 ローム殻 (2mm大) を5%含む。粘性、しまりやや強い。
- 47 04YR4 6 堀殻 ロームアロク(2cm大)を主体とする。同じく掘削されている。
- 48 04YR2 2 堀殻 炭上アロク(2-10cm大)を2-3%含む。
- 49 04YR4 4 堀殻 ローム殻 (5mm大) を20%含む。粘性、しまりはない。
- 50 04YR2 2 堀殻 ローム殻 (2mm大) を3%含む。粘性やや弱く、しまり強い。

第64図 第3・4号溝跡断面図

第5号溝跡(旧第8号溝)(第63図)

4号溝から7mほど東側のH-14-b・dグリッド他に位置し、4号溝とはやや軸を異にするが南北方向に走る箱葉研を呈する溝である。他の溝同様に北側崖面で途切れ、遺構上面の西側の縁は平行して走る6号溝の上辺によって切られており、本遺構の方が古いことが判明した。軸方位N-15°10'-Eを示し、上面幅は現状で3.2m下面幅1.3m深さは80cmを測る。

第6号溝跡(旧第9号溝)(第63図)

5号溝の西側にほぼ併走して走る葉研堀の溝であり、同じH-14-b・dグリッド他から検出された。軸方位はN-16°10'-E、上面での幅2.2m下面幅0.3m、深さ80cmを測る。

先述した3号溝と本溝とは、いずれも葉研であり、これに対し4・5号溝は箱葉研である。したがって異なるタイプの溝が2条づつ併走し、かつどちらも葉研の溝が箱葉研を壊していたことが判明した。箱葉研の溝が位置を違えて2度設けられ、後に葉研の溝がやはり2度掘り込まれた可能性も残されているが、第62図にみるように同じタイプの溝同士は概ね平行関係を有し、また溝の幅や深さなどの規模においても近似性が窺えることから同種の2条の溝は共存したとする方が妥当であろう。したがってまず箱葉研の4・5号溝が2重の溝として設けられ、これらの溝がほぼ埋没した後に葉研の3・6号溝がそれぞれ先の溝の西側に、やはり2重の溝として掘り直されたと考えられる。

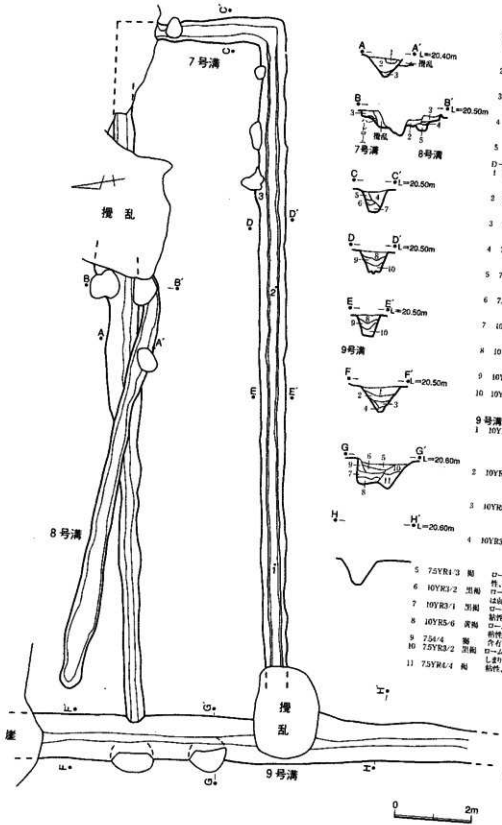
第7号溝跡(旧第5・7号溝)(第65図)

北側調査区の東寄りのH-16-c・d、H-17-c・dグリッドにまたがる。北側の溝上面では斜めに8号溝が交差し、また西端には本溝の西端を区切るように9号溝が南北に走る。北東コーナーは崖により消失する。規模と形状は、長軸にあたる東西長18.3m南北長4.5mで東西方向に長いコの字状に巡り、長軸の方位はN-99°00'-Eを示す。断面形状は逆台形を呈し、上面での幅70cm下面で20cm深さ60cmを測る。底面の両端には若干の窪みが見られ板を並べた可能性がある。西側の両端は、本溝より一段深い9号溝によって区切られているが、断面観察によっても新旧を区別することはできず9号溝も含めて一つの遺構を構成する可能性もある。遺物としては、溝覆土および周辺から第70図上段の1~9が出土した。9は一括遺物として採取された陶製狛犬の胸部断片であり、瀬戸・美濃産で窖室中期のものとの指摘を得た。1~8はいずれも土師質土器であり、いずれも右回転クロロにより整形され、見込み部分の観察できる2~5では見込みの中心に軽い指ナデが施されている。

第8号溝跡(旧第11号溝)(第65図)

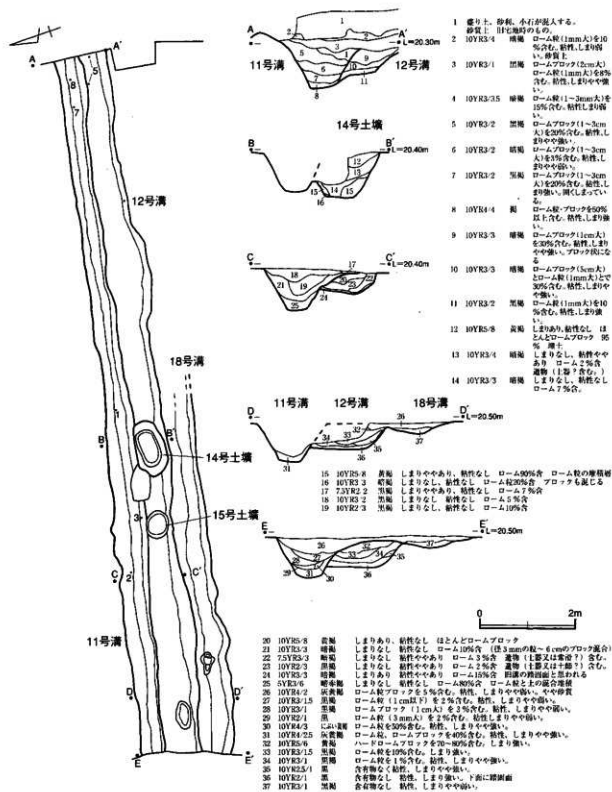
7号溝の北側の溝と交差するようにH-16-c・dグリッド他から検出された。7号溝の上部をかすめており本遺構の方が新しく、東西の両方向にさらに延びるものと考えられる。検出できた長軸の長さには約10.5m、長軸方位はN-111°40'-E、断面は浅いU字状で幅40cm深さ40cmを測る。

検出された遺物は無い。



- 7・8号溝
- 75YR4/25 堀
ローム状 (厚1mm以下)を10%含む。粘性なし。土中やや硬い。ロームアロップ(10mm大)を20%含む。腐くしまっている。
 - 10YR4/4 堀
ローム状(1mm大)を5%含む。粘性なし。土中やや硬い。ロームアロップ(1mm大)を10%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR3/4 堀
ローム状(2mm大)を5%含む。粘性なし。土中やや硬い。ロームアロップ(2mm大)を20%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR4/4 堀
ローム状(1mm大)を10%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR4/5 堀
ローム質土
- D-OOS A-A' B-B' C-C' D-D' E-E' F-F' G-G' H-H'
- 75YR3/25 堀
ローム状(厚2-4mm)を10%含む。粘性なし。
 - 75YR3/3 堀
ローム状(厚1-2mm)を1%含む。粘性なし。土中やや硬い。
 - 10YR3/4 堀
ローム状(2mm大)を2-3%含む。粘性。しまっている。
 - 75YR3/3 堀
ローム状(2mm大)を2-3%含む。粘性。しまっている。
 - 75YR4/3 堀
ローム状(2-5mm大)を20%含む。粘性。しまっている。
 - 75YR4/3 堀
ローム状(2-5mm大)を20%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR4/3 堀
ローム状(2mm大)を2-3%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR3/2 堀
ローム状(1-2mm大)を2-3%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR4/3 堀
ローム状(10%含む)を10%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR4/4 堀
ローム状(2mm大)を10%含む。粘性。しまっている。
- 9号溝
- 10YR3/2 堀
土質
ロームアロップ(2-3cm大)を7%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR4/4 堀
ローム状(2-5mm大)を30%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR5/6 堀
土質
ロームアロップを1体土する。粘性弱く腐くしまっている。
 - 10YR3/3 堀
土質
ローム状(5mm大)を5%含む。粘性。しまっている。
 - 75YR4/3 堀
ロームアロップ(15mm大)を2-3%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR3/2 堀
ロームアロップ(2-3cm大)を5%含む。粘性。しまっている。
 - 10YR3/1 堀
ロームアロップ(10-20cm大)を5%含む。粘性は弱く腐くしまっている。(腐葉土)
 - 10YR5/6 堀
ロームアロップ(3cm大)を2-3%含む。粘性。しまっている。
 - 75/4 堀
含有物少なく粘性。しまっている。
 - 75YR3/2 堀
ローム状(2-5mm大)を2-3%含む。粘性。しまっている。
 - 75YR4/4 堀
粘性。しまっている。

第65図 第7～9号溝跡実測図



第66図 第11・12・18号溝跡実測図

第9号溝跡（旧第6号溝）（第65図）

コの字状に巡る7号溝の西側の両端に位置し、H-16-c、I-16-a・cグリッドから検出された。本溝の両端は崖面と博物館の擁壁によりどちらも途切れており全形は不明である。検出できた長軸長は11.3mの方位は、N-9° 30'-Eを示し、先の7号溝の長軸方位とほぼ直交する。断面は逆台形を呈し上面幅1.2m下面幅0.2m深さ70～80cmを測る。また深さの点では本溝の方が10～20cmほど深いものの先の7号溝と合わせて一連の遺構となる可能性が高い。

本溝からの出土遺物は無い。

第10号溝跡（第69図）

北側調査区中程からやや東に寄ったH-15-a・cグリッドに位置する。溝の南端が17号住居を切って造られた南北方向に延びる溝である。また本遺構中央部には1号土壌が掘り込まれ、また北端については崖面により途切れる。検出した全長は4.5m上面幅1.7m下面幅0.2m深さ80cmである。長軸方位はN-13° 00'-Eを示す。

第11号溝跡（旧第11号新溝）（第66図）

東側調査区の中程を東西に横切る溝である。L-19-c・d、L-20-c・d、L-21-a・b・cグリッドにかかる。溝は南側を併走する12号溝を切る。12号溝の埋没後に掘り直したと考えられる。溝の中程では21号住居を切る。溝の東西の両端は博物館擁壁と市道側の崖によって途切れており全形は確認できない。現存する全長は29.4m断面は逆台形で上面幅2.2m下面幅0.6m深さ1.2mを測る。長軸方位はN-77° 00'-Wを示す。

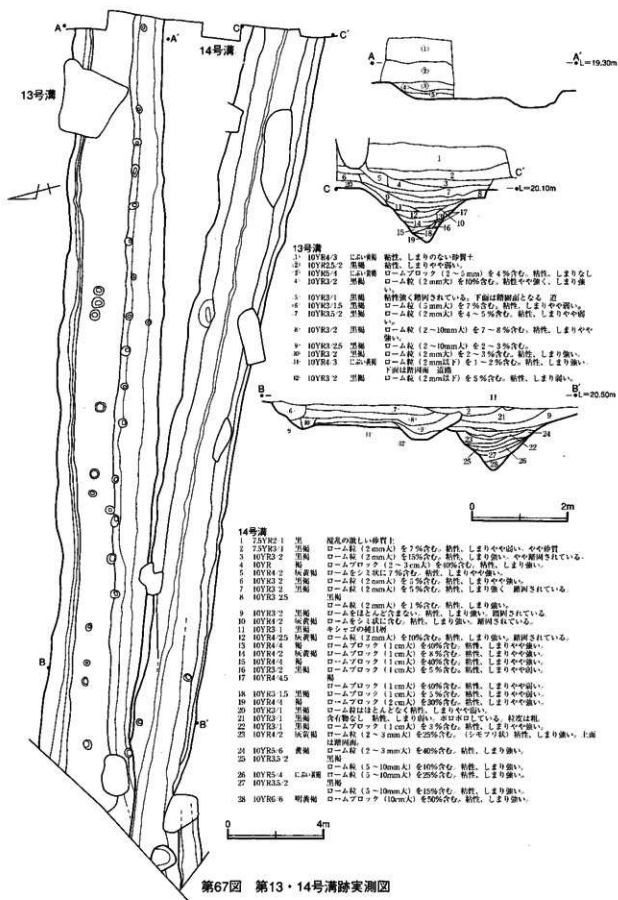
第12号溝跡（旧第11号旧溝）（第66図）

11号溝の南側を併走して東西に走り、属するグリッドもほぼ同じである。本溝も11号溝同様に東西の両端は途切れており全形窺うことはできない。また遺構の北辺は11号溝に切られ、溝の中央付近で14・15号の2基の土壌を切っている。溝の東側では3・18・28号住居の3軒の住居を切っている。現状での全長は約29.5m、上面幅1.2m下面幅1m深さ1.0mを測る。長軸方位はN-77° 40'-Wを示す。11号溝に比較すると幅はやや広く深さは反対にやや浅くなる。

遺物としては、溝東端の底面から第70図下段5の古瀬戸鉄軸瓶子が床面に密着して出土し、また覆土中から土師質土器1皿や2～4坏、6天目茶碗の底部が出土した。第78図中段に図示した14号土壌出土の常滑大甕は、分布状態を検討した結果、土壌に伴うものではなく本溝に伴うものと最終的に判断した。

第13号溝跡（旧第12号溝）（第67図）

先の11・12号溝から南へ5mほど離れ、ほぼ併走して東西方向に延びる溝である。M-18-b、M-19-a・b、M-20-a・b、M-21-a・bグリッドに主体を置く。底面は2段に分かれ、北側はやや浅く幅広くあるのに対し南側はさらに一段掘り下げられている。北側の底面は堅く踏みしめられた痕跡を持ち南



- 13号溝**
- 1 10YR4/3 礫土 粘質、しまりのない砂質土
 - 2 10YR3/2 泥炭 粘質、しまりや中強い。
 - 3 10YR3/4 礫土 礫ムプロック(2~5mm)を4%含む。粘質、しまりなし
 - 4 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を10%含む。粘質やや中強い、しまり強
 - 5 10YR3/1 泥炭 粘質強く固結されている。下面は階層面となる。礫
 - 6 10YR3/1.5 泥炭 礫ムプロック(5mm大)を7%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 7 10YR3/5/2 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を4~5%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 8 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(2~10mm大)を7~8%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 9 10YR3/2.5 泥炭 礫ムプロック(2~10mm大)を2~3%含む。
 - 10 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を2~3%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 11 10YR4/3 礫土 礫ムプロック(2mm大)を1~2%含む。粘質、しまり強い。
 - 12 10YR3/2 泥炭 下面は階層面 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を3%含む。粘質、しまり強い。

- 14号溝**
- 1 2.5YR2/1 泥 礫丸の散らばった砂質土
 - 2 2.5YR3/1 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を7%含む。粘質、しまりや中強い、やや砂質
 - 3 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を15%含む。粘質、しまり強い、やや固結されている。
 - 4 10YR 泥炭 礫ムプロック(2~3cm大)を40%含む。粘質、しまり強い。
 - 5 10YR4/2 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を7%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 6 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を5%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 7 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を5%含む。粘質、しまり強く固結されている。
 - 8 10YR3/2.5 泥炭 泥炭
 - 9 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を1%含む。粘質、しまり強い。
 - 10 10YR4/2 泥炭 礫ムプロックをほとんど含まない。粘質、しまり強い、固結されている。
 - 11 10YR3/1 泥炭 礫ムプロックの層状固結
 - 12 10YR4/2.5 泥炭 礫ムプロック(2mm大)を10%含む。粘質、しまり強い、固結されている。
 - 13 10YR4/4 泥炭 礫ムプロック(1cm大)を40%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 14 10YR4/2 泥炭 礫ムプロック(1cm大)を40%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 15 10YR4/4 泥炭 礫ムプロック(1cm大)を40%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 16 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(1cm大)を5%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 17 10YR4/4.5 泥炭 礫
 - 18 10YR3/1.5 泥炭 礫ムプロック(1cm大)を40%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 19 10YR4/4 泥炭 礫ムプロック(2cm大)を30%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 20 10YR3/1 泥炭 礫ムプロック(1cm大)を40%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 21 10YR3/7 泥炭 粘質がほとんどなく粘質、しまりや中強い。程度は粗。
 - 22 10YR3/1 泥炭 礫ムプロック(1cm大)を3%含む。粘質、しまりや中強い。
 - 23 10YR4/2 泥炭 礫ムプロック(2~3mm大)を25%含む。(シマツラ)粘質、しまり強い、上面は階層面。
 - 24 10YR5/6 泥炭 礫ムプロック(2~3mm大)を40%含む。粘質、しまり強い。
 - 25 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(5~10mm大)を10%含む。粘質、しまり強い。
 - 26 10YR5/4 礫土 礫ムプロック(5~10mm大)を25%含む。粘質、しまり強い。
 - 27 10YR3/2 泥炭 礫ムプロック(5~10mm大)を15%含む。粘質、しまり強い。
 - 28 10YR6/6 明礫土 礫ムプロック(10cm大)を50%含む。粘質、しまり強い。

第67図 第13・14号溝跡実測図

側の溝との間には、間隔が1.6mほどの規則的に配列された小ピット列が観察された。断面での土層観察によれば両溝は一体のものと思われることから道路遺構とこれに付随する側溝と考えたい。長軸方位はN-73° 20'-Wを示し、上面幅4.0m道路底面幅1.9m深さ0.5mを測る。側溝部の底面幅0.8m確認面からの深さ0.8mを測る。

遺物としては、明確な出土位置を示せるものはないが、一括して採取された第71図の中央上段1陶器蓋、2焼き塩壺、3砂岩製の温石などがある。いずれも混入と考えている。

第14号溝跡（旧第13号溝）（第67図）

東地区の南半部に位置し、東西に横切る溝である。M-18-c・d、M-19-c・d、M-20-c・d、M-21-c・d、N-20-b、N-20-a・bグリッドにまたがる。東西両端は、先の11～31号溝同様に途切れており、また本溝西端の博物館側の擁壁付近で先の13号溝と交差し、これに切られていることが判明した。周辺部では覆土上面から17～19号土層が掘り込んでいる。溝西半部では南側に接する5・6・10・29号の各住居を切る。断面はV字形の薬研堀を示し、その溝がある程度埋没した後、その窪みを利用して道として用いられたと考えられる。

道段階では堀の両肩部を壊して拡張され上面での道幅2.6m底面の幅は2.2m確認面からの深さ0.5mを測る。底面は固く踏み固められ、この底面上からキシヤゴの純貝層のブロックが点々と道に沿うかのように検出された。いずれの貝ブロックでも道の北側に厚く南に薄く堆積していることから北側からの投棄と判断した。なおキシヤゴについては本遺構から21mほど北側にある13号土層においても覆土中からキシヤゴの純貝層が一定量認められている。

薬研の溝としての上面幅2.8～3.2m底面幅0.2m前後深さ1.2m、長軸方位はN-65° 00'-Wを示す。

遺物としては、第71図中央下段に示した弥生時代と思われる1ミニチュア土器と2土鍾と3円筒埴輪の薄片を図示した。特に円筒埴輪片の出土は、周辺地域での古墳の存在を窺わせる資料といえよう。

第15号溝跡（旧第14・16号溝）（第68図）

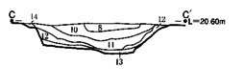
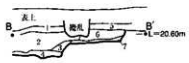
東側調査区の南東端に位置し、直角に折れ曲がる溝である。N-18-a・b・c・d、O-18-aグリッドにまたがって検出された。溝の両端は調査区外のいわゆる博物館の南側に延びる土塁様の高まりの下に延びており全形をつかむことは出来なかった。したがって土塁とされる高まりの成立時期が問題となろう。また本溝の北端では14号溝と一部重なるものの、重複範囲が狭いために新旧を把握することは出来なかった。また南側では、11号住居を寸断している。

溝の規模は、上面幅で2～4m、底面の幅は最も東端にあたる括れ部で1m、最大幅では2.5m深さ0.5mを測る。軸方位は不明である。

出土遺物としては、一括採取した第71図下段に図示した1土師質の乗櫓、2陶製すり鉢片等がある。いずれも覆土上面での採取であり本溝の時期を示すものではないと考えている。

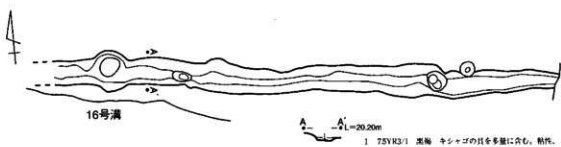
第16号溝跡（旧第15号溝）（第68図）

東側調査区の南端に位置し、O-20-a・b、O-21-a・bグリッドから検出された。東西方向に延びる



15号溝

- | | | | |
|----|-----------|----------|--|
| 1 | HOYR3-15 | 埋層 | ローム粒 (5mm以下) を1%含む。粘性、しまり強い。 |
| 2 | HOYR3-2 | 埋層 | ローム粒 (5mm以下) を7%含む。粘性、しまり強い。 |
| 3 | HOYR3-3 | 埋層 | ローム粒 (5mm以下) を60%含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 4 | HOYR4-3 | 2.5mの黄褐色 | ロームブロック (10cm以下) を25%含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 5 | HOYR4-3 | 2.5mの黄褐色 | 粘性、しまり弱い。やや砂質。 |
| 6 | HOYR4-2.5 | 埋層 | 底土、砂をブロック状に含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 7 | HOYR4-4 | 埋層 | ロームを少し砂に含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 8 | HOYR3-2 | 埋層 | 埋層 |
| 9 | HOYR4-3 | 2.5mの黄褐色 | 底土上、砂質上、5層に該当するかわ不明 |
| 10 | HOYR2-1 | 埋層 | 含有物なく。粘性、しまりやや強い。 |
| 11 | HOYR3-2 | 埋層 | ローム粒 (2mm以下) を5%含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 12 | HOYR4-3 | 2.5mの黄褐色 | ロームブロック (5~10cm以下) ローム粒を7~8%含む。粘性、しまりやや強い。 |
| 13 | HOYR4-5 | 埋層 | ローム粒・ブロックを土俵とする。(50%) 粘性、しまりやや強い。 |
| 14 | HOYR3-2 | 埋層 | 11、埋土砂を含む。粘性、しまりやや強い。埋土? |

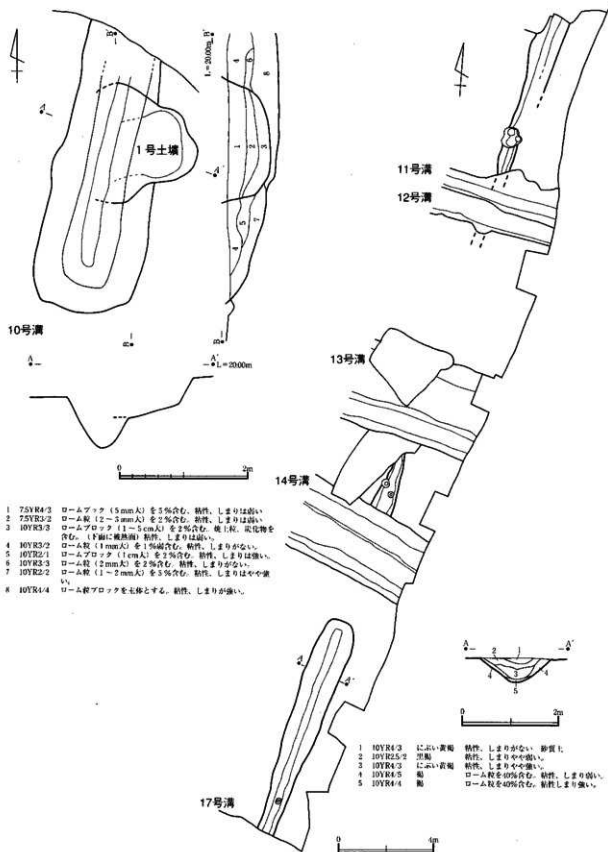


16号溝

A-A' L=20.20m

1 7BYR2-1 埋層 キシヤゴの貝を多数に含む。粘性、しまり強い。

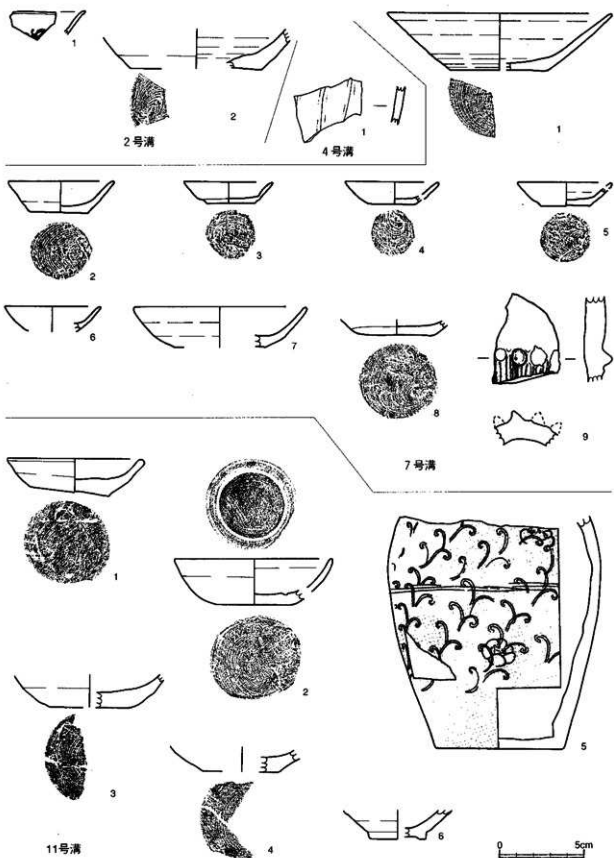
第68図 第15・16号溝跡実測図



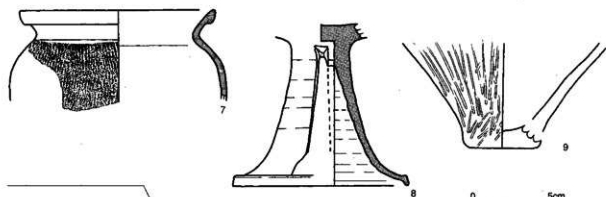
- 1 75YR4/3 ロームアック (5mm入) を5%含む。粘性、しまりは強い。
- 2 75YR3/2 ローム粒 (2~5mm入) を2%含む。粘性、しまりは強い。
- 3 10YR3/8 ロームブロック (1~5cm入) を2%含む。硬土状、炭化物を含む。(断面に塊状面) 粘性、しまりは強い。
- 4 10YR2/2 ローム粒 (1mm入) を1%含む。粘性、しまりが弱い。
- 5 10YR2/1 ロームブロック (1cm入) を1%含む。粘性、しまりは強い。
- 6 10YR2/3 ローム粒 (2mm入) を2%含む。粘性、しまりが弱い。
- 7 10YR2/2 ローム粒 (1~2mm入) を5%含む。粘性、しまりはやや強い。
- 8 10YR4/4 ローム粒ブロックを主体とする。粘性、しまりが強い。

- 1 10YR4/3 に近い黄褐色 粘性、しまりが弱い。砂質土。
- 2 10YR2.5/2 赤褐色 粘性、しまりがやや強い。
- 3 10YR4/3 に近い黄褐色 粘性、しまりがやや強い。
- 4 10YR4/3 褐色 ローム粒を40%含む。粘性、しまりが強い。
- 5 10YR4/4 褐色 ローム粒を40%含む。粘性、しまりが強い。

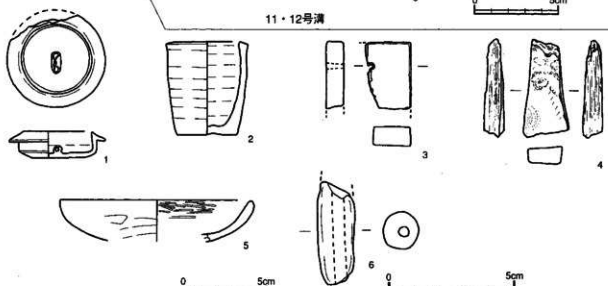
第69図 第1号土壇と第10・17号溝跡実測図



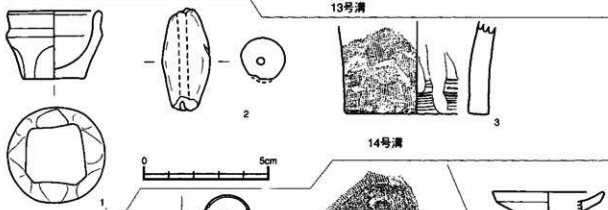
第70图 第2·4·7·11号满遗物实测图



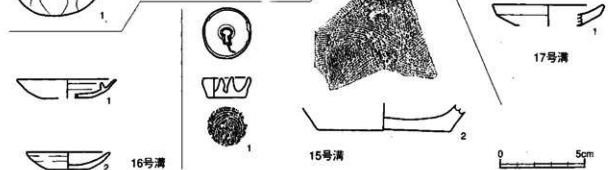
11·12号清



13号清



14号清



16号清

15号清

17号清

第71图 第11~17号清遺物実測図

第35表 第7号清出土遺物観察表

番号	種類	器種	重量cm 口径	は覆元値 底径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	土師質土器	坏	17.5	7.6	4.5	7.5YR6/6橙 長石、焼成良	ロクロ整形 回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ痕	1/4残
2	土師質土器	坏	8.4	4.6	2.6	7.5YR6/4にぶい 橙、焼成良	ロクロ整形回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ	完形 内外面黒色処理
3	土師質土器	坏	7.1	3.8	1.7	7.5YR6/4にぶい 橙、焼成良	ロクロ整形回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ痕	1/3欠 灯明皿
4	土師質土器	坏	7.3	3.4	1.8	7.5YR6/4にぶい 橙、焼成良	ロクロ整形 回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ痕	1/2欠
5	土師質土器	坏	7.3	3.9	1.9	10YR6/4にぶい 黄橙、焼成良	ロクロ整形 回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ痕	1/3欠
6	土師質土器	坏	7.7	-	2.0	10YR6/4にぶい 黄橙、焼成良	ロクロ整形	1/5残 口唇に煤付着
7	土師質土器	坏	13.5	7.2	3.2	7.5YR7/4にぶい 橙白色粒、焼成良	ロクロ整形	1/3残
8	土師質土器	坏	-	6.1	1.2	10YR6/3にぶい 黄橙、焼成良	ロクロ整形回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ痕	底部のみ
9	陶器	拍犬					鉄軸	肩部 瀬戸・美濃

第36表 第11・12号清出土遺物観察表

番号	種類	器種	重量cm 口径	は覆元値 底径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	土師質土器	坏	10.5	6.0	3.0	7.5YR6/1褐灰 骨針、焼成良	回転糸切り後指ナゲ 底部の見込みにナゲ	ほぼ完形 黒色処理
2	土師質土器	坏	12.5	6.4	3.6	7.5YR6/4にぶい 橙、長石、焼成良	回転糸切り後指ナゲ 底部の見込みにナゲ	体部3/4欠
3	土師質土器	坏	-	6.6	2.6	7.5YR6/6橙 長 石、白色粒、骨針 焼成良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナゲ	底部1/3残
4	土師質土器	坏	-	6.1	1.9	7.5YR6/6橙 白 色粒、焼成良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナゲ	底部1/2残
5	陶器	瓶	-	10.0	18.9	2.5Y8/2灰白 焼成良	鉄軸 印花文	瀬戸・美濃 1/4残
6	陶器	天目茶碗	-	4.3	2.3	10YR7/1灰白 長石 焼成良	内面と体部上半部に鉄軸	底部1/3残
7	須恵器	壺	15.4	-	7.2	5Y4/1灰 長石、 焼成良	折り返し口縁 胴上半部は敲叩き	胴上半1/4 残
8	須恵器	高坏	-	13.8	12.7	10YR7/4にぶい 黄橙、長石、焼成 良	脚部に3方透かし	脚部の1/3 残
9	弥生土器	壺	-	5.2	8.3	10YR3/1黒褐 長 石、焼成良	胴下半部は縦のへら磨き	一部残

第37表 第13号清出土遺物観察表

番号	種類	器種	重量cm 口径	は覆元値 底径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	陶器	蓋	7.7	4.1	2.2	2.5Y7/2灰黄 焼成良	ロクロ整形 灰軸	ほぼ完形 煤付着 軸
2	土器	焼壺蓋	5.2	4.8	7.3	5YR6/6橙 焼成良		1/2欠
3	温石		長さ 5.3	幅 3.6	厚み 1.6			
4	砥石		長さ 7.8	幅 3.5	厚み 1.6			

番号	種類	器種	法量cm.			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口徑	底徑	器高			
5	土師器	坏	15.3	-	3.3	5YR6/6橙長石、焼成良	内面磨き 内外面赤彩	1/5残
6	土	鉢	長さ4.2	幅1.5	厚み1.5			

第38表 第14号溝出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm.			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口徑	底徑	器高			
1	弥生土器		3.5	2.4	2.7	10YR6/2灰黄褐長石、白色粒 焼成良		完形
2	土	鉢	長さ4.1	幅1.9	厚み1.6			
3	埴	輪 円筒埴輪	-	-				

第39表 第15号溝出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm.			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口徑	底徑	器高			
1	土師質土器	乗燗	3.8	3.0	1.6	5YR6/6橙 焼成良	回転未切り未調整 中央に切込を入れた筒状の芯立て	完形
2	陶	器 摺り鉢	-	10.6	2.2	10R5/6赤 長石、砂粒 焼成良		底部1/4残

第40表 第16号溝出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm.			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口徑	底徑	器高			
1	陶	器 灯明受皿	7.8	3.3	1.4	2.5Y5/1黄灰 焼成良		3/4欠
2	陶	器 灯明皿	6.6	3.3	1.4	2.5Y6/1黄灰 焼成良	底部に重ね焼き痕あり	完形 軸

第41表 第17号溝出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm.			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口徑	底徑	器高			
1	土師器	小皿	8.7	5.0	2.7	5YR6/4にぶい橙長石 焼成良		1/5残

(3) 土壌等

土壌としては地下式墳1基、竪穴遺構1基も含めて合計21基を呈示した。そのうち4・17号土塚からは人骨が検出され、また20号土塚においても埋納された蔵骨器内から骨片が出土していることからいずれも墓塚と判断される。また8号土塚も獣の遺体を納めたものである。これら以外の土壌の性格は特定することができなかった。

第1号土墳（旧第15号土墳）（第69図）

北側調査区の崖に面したH-15-aとbグリッドにまたがる。17号竪穴住居を切って南北方向に延びる10号溝をさらに壊して掘り込まれる。

規模と形状は、直径1.9m深さ0.65mほどのやや不整な楕円形をとる。土層断面には人為的な投入等は認められず、自然埋没と考えられる。

遺物としては、覆土中から土師質土器坏1点（第78図1）が出土した。

第2号土墳（第72図）

北側調査区の西寄りH-12-cグリッドに位置する。台地縁辺の斜面に、主軸線を等高線にほぼ並行に築かれる。南北方向に長軸を持つ地下室部分と西側に張り出した竪坑よりなる地下式土墳である。地下室部分では覆土の中心から上部にかけて、土層断面図では7層としたハードロームの大きな固まりが認められ、天井を構成していた土層が分解する間もなく一塊りのままに落盤したものと考えられる。

規模と形状は、地下室では確認面での長軸方向3.4m短軸2.5m、底面では3.0m×2.2m、室内の高さは崩落のため明瞭ではないが、現状を残す最も高い位置からの深さ約2.2mであり、壁面は垂直に立ち上がる。天井部の形状はすでに崩落していたため不明である。この地下室に通じる竪坑部では確認面で1辺1.6m底面では1.2m正方形を呈し、現状での深さは1.1m、壁面は垂直に立ち上がる。竪坑に比べて地下室床面はさらに約0.7m低く、両床面は緩い階段状の段により結ばれている。竪坑と地下室を貫く主軸方位はN-112° 30'-Eを測る。

本遺構の立地は、現在では崖面に接しているものの、構築時本来の地形はもう少し台地が外側にせり出していたものと考えられる。

遺物は第78図1～16までの16点である。

第3号土墳（第72図）

2号土墳の東側H-13-cグリッドに主体を置く。台地縁辺の肩部にあたっており1mほど北側では崖となる。南側は2号溝により切り取られ全形はつかめない。

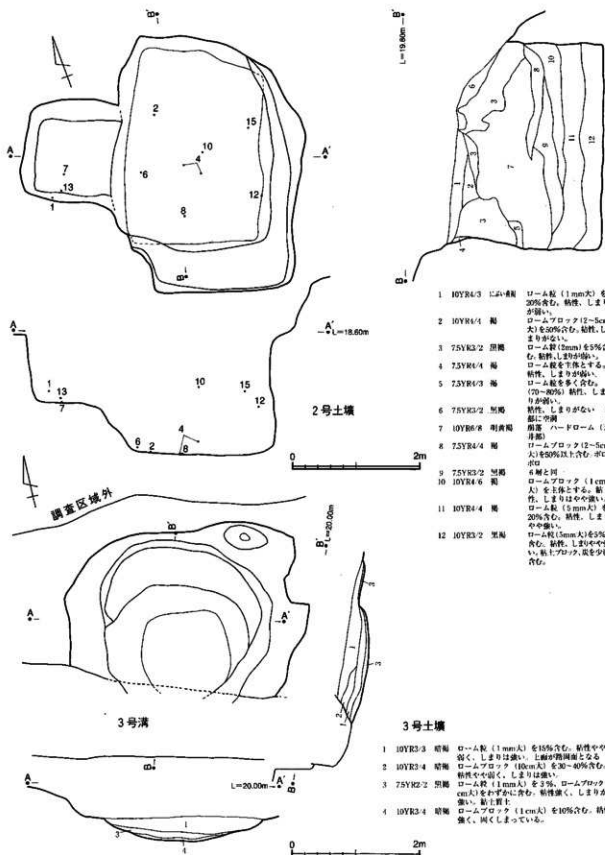
規模と形状は、最下面となる底面の他に、中段に舌状の張り出し部を持つ。遺構確認面での直径約2.2m底面での直径約1.3mの円形を呈する。中段の三日月状にのこる張り出し部分は、最大幅で0.5mを測る。深さは、確認面から中段までが0.3m底面までは約0.7mを測る。断面形状は緩い弧状を呈する。

遺物は検出できなかった。

第4号土墳（第73図）

北側調査区の中ほどH-14-cグリッドに位置し、崖面に開口して南側の台地中央に向けて延びる4号溝の覆土を掘り込んでいる。土墳の北東部から人骨の頭部が正位で出土し、他の部位は遺存状況が悪く、骨片を採取するにとどまった。墓墳である。

規模と形状は、長軸2.5m短軸2.1m深さ0.5mの不整形を呈する。



第72図 第2・3号土壌実測図

第5号土壌（旧第7号土壌）（第73図）

4号溝の東側に接して小溝が穿たれ、この溝のさらに東側に北から順に5～7号の3基の土壌が相次いで掘り込まれている。いずれも長方形を呈しH-14-aグリッドに主体を置く。

規模と形状は、5号土壌は底面の他に中段を持ち長軸長1.2m×0.8m深さ0.6mを測る。長軸方位はN-51° 00'-Eを示す。時期を特定する遺物の出土は無いが覆土にはやや砂粒が多く、後世の所産と考えた。

第6号土壌（旧第8号土壌）（第73図）

5号土壌の南に位置し、長軸長0.9m×0.8m深さ0.2mを測る。長軸方位はN-17° 00'-Eを示す。

第7号土壌（旧第9号土壌）（第73図）

6号土壌からさらに南に位置し、長軸長1.0m×0.7m深さ0.3mを測る。長軸方位はN-16° 10'-Eを示す。

第8号土壌（旧第10号土壌）（第73図）

7号土壌の南、H-14-cグリッドに位置する。平面的には南北2基の土壌からなる様にも見えるが底面での段差は数cmしかなく、両面そって場骨が検出されたため同一遺構とした。本土壌のある場所は、ローム面の直上に砂質の表土が堆積しており、また確認面からの遺構の掘り込みが浅いことから明瞭な遺構プランは把握出来なかった。

規模と形状は不明瞭である。

第9号土壌（旧第14号土壌）（第73図）

調査区の北東コーナー I-18-bグリッドに位置する。覆土がしまった黒色土を示し、本遺跡の中で唯一の縄文時代に遡る可能性のある土壌である。規模と形状は、長軸で1.4m短軸0.9m深さ1.0mの楕円形を呈する。出土遺物は無い。

第10号土壌（第73図）

北側調査くの東寄りH-17-dグリッドに位置し、コの字形に廻る7号溝の南東コーナーの内側にあたる。規模と形状は直径1m深さ0.5mの円形を呈する。出土遺物は無い。

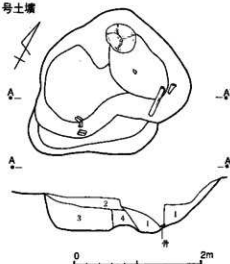
第11号土壌（旧第14号土壌）（第74図）

5号掘立柱建物跡の東側、I-19-dグリッドに位置する。規模と形状は、確認面で長軸長1.8m短軸1.2m深さ1.25mを測り、楕円形を呈する。出土遺物は無い。

第12号土壌（旧第14号土壌）（第74図）

11号土壌から9mほど南側のJ-19-cグリッドに位置する。

5号土壌



- 1 75YR3-3 粘質 ローム殻(1mm大)を2%含む。粘性やや弱く、しまりはやや弱い。
- 2 75YR3-1 基層 粘質やや弱く、固くしまっている。
- 3 10YR3-2 基層 ローム殻(2mm大)10%含む。粘質やや弱く、しまりはやや弱い。
- 4 ハードローム

5号土壌



- 1 10YR5-6 黄褐 粘質、しまりがなくボツボツ
- 2 10YR3-3 粘質 粘質、しまりがなくボツボツ。炭化
- 3 10YR4-1 黒い 粘質、しまりが弱い。
- 4 10YR4-4 黒い 粘質、しまりがやや弱い。ローム殻

6号土壌



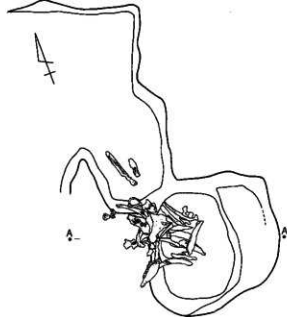
- 1 10YR3-3 粘質 粘質、しまりが弱く(ボツボツ)
- 2 10YR3-4 粘質 粘質、しまりがやや弱い。ローム殻(15mm大)を10%含む。
- 3 10YR4-6 黒い 粘質、しまりが弱い。ローム殻(15mm大)を10%含む。

7号土壌



- 1 10YR2-3 暗褐 ローム殻(2-3mm大)を9%含む。粘質、しまりがやや弱い。
- 2 10YR4-3 黒い黄褐 ローム殻(15mm大)を10%含む。粘質、しまりがやや弱い。
- 3 10YR5-6 黄褐 ローム殻(15mm大)を10%含む。粘質、しまりがやや弱い。
- 4 10YR3-3 暗褐 ローム殻(15mm大)を2-3%含む。粘質、しまりがやや弱い。

8号土壌



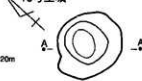
- 1 10YR3-4 暗褐 やや粘性有り。ローム殻0.5-2cm 10%。骨片0.1-1cm
- 2 10YR3-4 暗褐 あまり粘性なし。ローム殻0.2-1cm。ローム殻2-3cm 7%

9号土壌



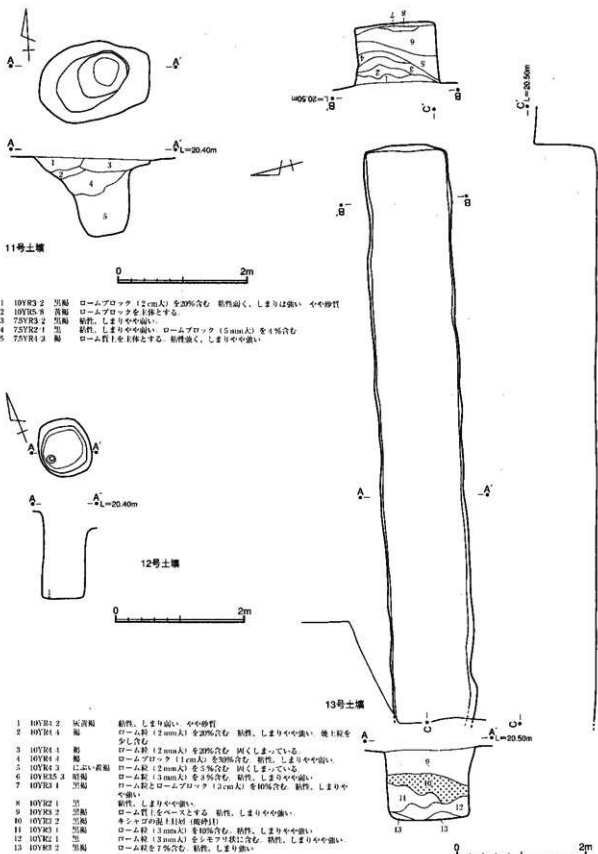
- 1 75YR2-1 黒 粘質やや弱く、しまりは強い。骨片数多く認められる。
- 2 75YR1-7 黒 粘質やや弱い、しまりは強い。骨片数多く認められる。
- 3 75YR1-7 黒 粘質、やや弱い、しまりはやや弱い。
- 4 75YR2-1 黒 粘質やや弱い、しまりはやや弱い。ローム殻(1mm大)を1-2%含む。
- 5 75YR1-7 黒 粘質、しまりがやや弱い。

10号土壌



- 1 75YR2-3 暗黄褐 ローム殻(13-10mm大)を20%含む。粘質、しまりがやや弱い。
- 2 75YR2-1 黒い ローム殻(13-10mm大)を20%含む。粘質、しまりは強い。
- 3 10YR2-1 黒い 粘質、しまりがやや弱い。

第73図 第4~10号土壌実測図



第74図 第11・12・13号土構実測図

規模は、直径0.8m深さ1.4mを測り、壁面は垂直に立ち上がり、平面形は円形を呈し、筒状の土壌である。遺物としては、底面直上から第79図上段1の土師質土器の壺（火入）1点が出土した。時期は、18世紀末から19世紀初頭と考えられる。

第13号土壌（旧第19号土壌）（第74図）

東側調査区のほぼ中央、L-18-bからI-19-aグリッドに主体を置く。館の擁壁により断ち切られて不明となる西辺を除く3辺では垂直な壁を持ち、底面も水平となる。覆土中位からはキシヤゴの純貝層が検出され、14号溝覆土上部の道路遺構に投棄されたキシヤゴ貝層との関連が留意される。規模は、残存する長軸長9.0m短軸長1.2m深さ0.9mを測り、長軸方位はN-78° 30'-Wを示す。平面形は東西に長い長方形を呈し、壁面は平坦な底面から垂直に立ち上がる。出土遺物は、北東脇の覆土上部周辺から第79図上段の土師質の坏1～3が出土したが混入の可能性がある。

第14号土壌（旧第21号土壌）（第75図）

L-20-cグリッドに位置し、12号溝によって上面を切られた土壌である。当初第79図中段の常滑大甕1の破片がまとめて出土したため本土壌の遺物と考えた。しかし整理最終段階で遺物分布状態を検討した結果、本土壌での出土レベルとほぼ同位置となる12号溝底面上にも広範囲に散乱していることが確認されたため、最終的に12号溝に伴う遺物と考えた。したがって本土壌は12号溝によって上部を削平されたものと判断した。規模は、長軸長2.3m短軸長1.3m溝の確認面からの深さは約1.0mを測り、長軸方位はN-88° 40'-Eを示す。平面形は楕円形を呈する。出土遺物は無い。

第15号土壌（第75図）

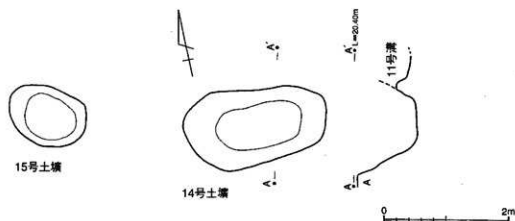
先の14号土壌から2mほど西に離れた12号溝内のL-20-dグリッドに位置する。14号土壌同様に覆土中位から先の常滑大甕の破片が出土することから12号溝によって遺構上部を切り取られたものと判断した。規模と形状は、長径1.1m深さ約1.0mのほぼ円形を呈する。出土遺物は無い。

第16号土壌（旧第19号土壌）（第76図）

北東コーナー付近のI-19-aグリッドに位置する。小竪穴と考えられるが東辺は、民有地側に延びており全容を把握することはできなかった。規模と形状は、全長の分かる南北長では2.0m、残存する東西長1.4m深さ0.35mの方形を呈する。

第17号土壌（旧第29号土壌）（第76図）

東側調査区擁壁沿いのM-18-cグリッドに位置する。13号溝と14号溝が交差する覆土上面から両溝にまたがるかのように掘り込まれていた。覆土中からは人骨片が出土し、墓塚と考えられる。北端は擁壁により壊され全形を知ることは出来ない。規模と形状は、残存する長軸長2m短軸1.0m、確認面からの深さ0.2mの長方形を呈する。長軸方位はN-7° 10'-Eを示す。出土遺物としては、覆土中から常滑の甕口縁片第79図中段1が出土した。



第75図 第14・15号土壌実測図

第18号土壌（旧第30号土壌）（第76図）

17号土壌から南西に1mほど離れた同一のグリッドに位置する。清覆土の掘り下げ途中で確認されたため遺構の一部を消失している。現状での規模と形状は、径約1m深さ0.5mの不正円形を呈し、軸方位は計測出来ない。

第19号土壌（旧第32号土壌）（第76図）

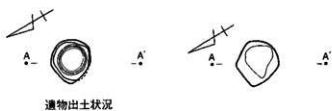
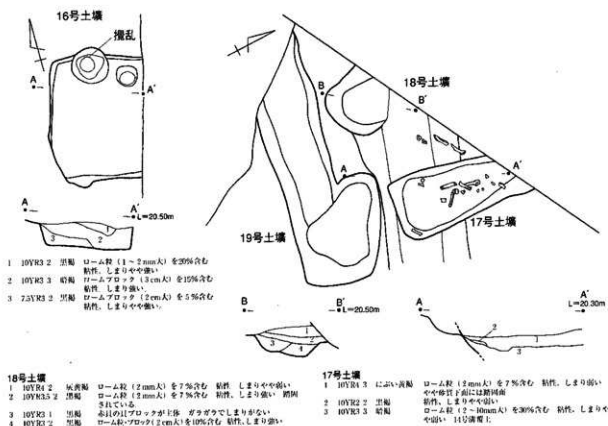
18号土壌に接して南側に位置する。平面形は不正な長方形を呈する。西端は本土壌より古いと考えられる15号溝の調査を先行したため本土壌の端部を検出することが出来なかった。残された範囲での長軸長4.2m短軸長1.0~1.4m深さ約0.5mを測る。長軸方位はN-82°30'-Wを測る。

第20号土壌（旧第1号ピット）（第76図）

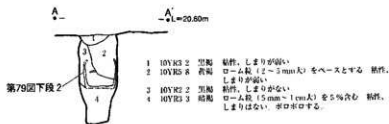
北側調査区のほぼ中央H-16-cグリッドに位置する。円形の筒型に掘り込まれた小土壌（ピットと呼称の方が適切か）の中に一回り小さな土師質の火消し壺第79図2が正位に埋められていた。壺の内部から1壺蓋と骨片が出土し、蔵骨器として利用されたことが判明した。またこの火消し壺の下の土壌覆土中から磁器の3湯飲み・4椀が出土した。規模と形状は、径0.35m深さ0.7mの円形を呈する。ちなみに壺底面までの深さは0.4mである。

第21号竪穴状遺構（旧1号竪穴遺構）（第77図）

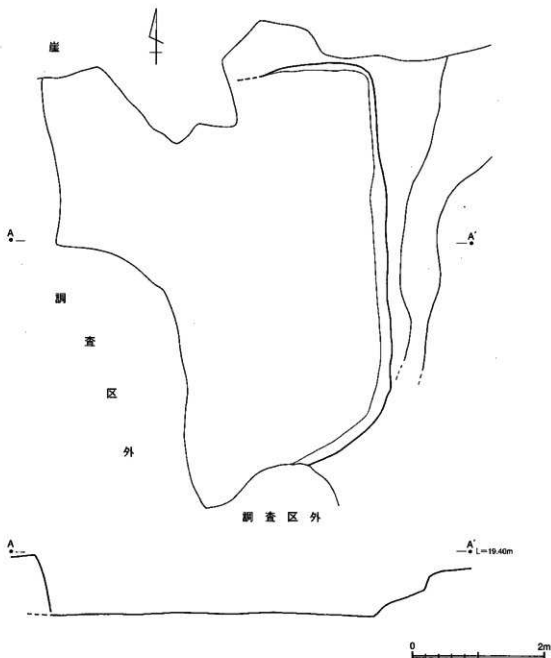
北側調査区の西端、I-10-b、I-11-aグリッドに主体を置く。北側には崖が迫り、西側および南側は調査対象外となる。遺構の東辺では台地を矩形に掘り込み平坦面を造り出している。底面は堅く締まり、西側では硬化面の下から主郭とII郭を区切る大堀（1号溝）の東側の落ち際が検出された。規模は南北で約6m深さ0.8mである。調査された範囲が狭く遺構の性格を把握することは出来なかった。出土遺物として近世遺物が出土している。



20号土壌



第76図 第16~20号土壌実測図



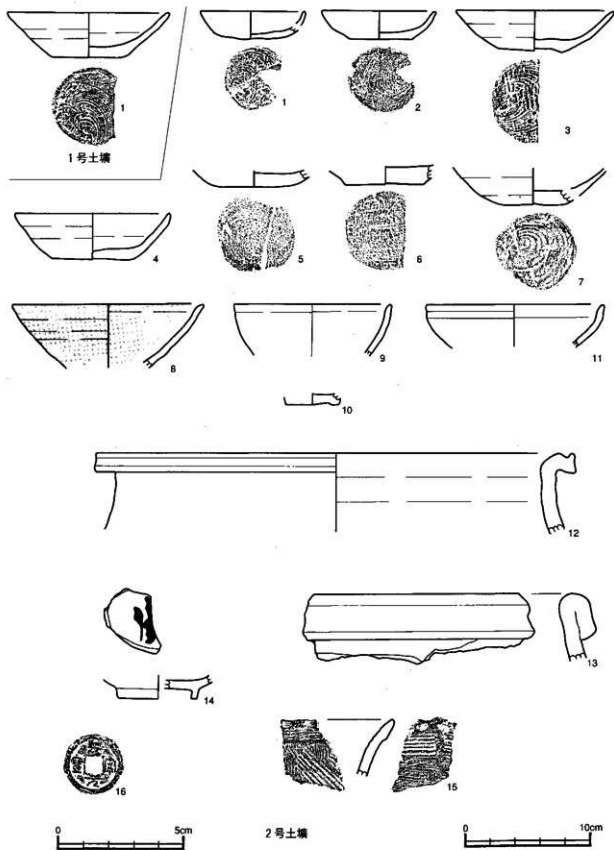
第77図 第21号土壌実測図

第42表 第1号土壌出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm, は復元値			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
1	土師質土器	坏	13.0	5.6	3.5	10YR4/6に よ い 黄褐色 焼成 成良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナデ痕	1/4欠

第43表 第2号土壌出土遺物観察表 地下式土壌

番号	種類	器種	法量cm, は復元値			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
1	土師質土器	皿	8.3	4.3	2.2	10YR6/4に よ い 黄橙 焼成 成良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナデ痕	1/3欠内外 面黒色
2	土師質土器	皿	9.0	4.9	2.2	7.5YR6/4に よ い 橙長石、 白色粒、 黒色粒、 焼成 成良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナデ痕	ほぼ完形



第78图 第1・2号土壙遺物実測図

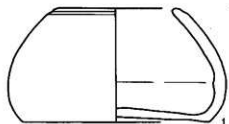
番号	種類	器種	法量cm 口径	法量cm 底径	法量cm 器高	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
3	土師質土器	坏	12.6	5.1	3.2	10YR7/4にぶい黄橙、焼成良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナゲ痕	1/2欠
4	土師質土器	坏	12.3	6.4	3.7	7.5YR6/4にぶい橙、焼成良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナゲ痕	2/3残
5	土師質土器	坏	-	5.2	1.3	5YR6/6橙白色粒、焼成やや良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナゲ痕	底部のみ
6	土師質土器	坏	-	6.2	1.9	2.5Y7/1灰白焼成良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナゲ痕	底部1/3残
7	土師質土器	坏	-	4.8	3.0	7.5YR6/6橙白色粒、焼成良	回転糸切り未調整 底部の見込みにナゲ痕	上半部欠
8	陶器	灰軸平碗	15.3	-	5.0	2.5Y7/4浅黄焼成良		体部1/3残 軸がけ
9	陶器	天目茶碗	12.6	-	4.1	10YR7/1灰白焼成良		瀬戸美濃
10	陶器	天目茶碗	-	4.2	0.8	7.5Y7/灰白焼成良	鉄軸	瀬戸美濃
11	陶器	天目茶碗	14.0	-	3.4	N8/1灰白焼成良		瀬戸美濃 内外面軸
12	陶器	大甕	37.9	-	6.3	10YR6/2灰黄褐白色粒、焼成良		常滑 下層一括
13	陶器	大甕						常滑
14	磁器	碗	-	5.3	1.4	7.5YR7/6橙白色粒、焼成良	回転糸切り	
15	弥生土器	甕				7.5R4/4にぶい赤長石焼成良	口唇部は交互に指原押捺 4本歯歯による横走羽状文 口縁内面に帯描線状文	
16	銅銭	聖宋元寶						天井下出土

第44表 第12号土壇出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm 口径	法量cm 底径	法量cm 器高	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	土師質土器	壺 火入	9.0	14.7	9.2	5YR6/6橙 焼成良	ロクロ整形	完形内外面 耀付着

第45表 第13号土壇出土遺物観察表

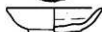
番号	種類	器種	法量cm 口径	法量cm 底径	法量cm 器高	焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	土師質土器	坏	13.0	6.2	3.1	10YR6/4にぶい黄褐 白色粒、焼成良	ロクロ整形 回転糸切り未調整	1/2欠
2	土師質土器	坏	7.5	3.9	2.3	10YR6/4にぶい黄褐 長石、焼成良	ロクロ整形 回転糸切り未調整 底部の見込みにナゲ痕	完形
3	土師質土器	坏	13.0	6.0	3.0	10YR6/4にぶい黄褐 焼成良	ロクロ整形 回転糸切り未調整 底部の見込みにナゲ痕	体部 1/4欠



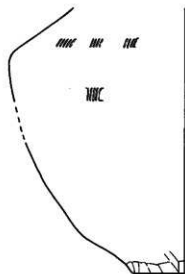
12号土壙



1



2



14号土壙



1



3

13号土壙

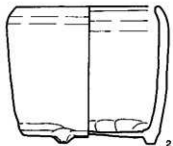


1

17号土壙



1



2



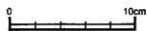
3



4



20号土壙



第79图 第12·13·14·17·20号土壙遺物実測図

第46表 第14号土壌出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm 口径	は度元径 底径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	陶	罎	16.2	42.0		白色粒、焼成良	ロクロ整形	12号溝出土 常滑

第47表 第17号土壌出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm 口径	は度元径 底径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	陶	罎			8.0	白色粒、焼成良	ロクロ整形	常滑

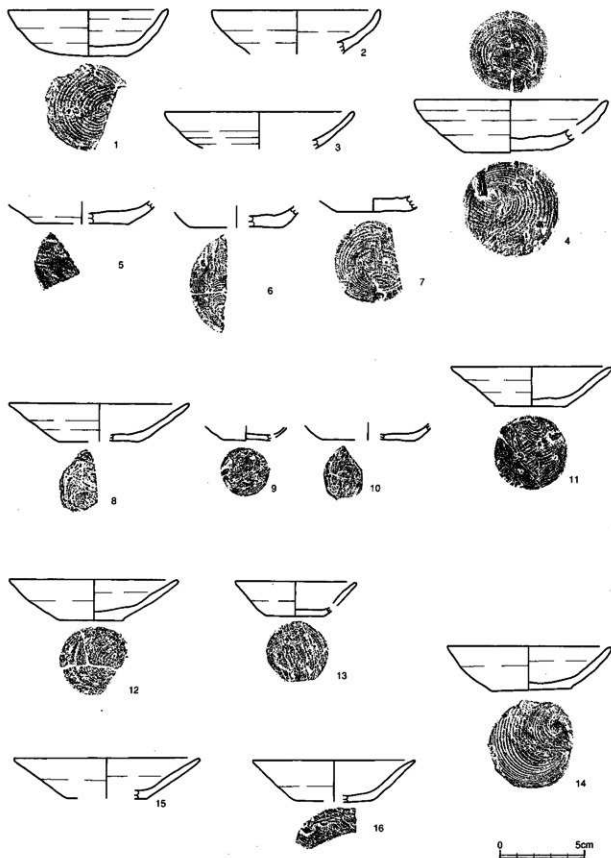
第48表 第20号土壌出土遺物観察表

番号	種類	器種	法量cm 口径	は度元径 底径	器高	焼成・色調・ 胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
1	土師質土器	火消し密 蓋	29.4	5.2	4.7	5YR5/6明赤褐 焼成良		1/4欠 藏骨器蓋
2	土師質土器	火消し密	23.0	21.8	21.8	5YR5/6明赤褐 白色粒、長石、		完形 藏骨器
3	磁	器	碗	8.3	3.2	4.2		4/5欠
4	磁	器	碗	11.0	9.4	4.35		3/4欠

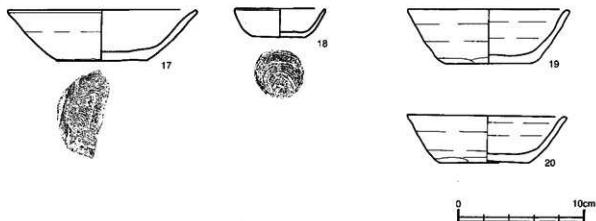
(4) その他の遺物

出土地点を有する遺物 調査段階で地点を図化し取り上げた遺物群である。明瞭な掘り込みをもつ
 竅穴や溝などと比べると遺構との関係が稀薄な遺物ではあるが、遺構の存在を窺わせるもの、時期決
 定の参考になり得るかと考えた遺物等である。第80図の1～7に示した土師質土器は第2号掘立柱建
 物跡の東側からまともに出土している。当初浅い窪みが存在するのではと考えたが結果的に遺構と
 しては把握出来なかった。ただいづれの遺物も中世の削平面直上からまともに出土しており何等か
 の遺構があった可能性が高く同時性を持ちうるものと考えている。同じく8・9の坏は13号土壌の北
 東隅から2～3mほどの間から散発的に出土している。13号土壌の一括遺物としたものにもこれらに
 類似する大きく直線的に開くタイプの土師質土器坏が出土している。13号土壌はその土壌形状から近
 世に下るのではないかと考えられることから、周辺にあった遺物が後世の段階で混入したと考えたい。
 11の土師質土器坏は、5号掘立柱建物跡の柱穴覆土上層(第60図参照)から出土しており時期決定の
 根拠になると考えている。15・16の土師質土器の坏は4号掘立柱建物跡周辺から出土し、特に15は西
 辺の北から2本目の柱穴脇(第59図参照)から出土している。

グリッド一括遺物 表土除去の段階等で一括して取り上げた遺物群である。第82図1は弥生時代と
 考えられる扁平片刃石斧、2～6は奈良・平安時代の所産であり、2は土師器皿に「厨」と墨書され
 る。以後第83図1までが中世遺物、それ以降は近世遺物である。



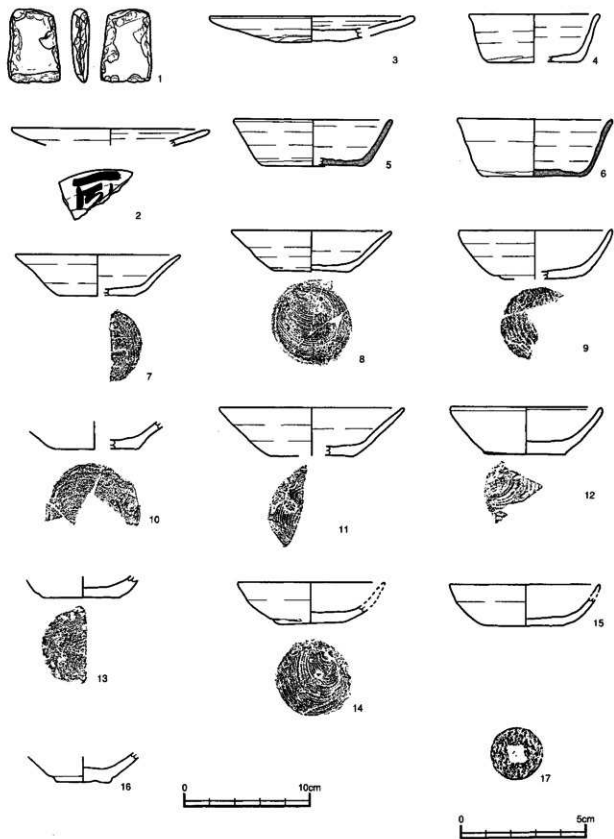
第80図 出土地点を有する遺物実測図 (1)



第81図 出土地点を有する遺物実測図(2)

第49表 出土地点を有する遺物観察表

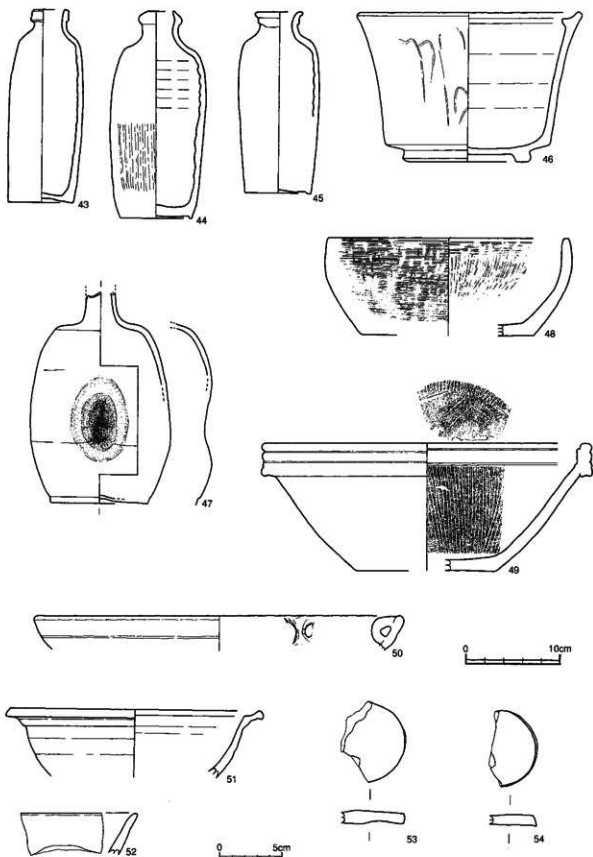
番号	種類	器種	法量 ^{cm}			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	底径	器高			
1	土師質土器	坏	12.6	6.4	3.6	7.5YR6/6橙	回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ痕	I-17-d 1/2次
2	土師質土器	坏	13.3	-	3.5	10YR7/4にぶい 黄橙		I-17-d 体部1/4残
3	土師質土器	坏	15.1	-	2.9	7.5YR6/4にぶい 橙		I-17-d 体部1/4残
4	土師質土器	坏	15.2	6.9	4.2	10YR7/4にぶい 黄橙 焼成良	回転糸切り未調整底部の見込みに指ナゲ痕	I-17-d 1/2次
5	土師質土器	坏	-	7.6	1.8	10YR6/4にぶい 橙	回転糸切り未調整底部の見込みに指ナゲ痕	I-17-d 底部1/4残
6	土師質土器	坏	-	7.4	1.7	7.5YR7/4にぶい 橙	回転糸切り未調整	I-17-d 底部1/2残
7	土師質土器	坏	-	5.8	1.0	7.5YR7/4にぶい 橙	回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ痕	I-17-d 底部のみ残
8	土師質土器	坏	14.4	6.9	3.0	10YR7/3にぶい 黄橙	底部の見込みに指ナゲ痕	K-18-d 1/2次
9	土師質土器	坏	-	3.7	1.2	10YR6/4にぶい 黄橙	回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ痕	K-18-d 底部のみ
10	土師質土器	坏	-	7.2	1.4	10YR7/4にぶい 黄橙		K-18-d 底部1/3残 1/2次
11	土師質土器	坏	12.7	5.9	3.2	10YR6/4にぶい 黄橙	底部の見込みに指ナゲ痕	5号竪立柱 建物跡 1/2次
12	土師質土器	坏	13.5	5.0	3.2		底部の見込みに指ナゲ痕	L-18-b
13	土師質土器	坏	9.8	4.6	2.8		底部の見込みに指ナゲ痕	L-18-b
14	土師質土器	坏	13.0	6.4	3.5	10YR6/4にぶい 黄橙	回転糸切り未調整 底部の見込みに指ナゲ痕	
15	土師質土器	坏	14.8	6.4	3.1	10YR7/4にぶい 黄橙		4号竪立柱 建物跡
16	土師質土器	坏	13.0	6.0	3.2	7.5YR6/4にぶい 橙 焼成良		4号竪立柱 建物跡付近 1/3残
17	土師質土器	坏	15.0	7.2	4.1			I-18-d
18	土師質土器	皿	7.0	4.0	2.2			I-18-d
19	土師器	坏	12.8	6.8	4.3	5Y5/4にぶい赤褐	回転ヘラ切り後底部及び体部下端手持ちヘラ削り	K-20-d 体部2/3残
20	土師器	坏	12.6	6.9	3.7	7.5YR6/4にぶい 橙 金雲母	回転糸切り後底部及び体部下端手持ちヘラ削り	K-20-c 体部1/2次



第82図 グリッド一括遺物実測図 (1)



第83図 グリッドー括遺物実測図(2)



第84図 グリッド一括遺物実測図(3)

番号	種類	器種	法量cm.			焼成・色調・胎土等の特徴	成形・調整技法他	備考
			口径	口径	器高			
27	陶器	灯明皿	7.4	3.3	1.4	7.5YR3/3暗褐	底部内面に重ね焼き痕跡	I-18-d 完形鉄軸
28	陶器	灯明皿	10.0	4.4	2.0	7.5YR3/3暗褐	底部内面に重ね焼き痕跡	I-18-d 1/2欠鉄軸
29	陶器	灯明受皿	6.8	2.8	1.6	7.5YR3/4暗褐	内面に切込が入った環状の仕切がつく	I-18-d 完形鉄軸
30	陶器	灯明受皿	7.3	3.0	2.0	10YR2/2黒褐	内面に切込が入った環状の仕切がつく	I-17-b 完形鉄軸
31	陶器	灯明受皿	7.8	3.4	1.8	7.5YR3/4暗褐	内面に切込が入った環状の仕切がつく	L-20-a 完形鉄軸
32	陶器	灯明受皿	7.0	3.3	1.4	10YR3/3黒褐	内面に切込が入った環状の仕切がつく	O-19-c 完形鉄軸
33	陶器	乗衝脚付	6.4	4.1	4.9	10YR2/2黒褐	中央に切込を入れた筒状の芯立てがつく	M-20-d 完形鉄軸
34	陶器	灯明受皿脚付	8.6	5.0	5.6		内面に切込が入った環状の仕切がつき底面に穿孔	O-19-c 灰軸
35	磁器	端反碗	9.4	4.8	4.9	5Y8/1灰白		O-19-c
36	磁器	碗	-	4.6	4.4	5Y8/1灰白		L-20-a
37	土師質土器	内耳焙烙	-	-	-			L-20-a
38	陶器	皿	11.7	-	2.4	5Y7/2灰白	内面のみ灰軸	O-19-c 体部1/4残
39	磁器	小瓶	1.8	4.2	11.2			L-20-a 瀬戸・美濃
40	陶器	急須	6.0	6.0	8.5			表採 青土瓶
41	古銭	寛永通宝	直径4.2					I-18-d
42	古銭	寛永通宝	直径4.6					K-20-d
43	陶器	高田徳利	4.0	6.8	20.2	5Y5/6オリーブ	灰軸	K-20-c
44	陶器	高田徳利	3.0	7.7	22.0	5Y5/6オリーブ	灰軸	H-20-b
45	陶器	高田徳利	4.6	7.0	19.2	5Y6/4オリーブ黄	灰軸	K-20-c
46	陶器	水壺	23.8	13.5	15.8	5Y6/2灰オリーブ		I-18-d 瀬戸・美濃
47	瓦質土器	鉢	26.0	18.2	10.0	N21黒	内外面緻密なへら磨き 吸炭	I-18-d
48	陶器	べこかん徳利	-	10.0	21.0	10YR3/4暗灰		H-14-d 鉄軸
49	陶器	ナリ鉢	35.0	14.8	13.0	5YR5/3にぶい赤褐 白色粒	9枚歯	L-20-a
50	土師質土器	内耳焙烙	39.0	-	3.8	7.5YR6/4にぶい橙	ロクロ整形 内耳外面煤付着	L-20-b 一部残
51	陶器		19.6	-	5.3		内外面灰軸	I-11-a 瀬戸・美濃
52	須恵質		-	-	3.6	10Y6/1灰	無軸 山茶碗系	H-15-b
53	土師質	焼塩蓋	6.4	-	厚み1.0	10R6/6赤橙		15号調付近 1/2欠
54	土師質	焼塩蓋	6.0	-	厚み0.8	7.5YR6/6橙	糸切り痕を持つ	L-21-a 1/2欠

第3章 まとめ

猪鼻城跡の擁する台地上には、本博物館も含め大規模な施設等が所在するものの建設時に発掘調査は行われていない。その後、博物館周辺での公園整備等に関連して小規模な調査が市教育委員会によって数回行われている。その成果は築瀬裕一氏によって既に概要がとりまとめられている(築瀬1998)。しかし今回のようなまとまった面積での本調査は初めてであり、「中世遺構が大半を占めるのでは。」との予想に反して弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世およびそれ以降の教時期に渡る遺構・遺物を検出することが出来た。

検出された主な遺構は時代別に弥生時代竪穴住居跡1軒、古墳時代末から平安時代の前半にかけての竪穴住居跡2軒、中世の掘立柱建物跡6棟、溝跡17条、地下式土壇1基を含む土壇群、それと近世の土壇2基等である。

弥生時代については付編に掲げた黒沢浩氏により、出土土器については、氏の一連の研究成果に基づいての詳細な検討が行われ、また大局の見地からの弥生集落としての猪鼻地区の評価が下されているため詳細についてはこれに譲りたい。

古墳時代から平安時代にかけては集落としての特筆すべき成果は得られなかった。しかし調査範囲が台地の一面に過ぎないことからすれば本来の集落規模はかなりの広範囲におよぶことが予想され、今回の結果だけで軽々に評価を下すことはできない。特に円筒埴輪片や「厨」の墨書などの出土は、本遺跡の別の一面を窺わせる資料になるかも知れない。

竪穴住居跡を時期別に分けると、33号住居が7世紀後半、28・32号住居は8世紀前半、14・17・18・20・22・24・27・31号の各住居は8世紀中葉から後半、12・15・16・19・21・30号住居は9世紀代、13・23・25・26・29号の各住居は遺物が乏しかったり、あるいは出土遺物が遺構時期を反映しているものかどうか躊躇する点があるため時期不明としておく。

中世遺構としては、地下式土壇を含む土壇群、溝(堀も含めて)としては本調査範囲で17条、これとは別に確認トレンチ内で5条他が検出されている(7号溝については、溝に囲繞された内部施設こそ問題とされるべきであろうが現時点で性格を判断することができないため単に溝として評価した。)。また遺跡北東部で確認された大規模な造成面とここに造られた礎石を持つ掘立柱建物跡群等がある。

礎石あるいは根石を持つ建物跡の事例は、県内では長生郡長南町の岩川館跡あるいは成田市駒井野西ノ下遺跡760号建物、草刈六之台遺跡D群礎石建物他数例しかなく、建物群の主体を占めるこの本遺跡の事例は、遺構としての特殊性ばかりでなく遺跡としての背景が興味を引かれるところである。

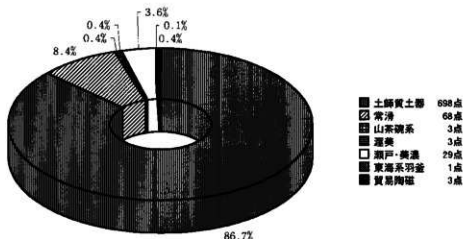
これら中世遺構の時期については、生活跡(竪穴住居)等のように遺物の示す時期と遺構の時期とが直接的に反映される遺構が極めて少ないことから、調査範囲に限っての遺跡の総体的な時間幅を押しさえておくことにする。

本遺跡出土の遺物(土師質土器、貿易陶磁、国産陶磁)について先に発表している築瀬(1998a, 1998b)によれば14世紀前半～15世紀前半の年代(築瀬によれば本郭内の土壇下から発見された古瀬戸四耳壺や常滑壺、土師質土器皿あるいは周辺遺跡の新田遺跡出土遺物の検討から13世紀代に遡るとする評価を下している。しかし今回はひとまず調査範囲内に限定しておきたい。)が与えられている。

県内の中世陶磁器・土器の編年を数次に渡って試みている笹生衛氏の最近の編年観（1998）に対比しても第Ⅱ期（13世紀中ごろ～14中ごろ）から第Ⅲ期（14世紀後半～15世紀中ごろ）に位置づけられる。したがって時間的幅は14世紀から15世紀中ごろまでと考えられる。

想像を逞しくすれば第Ⅲ期（14世紀後半～15世紀中頃）に対比できる土師質土器環が出土した5号掘立柱建物跡等は、文献上で猪鼻城が落城したとされる享徳4年（1455）とほぼ合致しており、猪鼻の地での千葉宗家最後の屋敷であった可能性もでてこよう。

次にこの地区の性格については、どのように考えられるであろうか。僚友でもある築瀬裕一の手を煩わせて今回出土した遺物の総て（図化に至らない小破片も含む）を類別した結果、土師質土器（かわらけ）698点、常滑68点、瀬美3点、瀬戸・美濃29点、東海系羽釜1点、山茶碗系3点、貿易陶磁3点の総数805点であることが判明した。これをグラフに示すと第85図のようになる。貿易陶磁や国内産陶磁器の出土数に比較して圧倒的に土師質土器の占める割合が多いことが分かる。

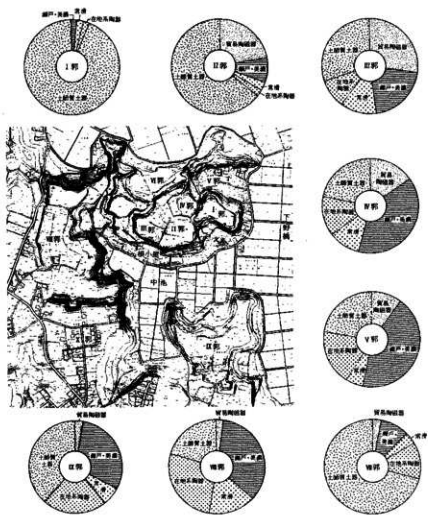


第85図 猪鼻城跡出土中世遺物 種類産地別割合

佐倉には、千葉宗家が猪鼻の地を去った後、宗家を滅ぼした馬加康胤の子輔胤が千葉介を継ぎ、この輔胤あるいは子の幸胤が城（本佐倉城）を構えたと考えられている。本佐倉城跡は数次に渡って発掘調査が行われその報告が既に公表されている。

本佐倉城における調査地点ごとの土器組成と、その地点の機能的役割との相関関係について言及した木内達彦氏（1995）の成果（第86図他）を参考にすれば、土師質土器の比率が圧倒する本佐倉城の「Ⅰ郭」ないしはこれよりやや土師質土器の比率が下がる「Ⅶ郭」に対比される。これらの曲輪についてⅠ郭は「主殿相当施設の存在」、またⅦ郭は「接待館施設の存在」が指摘されている。本遺跡の建物群についても同様な可能性を考えておきたい。

近世遺構としては、土師質の火消し壺を転用した蔵骨器を中に納めた20号土壇と底面から土師質火入が出土した12号土壇他があげられる。しかし地表面や表土除去段階でも近世遺物は多数採取されており、遺構としてとらえることは適わなかったものの当該時期の遺構が存在していた可能性が高



器体数(%)	I 郭	II 郭	III 郭	IV 郭	V 郭	VI 郭	VII 郭	IX 郭
灰土器(総数)	0(0)	138(21.9)	344(27.5)	16(15.2)	11(16.3)	16(3.0)	19(2.5)	6(2.4)
瓦器(唐戸瓦葺)	5(1.9)	54(8.6)	264(20.9)	41(39.1)	46(43.0)	53(9.7)	268(34.9)	65(30.1)
陶器(常滑)	6(2.3)	18(2.8)	154(12.1)	11(10.5)	6(5.6)	19(3.5)	122(15.9)	14(6.5)
在地系陶器	5(1.9)	14(2.2)	117(9.4)	14(13.3)	20(18.7)	67(12.4)	202(26.3)	48(22.2)
土師質土器	249(93.9)	407(64.5)	379(30.1)	23(21.9)	24(22.4)	386(71.3)	157(20.4)	83(38.4)

第86図 本佐倉城跡出土陶磁器組成グラフ



い。遺物から窺える時期としては、その多くものは、江戸遺跡出土土器の編年案を提示している堀内編年1996に照らし合わせれば概ねVIII期(1801~1860年代)に該当するものと考えられる。この時期は、本遺跡周辺では佐倉藩の海防施設やこれに関連する施設が設置されていたとされる時期であり、これらに関係した遺物であった可能性がある。

最後に、本調査報告に先行して出された築瀬裕一氏の報告について少し記述しておきたい。築瀬氏は一連の研究の中、特に掘立柱建物跡に対してかなり積極的な復元案を提示している。

遺構集中区の測量実測図(第58図)にも示したように、現地にはビットや石が多数検出され、見方によっては柱穴とも考えられる状況であった。したがってこれらをも取り込んで建物復元を試みた築瀬案を否定するつもりは毛頭ないが、調査者としてはこれをまた追認するだけの根拠をもたないことも事実である。そのため意見の齟齬についてはそのままとし、本文中の遺構図には調査時点あるいは整理時点で把握出来た範囲のみを提示することに努め、諸賢の判断を仰ぐことにした。ご寛容願いたい。

引用・参考文献

- 千葉市史編纂委員会 『千葉市史 史資料編1』 1976
- 藤澤良祐 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集 4』九州歴史資料館
- 藤澤良祐 1982「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁 VOL.8』東洋陶磁学会房総歴史考古学研究会 1987『歴史時代土器の研究』
- 木内達彦ほか 1990『長勝寺陶館発掘調査報告書』財団法人印旛郡市文化財センター
- 三浦和信ほか 1990『岩川・今泉遺跡』財団法人長生郡市文化財センター
- 藤澤良祐 1991「瀬戸古窯址群II—古瀬戸後期様式の編年—」『研究紀要 X』瀬戸市歴史民俗資料館
- 井汲隆夫 1991「江戸遺跡検出のやきもの分類」『四谷三丁目遺跡』新宿区四谷三丁目遺跡調査団
- 江戸陶磁器土器研究グループ編 1992『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題I』千葉市史編纂委員会編 1993『絵にみる図でよむ千葉市図誌』上巻
- 木内達彦ほか 1995『本佐倉城跡発掘調査報告書』財団法人印旛郡市文化財センター
- 江戸陶磁器土器研究グループ編 1996『シンポジウム 江戸出土陶磁器・土器の諸問題II』
- 小沢 洋 1995「房総の古墳後期土器」『東国土器研究』第4号 東国土器研究会
- 堀内秀樹 1996「東京大学本郷構内の遺跡出土陶磁器の編年的考察」『江戸出土陶磁器・土器の諸問題I』江戸陶磁器土器研究グループ
- 藤澤良祐 1997「付編 古瀬戸編年表」『研究紀要 第5輯』財団法人 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1998「中世陶器(古瀬戸)」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 中野晴久 1998「中世陶器(常滑・渥美)」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編
- 小林清隆 1998『袖ヶ浦市荒久(2)遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 笹生 衛 1998「1.中世の焼き物」『千葉県の歴史 資料編 中世I(考古資料)』財団法人千葉県史料研究

財団

- 葉瀬裕一 1998「千葉城跡（猪鼻城跡）」『千葉県の歴史 資料編 中世Ⅰ（考古資料）』財団法人千葉県史料研究財団
- 葉瀬裕一 1998「千葉城跡概説」『千葉いまむかし』NO.11 千葉市教育委員会（千葉市立郷土博物館史編纂担当）
- 木内達彦 1998「本佐倉長勝寺脇館跡」『千葉県の歴史 資料編 中世Ⅰ（考古資料）』財団法人千葉県史料研究財団
- 笹生 衛 1998「駒井野西ノ下遺跡・荒追遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世Ⅰ（考古資料）』財団法人千葉県史料研究財団
- 笹生 衛 1998「荒勾遺跡」『千葉県の歴史 資料編 中世Ⅰ（考古資料）』財団法人千葉県史料研究財団

猪鼻城跡出土の弥生中期土器群

黒 沢 浩

はじめに

本遺跡より出土した弥生中期の土器は、宮ノ台式を主体としながら、それに少量の異型式を含んでいる。本稿ではそれらを含めた本遺跡出土の中期土器全体を考察の対象とするが、その前に近年の動向について簡単にふれておきたい。

宮ノ台式については筆者（黒沢1987・1993・1997・1998）も含め、安藤広道氏（安藤1990・1991・1996）・小倉淳一氏（小倉1993・1996）らによって細部に異同はあるものの、その変遷に関してはほぼ共通の認識に到ったものと見て良いだろう。ただし、宮ノ台式の型式構造や成立過程、そしてそれに関与した土器型式に関しては未だ検討の途上である。

それに対し宮ノ台式の周辺を取り巻く土器群については新たな見解が加えられるようになった。そのひとつは大里東式の設定（小林・加藤1995）であり、もう一つは御新田式の提唱（石川1996・1998）である。

大里東式は三宅島大里東遺跡出土土器をもって設定された土器型式であり、楯描文の導入によって始まる宮ノ台式の直前に位置づけられ、ハケメが採用された段階と規定されていた。それについて筆者はいったん認めたものの（黒沢1997）、現在では時期差をもった土器群の集積であり、その中心は宮ノ台式の最古の一群であると考えようになっており、大里東式を批判した（黒沢1998）。

一方、御新田式は栃木県壬生町御新田遺跡出土土器をもって設定された土器型式で、前段階の池上式（須和田式）の特徴をよくとどめている。この型式の設定は宮ノ台式側からみれば、これまで「須和田式」に近似した土器を含む一群が古いものと考えられてきたのに対し、それが独自の変遷過程をもった型式であると認識されたことで、編年上の問題も含めてその関係が改めて問題とされることになった意義は大きい。

また、御新田式は系譜関係が不明瞭であった利根川左岸～霞ヶ浦南岸地域の土器群についても重要な役割を果たしているものであり、今後さらに追求されねばならない型式といえるだろう。

こうした動向の中で、本遺跡出土資料は宮ノ台式とその周辺の型式を検討する上で重要であると考える。以下、それについて考察したい。

1. 猪鼻城跡出土の中期土器

本遺跡出土の中期弥生土器には宮ノ台式・御新田式・東関東系土器などが見られる。

(1) 宮ノ台式土器

宮ノ台式は、各遺構の中で量的にも多く主体となっている。そのうちまとまって出土しているのは第3号住居跡・第5号住居跡・第8号住居跡であるので、それらを基準として考えてみよう。

第3号住居跡 6個体の土器が実測図として図示されている。その内訳は壺3個体、甕2個体、不明1個体であり、第10図5で文様構成の一端を知ることができる。それを見ると、口縁部外面に縄文

帯をもち、端部にも縄文を施文している。頸部にも縄文帯をもち、その上部を2本歯の櫛描文で区画している。

一方、第10図2・3は無文である可能性が高いが、ハケメを残し、磨きは部分的である。縄文帯を櫛描文で区画する手法は宮ノ台式では古い段階に見られる手法であるし、器高40cm程度の壺でハケメを残すのもやはり古い要素である。

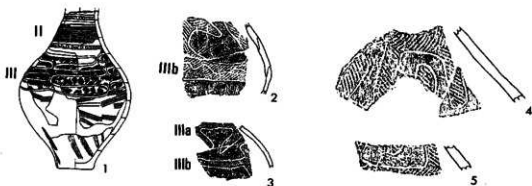
壺はどうであろうか。第10図1の壺は最大径を口縁部にもち、口縁端部には強い指頭押捺を加え、外面と口縁内面にはハケメを施している。4の壺は小型品だが、最大径が口縁部にあり、直線的に開いた器形をなしている。

次に破片を見ると第10図7・8・14・18、第11図19・20・22・23・24・25・26・27・28・29が宮ノ台式である。20は肩部の縄文帯の下端を沈線で区画し、その直下に列点を沿わせ、さらに6本以上の沈線で下向きの弧線を描いている。この文様帯下端の弧線は白岩式に櫛描の弧線があるほか、宮ノ台式でも白岩—宮ノ台型櫛描文(註1)盛行段階に属する一群に散見される。28は結紐文の末端、29は縄文帯の上を櫛描波状文で区画した例で、文様帯の位置から見て多段構成をとるであろう。18はハケメ調整後、4本歯の櫛で波状文を施文している。

また、壺では7が口縁部のやや下をわずかに肥厚させてその上に押捺を加えたもの、そして24は間隔の密な櫛描横位羽状文の壺である。

問題となるのは14・26・27で、14・26は8と同一個体の可能性がある。8は5と同様に2本歯の工具で上下を区画した縄文帯をもつ頸部破片である。14・26は磨消縄文手法によって上向きの舌状文と下向きの舌状文が舌状部分をずらしながら交互に配置された構図をなしている。また、27は無節Lの縄文に沈線を加えているが波状をなすのか、弧状になるのかはわからないが、その下に円文を加えている。

これらの文様は胴部のⅢ文様帯に用いられるものであるが、14・26のような構図はⅢ文様帯の上下分割とみなすことが可能である。このⅢ文様帯の系譜は宮ノ台式前段階に求められるが、その段階ではまだ上下に分割されることはなく幅広く胴部に文様帯がおかれている。それが宮ノ台式の時期になると、Ⅲ文様帯の横帯化が進行し、それに伴って上下の分割化が起こるのである。これを仮にⅢa・



第87図 Ⅲ文様帯の分割 (1:中壺 2・3:大壺東 4・5:猪鼻城)

III b 文様帯とすると後に結紐文として独立していくのはIII b 文様帯であることは明らかであり、本例は未だその分離が確立していない段階と位置づけることができよう(第87図)。

他地域の資料で見ると、本例と同様な構図は三宅島・大里東遺跡にあり、その型式学的な帰結としての結紐文は鎌倉市手広八反目遺跡第15号住居址によって達成されるのである。ただし、本遺跡の資料は、文様としてかなり整理されてきていることや、他に古く位置付けうる資料が見当たらないことから、大里東遺跡の段階よりは後出するものと思われる。

結論を言えば、第3号住居址出土資料は櫛描文盛行段階以後のものとそれ以前のものに分離可能であるということになる。

5号住居跡 量的に最も豊富な資料がある。全体で21個体の土器が実測図として図示されており、そのうち壺11個体、甕9個体、鉢1個体である。

壺のうち、全形の知りうる第13図2は小型品であるがハケメの上にヘラミガキを行っている。8の土器は頸部に刻目を施した凸帯をもち、その直下に櫛描波状文、その上下に刺突列点を入れている。第14図14・16は無文の例で研磨されている。18～21は口縁部であるが、いずれも口縁部に縦の貼り付けがある。器形としては口縁部が大きく外反し、頸部が細く縷れるものであろう。

文様のわかる12・13・17はいずれも磨消縄手法をとっており、12・17は結紐文、13は楕円文を描いている。12の結紐文はII文様帯に当たる横帯縄文の下に無文帯を挟んで描かれている。結紐文の結紐部分には沈線が加えられているが、横方向の部分には横帯縄文も含めて列点が配されている。17は羽状縄文に沈線を加えない例である。おそらく、II文様帯の横帯縄文があるであろう。よく研磨されている。13の楕円文は構図としては古いが、羽状縄文による磨消手法をとった例である。

甕は器形の知りうる3～7・15を見ると口縁部で屈曲する3、直線的に立ち上がる4、頸部にくびれを持つ5～7・15といったバラエティーがある。口縁部は5が刻目の他は指頭押捺、外面は1・3・15がナデで4～7はハケメ、内面の調整では5・6が口縁部内面にハケメを残しているが3・4・7は口縁部付近まで研磨されている。

鉢は内湾気味に立ち上がるいわゆる「逆砲弾形」の器形で、口縁部に櫛描波状文とその下端を画する直線文が施文されている。直線文上に2孔一対の穿孔がある。

次に破片をみると24・30・32・33・34・38・40・41・42・43・44が宮ノ台式で、33・40が甕、あとには壺である。24は口縁部に縦の貼り付けをもち貼り付け間に波状文を描いている。貼り付けが18～21の例に比べて長いのが特徴である。30・34は磨消手法によって曲線的な構図を描いている点で、第3号住居址の27などと同じ仲間であろう。32は第3号住居址29と同様に波状文で縄文帯を区画しており、38は3本歯の櫛歯で山形文を描いている。41は櫛描による擬似流水文の例。44では櫛歯状工具で擬縄文風に押し引きされている。28・33・40・43は櫛描横位羽状文を施文した甕で、40は間隔が密である。

以上の観察から、本資料も2時期程度に分離可能であることがわかる。その古い方は壺の文様が大里東遺跡例などと共通することから、櫛描文盛行段階以前に当てることのできる。それに対し、新しい方は壺における羽状縄文の発達と研磨、口縁部の大きく外反した器形から櫛描文盛行段階以降に位置づけることができよう。特に後者には古い構図である楕円文をふくんでいるが、羽状縄文手法の採用を重視すれば、それを古く位置づけることは困難であろう。

第8号住居跡 実測図として9個体の土器が図示されている。壺は5個体で、第21図3は頸部に刻目を持つ凸帯を施した例。口縁部はゆるく内湾している。第22図4は受口口縁の外面に縄文帯と4単位の穿孔ある貼り付けを施している。頸部には刻目のある凸帯をもち肩部には羽状縄文による横帯縄文が施文されている。肩部より下がないので断言できないが、おそらく縄文帯の幅は広いものと思われる。6～8は無文の一群で、いずれもよく研磨されている。

壺では第21図2は宮ノ台式に通有のものともみえ差し支えないだろう。ただし、1は刻目や指頭押捺といった宮ノ台式に一般的な装飾手法をとらず、縄文を施文し、口縁内面に段をもってその上に刻目を入れている点で珍しい例であるし、第22図9は宮ノ台式の壺にしては胴部が長く延びている点ではより少数派に属している。

以上の観察から、本資料も羽状縄文が発達した段階以降に位置づけられることがわかる。

これまでの検討から、本遺跡出土資料は決して1時期のものではなく、宮ノ台式の中で最低でも2期以上に渡る事が明確である。そこで、次に他の遺構出土資料も含めて、本遺跡出土資料の時間的位置づけを考えてみたい。

まず、その前提としての宮ノ台式の細分であるが、筆者はかつて房総地域において7時期に細分した。その概要としては次のようなものである。

第1期 宮ノ台式の成立段階。壺の文様では櫛描文の影響で前段階のⅢ文様帯の横帯化が進み、それに伴う磨消手法の全面的な採用、白岩式系櫛描文のⅡ文様帯への採用などによって特徴づけられる。房総地域では君津市常代遺跡、同市尾畑台遺跡第1地点、三芳村仮家塚遺跡、などで見られる程度であり、資料としては少ない。

第2期 典型的な宮ノ台式土器が完成した段階である。特に前段階で2段に分化したⅢ文様帯の中のⅢb文様帯が独立し、結紐文が完成した段階である。この段階において白岩一宮ノ台型の櫛描文の採用が本格化している。

第3期 第2期の白岩式系櫛描文が宮ノ台式のなかで独自にアレンジされた段階である。

第4期 第3期の櫛描文がさらに発達した段階。第3期として、その中での新旧としてとらえることも可能であろう。

第5期 白岩一宮ノ台型櫛描文が消失した段階。羽状縄文の採用がはじまる。

第6期 第5期の要素に加え、回転結節文の採用がある。

第7期 壺の文様において肩部への縄文帯の取巻が一般化する時期である。また、回転結節文が縄文帯の区画文に用いられている時期でもある。上総地域では久ヶ原式にいたる要素が出揃ってくるが、下総地域では壺の横位羽状文が残るなど宮ノ台式の装飾手法が遵守されている。

以上が房総地域の宮ノ台式土器変遷の概略である。これらに大まかな画期を見いだすとすれば、第1期と第2期の間、そして第4期と第5期の間にあり、ここではその大別によって第1期を古段階、第2期～第4期を中段階、第5期～第7期を新段階と3段階に区分しておきたい。

さて、この編年案に基づいて本遺跡出土資料を見てみよう。まず、先に検討したまとまりのある第3号・第5号・第8号の各住居址資料であるが、単純な様相を示す第8号住居については羽状縄文の発達と壺における研磨から新段階であることは明らかであろう。

次に2時期以上にわたるものと思われる第3号・第5号住居跡に関しては古い一群が古段階、新しい一群が新段階に位置づけられよう。これによって楕円文の構成が新段階まで残ることが明らかとなった。また、第5号住居跡の擬似流水文は中段階の可能性がある。

それではそのほかの遺構はどうだろうか。

まず、第1号住居跡出土資料は羽状縄文手法がないことから中段階以前に位置づけられる。さらにここに含まれている楕円文や多段化した横帯縄文は櫛描文による擬似流水文・多段の直線文が縄文に転写されたものと見なすことができ(黒沢1998)、第2期を遡るものではない。したがって、本住居跡出土資料は中段階に位置づけられるであろう。

第2号住居跡出土資料は結節文を採用した第8図4・13を除いては中段階とすることができる。第6号住居跡は実測図として図示された5個体および拓本資料中の羽状縄文のものは新段階であるが、第17図18～20は縄文が羽状化していないこと、複帯化している櫛描文からみて中段階に位置づけておきたい。このことは、1の土器を通してみると明確である。1は断続的な櫛描直線文を胴上半のII文様帯全体に施文している。こうした文様は中段階の丁字文から縦区画が抜け落ちたものと解釈され、この土器によって本住居跡出土資料が新段階でも古い段階(第5期)に相当するものであることがわかる。また、第18図25のような脚付の鉢は新段階以降に出現する器種である。

第9号住居跡の二段に施文される結紐文は中段階であろう。第10号住居跡出土資料は、位置付けに苦慮するが、消極的には櫛描文がないこと、積極的に研磨されていない壺が2個体あること、そして羽状縄文に沈線を加えていることから新段階でも古い段階、つまり第5期もしくは第6期として良いと思う。

以上の検討から、本遺跡出土の宮ノ台式は新段階を主体としながらも若干の古段階・中段階の資料を混じえたものである。おそらく、遺構としてはほぼ新段階の幅でおさまるものと考えられるが、そこに散見されるより古い土器群の存在は猪鼻城の集落が宮ノ台式全体を通じて営まれていた可能性を示唆するであろう。

(2) 御新田式・足洗式・栗林式

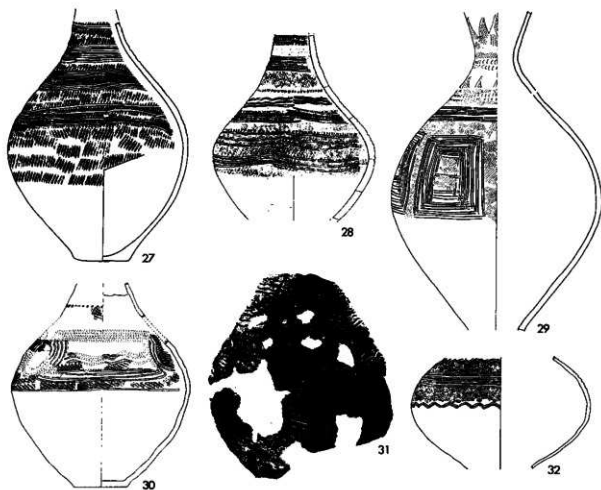
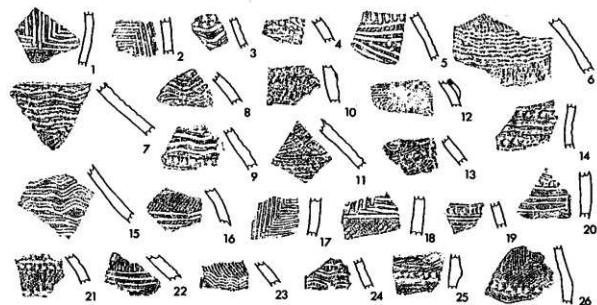
次に、宮ノ台式に伴って客体として存在する土器群についてふれたい。

冒頭で述べたように、本遺跡で見られる宮ノ台式以外の土器型式としては「御新田式」、そして足洗式をはじめとした東関東系のものがあり、また1点だが栗林式がある。

栗林式は第6号住居跡で壺の胴上半の破片が出土している(第17図12)。櫛描の懸垂文の周囲に2本歯の刺突を添えたもので赤彩されている。

次に御新田式であるが、第1号・第2号(第88図1～5)・第3号(6～14)・第5号(15～20)・第6号(21～24)・第9号の各住居跡で見られ、また、第27号住居跡にも混在している(25・26)。いずれもへら描きもしくは2本同時施文具で波状文・重四角文、あるいは幾何学的な構図を描いている。また沈線間に刺突を充填する手法も多用され、池上式の系譜をよく受け継いでいる。

これらと宮ノ台式との関係であるが、市原市菊間遺跡第11号住居址例や港区伊皿子貝塚方形周溝墓で第2期の土器群に伴い、また横浜市大塚遺跡環濠では第3期を主体とした土器群と共存しているから、ほぼ宮ノ台式中段階に相当するものとみてよい。また、千葉市千葉寺遺跡の御新田式は型式学的



第88図 猪鼻城跡出土の御新田式と関連資料

(1~26: 猪鼻城 27: 伊田子 28: 菊間 29: 大塚 30: 戸塚上台 31: 掛 32: 馬込)

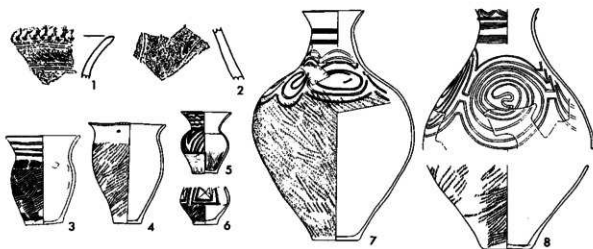
に菊間遺跡例に先行するものと考えられるから、古段階に相当する可能性があるだろう。しかも千葉寺遺跡は猪鼻城遺跡と一続きの台地上に位置する点は興味深い。

もっとも、御新田式の細分がなされていない現状では詳細な対応関係は今後の課題とせざるをえないが、藤田典夫氏らによって御新田式が池上式に後続し、上山段階・烏森段階へと移行する位置づけがなされていることから（岩上・藤田1997）、時期的には限定されるものと考えられる。したがって、御新田式は本遺跡においても古段階から中段階の宮ノ台式と共存するものと考えて良いだろう。このことは新段階の単純な様相を示す第8号住居跡や第10号住居跡で御新田式の出土を見ていないことが傍証となる。

次に東関東系の土器を検討しよう（第89図）。量的には御新田式に比べ少ないが、第1号・第3号・第5号・第6号・第27号の各住居跡から出土している。このうち第27号住居跡は古代の住居跡内への混入であるが（第89図2）、2本同時施工による弧線の一部が見られ、足洗式であることがわかる。また、第5号住居跡での口縁部に刻目を施し、外面に櫛描直線文を施した土器（第89図1）は香取郡小見川町館山遺跡出土の中期の一群と同じ特徴を有しており、同じ遺跡の出土土器（第89図3）や成田市関戸遺跡の資料から、これらも足洗式に属するものであることがわかる。第1号住居跡の8のような多条櫛を用いた施文は竜ヶ崎市屋代B遺跡出土土器と関連するかもしれない。このほか第1号住居跡（第6図8）は頸部に櫛描文をもつ広口壺で、後期に下がる可能性がある。

これらと宮ノ台式との関係はどうであろうか。

また、成田市関戸遺跡では足洗式の新しい段階のものを主体として宮ノ台式が若干伴うが（第89図4～8）、これも古い段階のものを含みながらも新段階を中心としている。一方、佐倉市大崎台遺跡では大崎台3期とした時期に足洗式の渦巻文を模倣した土器が知られている。大崎台3期は本稿の新段階（第5期）に相当するから、やはり宮ノ台式でも後半である。



第89図 猪鼻城跡出土の足洗式と関連資料（1・2：猪鼻城 3：館山 4～8：関戸）

ただし、足洗式と屋代の一群との関係は微妙であるが、相対的には足洗式よりも屋代遺跡の中期土器を新しいものと考えている。したがって、宮ノ台式とこれらとの関係を言えば、宮ノ台式の新段階の中で第5期～第6期に足洗式が、第6期～第7期に屋代的な一群が相当するものとらえておきたい。

このように考えると、猪鼻城跡の中期弥生集落は宮ノ台式を主体としながら、その前半の時期（古段階・中段階）には北関東東部、その後半（新段階）には東関東の利根川流域と交渉を持ったと言える。そしてその背景には宮ノ台式新段階に足洗式の集団が利根川を越えて集落を形成し、逆に宮ノ台式の集団もまた利根川を越えて環濠集落を形成したという非常に活発な動きを見ることができるのである。

まとめ

本遺跡出土の弥生中期土器は宮ノ台式を主体として、そこに北関東東部の御新田式、利根川流域あるいは東関東系統のもの、そしてわずかに1点だが信州の栗林式を見いだすことができた。これらの資料をとおして言えることは、まず第1に本遺跡の継続期間がほぼ宮ノ台式の全時期にわたるであろうことである。今回の調査区では弥生時代の住居址はわずかに12軒が検出されたにすぎないが、すでに建物が建って調査不能の部分も含めて、未発掘地区に宮ノ台式でもより古い時期に属する遺構群が点在していたことは十分予想されることであろう。

それらに伴う異型式の土器群は、古い時期に御新田式が、新しい時期に東関東系統の土器が伴ってくるようである。

おそらく、本遺跡は下総では最も古い宮ノ台式の遺跡のひとつであろう。この場所にこうした遺跡が形成されたのは、立地条件として最も海岸線に近い場所であること、旧利根川の河口に近いこと、そして上総の園分寺台に展開した遺跡群にもここを仲介としてアクセス可能であることなど、それが必然であったことは言うまでもないだろう。さらに、猪鼻城跡を出発点としてより内陸（例えば印旛沼周辺など）の集団との接触も可能なのである。

本遺跡はこうした交通の要衝に位置している。それがこの地に他の地域から人が訪れてきた由縁であろう。

（註1）かつて筆者は「有東一宮ノ台型櫛描文」という名称で呼んだが（黒沢1997）、東遼江の白岩式までその範囲を広げて「白岩一宮ノ台型櫛描文」と変更したい。また、第3期・第4期に発達した宮ノ台式に独特な櫛描文を「宮ノ台型櫛描文」と呼ぶこともある。

参考文献

安藤広道1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）（下）」

『古代文化』第42巻第6号・第7号

安藤広道1991「相模湾沿岸地域における宮ノ台式土器の細分」『唐古』田原本町唐古整理室OB会

安藤広道1996「第III部編年編 各地域の編年 関東地方（中期後半・後期）」

【YAY！弥生土器を語る会20回達成記念論文集】

弥生土器を語る会

石川日出志1998「弥生時代中期関東の4地域の併存」『駿台史学』第102号

岩上照朗・藤田典夫1997「栃木県における弥生時代中期後半の土器群—「上山系列」の提唱」

【研究紀要】財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

小倉淳一1993「千葉県佐倉市大崎台遺跡の宮ノ台式土器について」『法政考古学第20集記念論文集』

小倉淳一1996「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』第27号

黒沢 浩1987「神奈川県伊勢山出土の弥生式土器」『明治大学考古学博物館報』No.3

黒沢 浩1993「宮ノ台式土器の成立—東海地方の櫛描文土器群の動向から」『駿台史学』第89号

黒沢 浩1997「房総宮ノ台式土器考—房総における宮ノ台式土器の枠組み」『史館』第29号

黒沢 浩1998「続・房総宮ノ台式土器考—房総最古の宮ノ台式土器」『史館』第30号

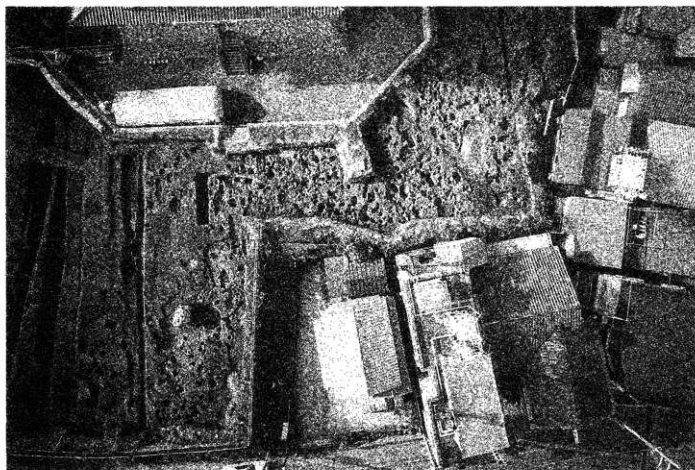
小林青樹・加藤里美1995「第2節 出土遺物 第1項 土器」『大里東遺跡発掘調査報告書』

大里東遺跡発掘調査団

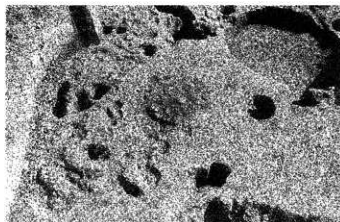
写 真 图 版



1. 調査区全景(北から撮影)



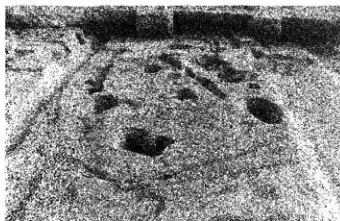
2. 調査区全景(東から撮影)



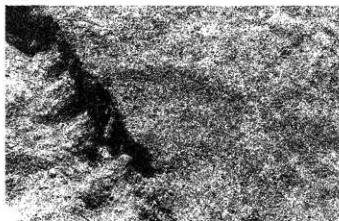
1. 第1号竖穴住居跡



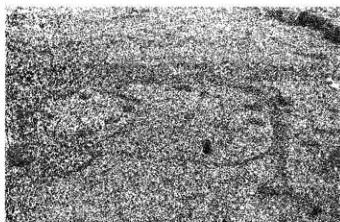
2. 第2号竖穴住居跡



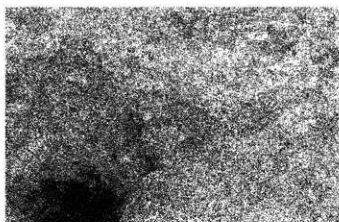
3. 第3・4号竖穴住居跡



4. 3号住居炉跡



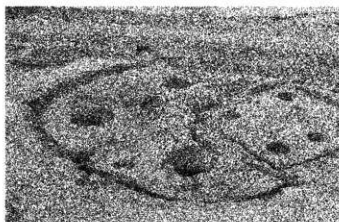
5. 第5号竖穴住居跡遺物出土状況



6. 5号住居炉跡



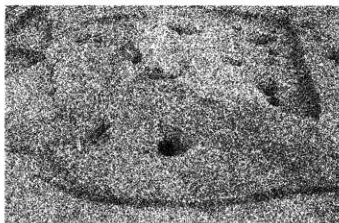
7. 5号住居遺物出土状況



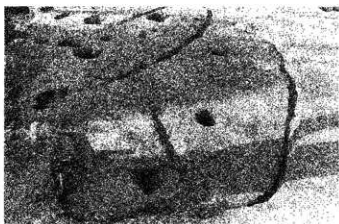
8. 第6号竖穴住居跡



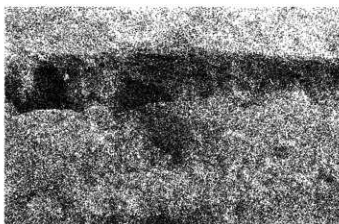
1. 6号住居炉跡



2. 第7号竪穴住居跡



3. 第8号竪穴住居跡



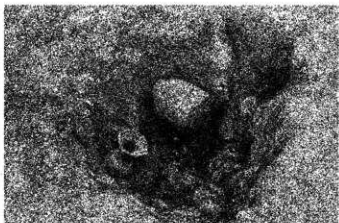
4. 8号住居炉跡(土器片を壁体とする炉)



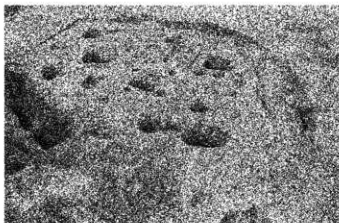
5. 8号住居遺物出土状況



6. 8号住居遺物出土状況(不明ピット内)



7. 8号住居遺物出土状況



8. 第9号竪穴住居跡



1. 第10号竖穴住居跡



2. 第11号竖穴住居跡



3. 11号住居炉跡



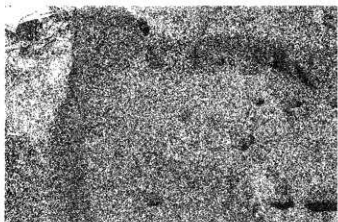
4. 第12号竖穴住居跡



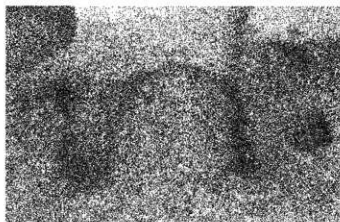
5. 第13・14号竖穴住居跡



6. 第14号竖穴住居跡



7. 第15号竖穴住居跡



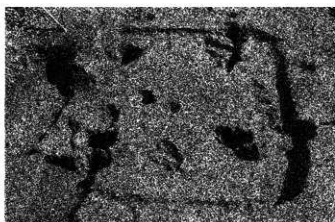
8. 15号住居カマド跡



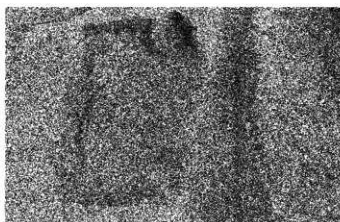
1. 第17号竪穴住居跡



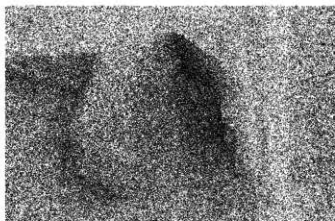
2. 第18・23号竪穴住居跡



3. 第19号竪穴住居跡



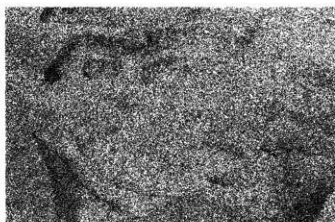
4. 第21号竪穴住居跡



5. 21号住居カマド跡



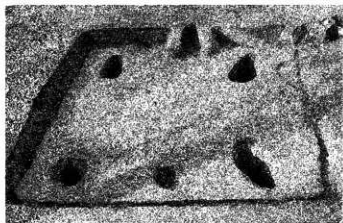
6. 第22号竪穴住居跡



7. 第24号竪穴住居跡



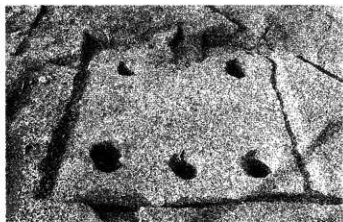
8. 第25号竪穴住居跡



1. 第27号竪穴住居跡



2. 第28号竪穴住居跡



3. 第29号竪穴住居跡



4. 29号住居カマド跡



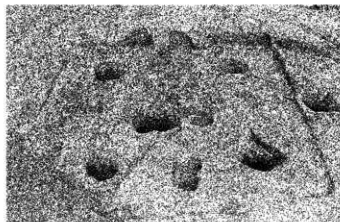
5. 第30号竪穴住居跡



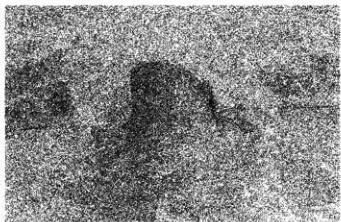
6. 30号住居カマド跡



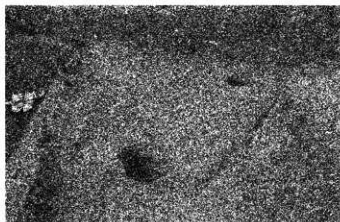
7. 第31号竪穴住居跡



8. 第32号竪穴住居跡



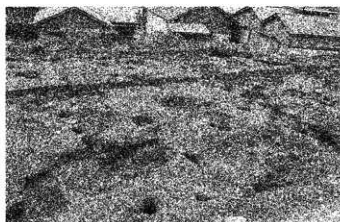
1. 32号住居カマド跡



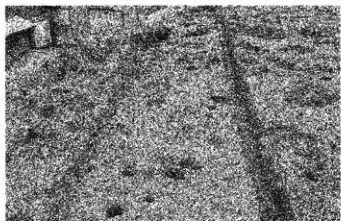
2. 第33号竪穴住居跡



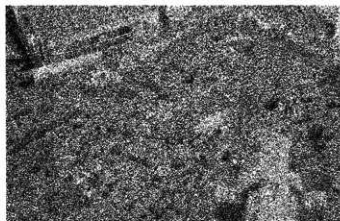
3. 第1号ビット列跡



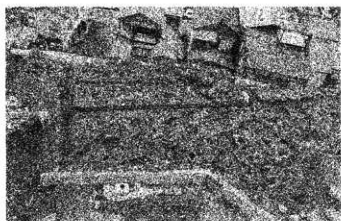
4. 第2号掘立柱建物跡



5. 第3号掘立柱建物跡



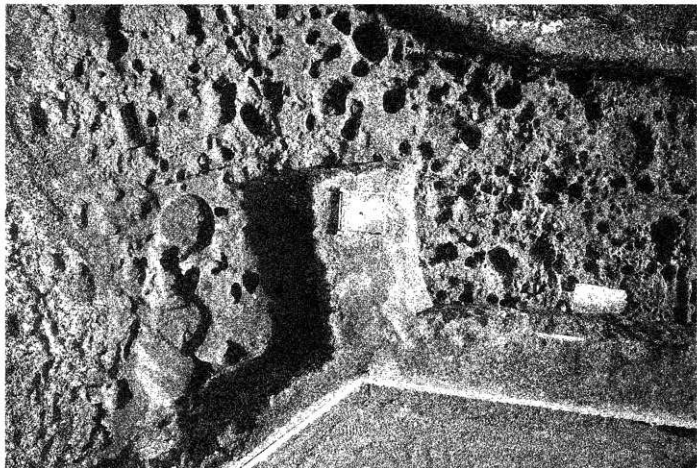
6. 第3・4号掘立柱建物跡



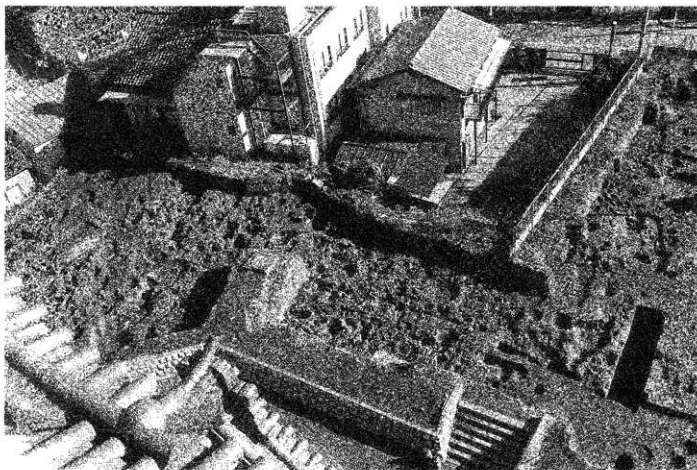
7. 第2・3号掘立柱建物跡



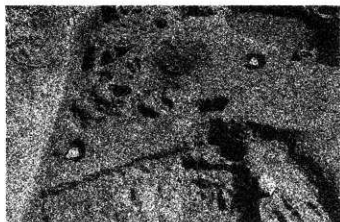
8. 5号掘立柱建物跡周辺



1. 第5号掘立柱建物跡(西から撮影)



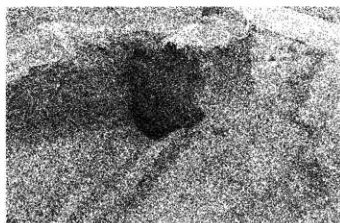
2. 北東コーナービット集中ヶ所(西から撮影)



1. 第7号掘立柱建物跡



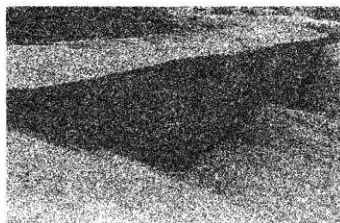
2. 第3号溝跡開口部分



3. 第3号溝跡



4. 第5・6号溝跡



5. 5・6号溝土層断面



6. 7号溝南東コーナー部



7. 第7号溝



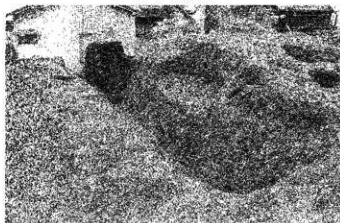
1. 第7・9号满迹周边



2. 7号满断面



3. 第9号满迹



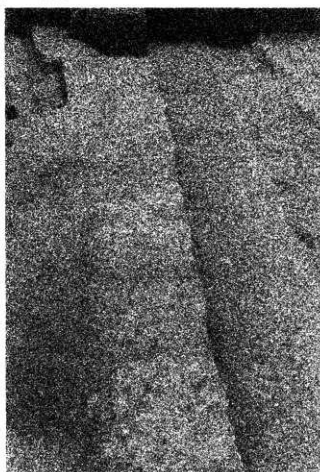
4. 第10号满迹



1. 第11・12号溝跡(真上から撮影)



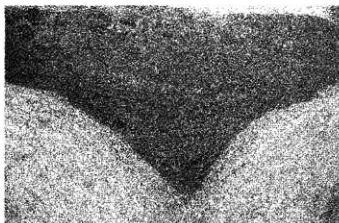
2. 第13・14号溝跡(西上方から撮影)



3. 13号溝覆土上面



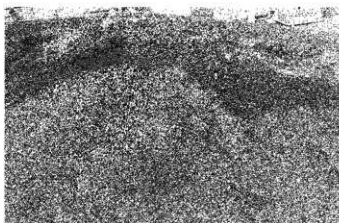
1. 第13・14号溝跡(西から撮影)



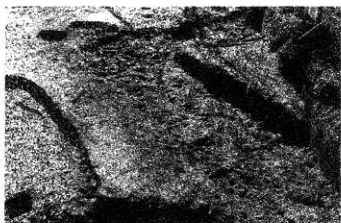
2. 14号溝東壁土層断面



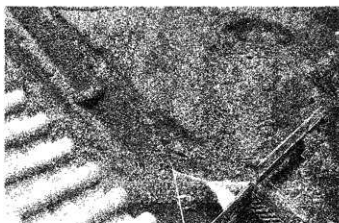
3. 14号溝上部の道遺構



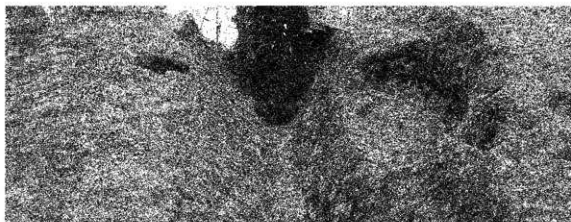
4. 14・15号溝の西壁



5. 第15号溝跡



6. 第14・15号溝跡



7. 第1号土塊



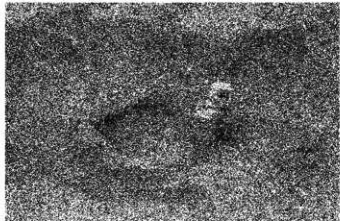
1. 第2号土壤遗物出土状况



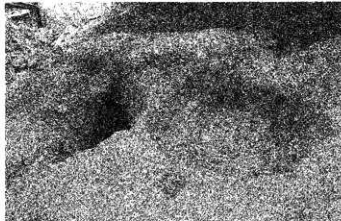
2. 第2号土壤



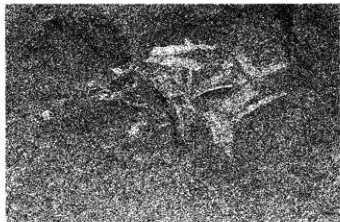
3. 第3号土壤



4. 第4号土壤人骨出土状况



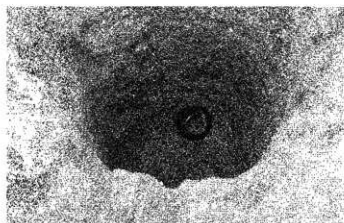
5. 第5·6号土壤



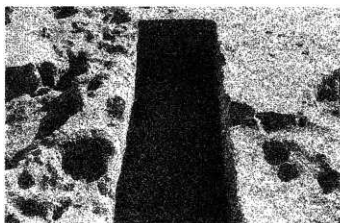
6. 第8号土壤鹿骨出土状况



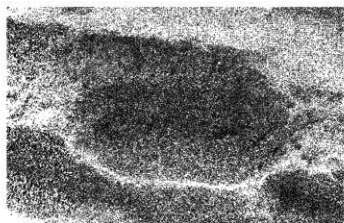
7. 第12号土壤



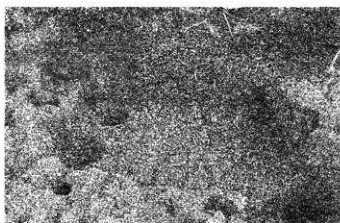
1. 第12号土壤遺物出土状況



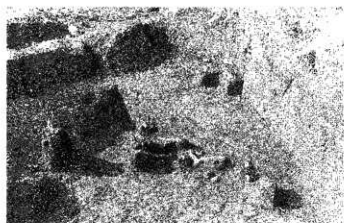
2. 第13号土壤



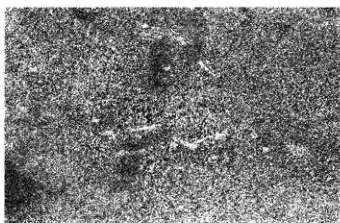
3. 第14号土壤



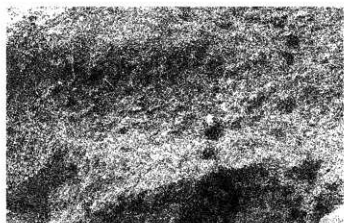
4. 第16号土壤(小竪穴)



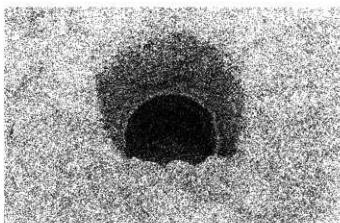
5. 第17号土壤人骨出土状況(北から撮影)



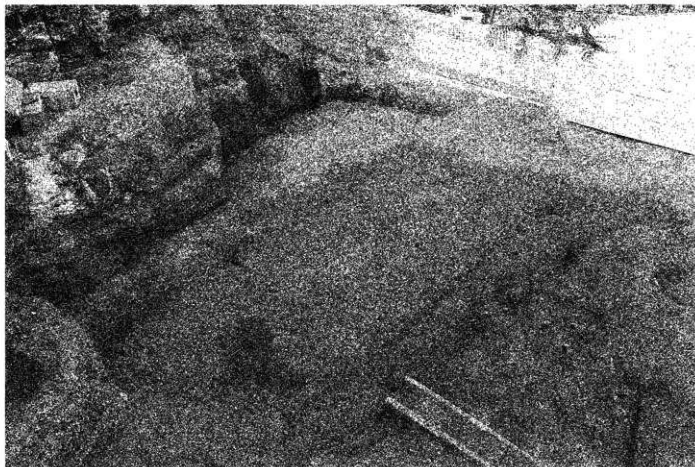
6. 17号土壤出土状況(東から撮影)



7. 第19号土壤



8. 第20号土壤遺物出土状況



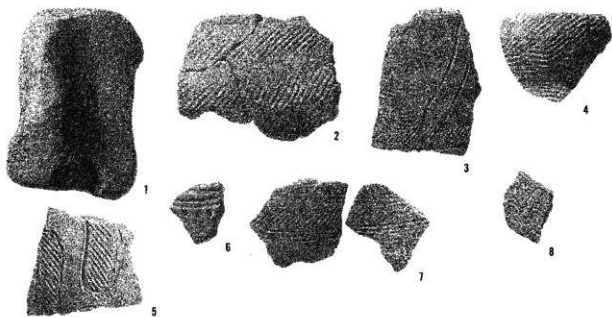
1. 第21号整穴跡



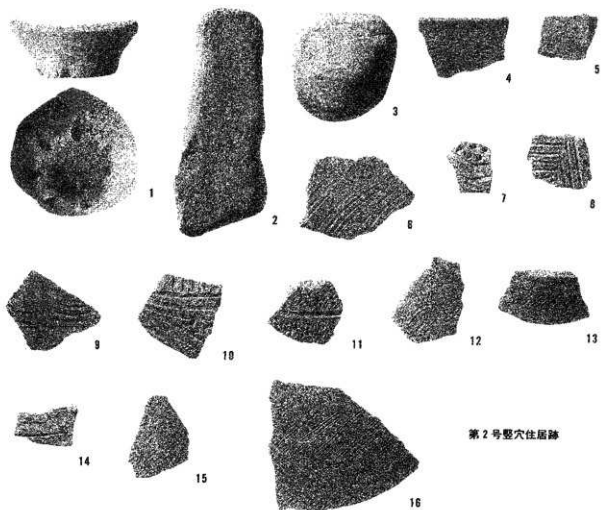
2. 第IIトレンチA溝跡検出状況



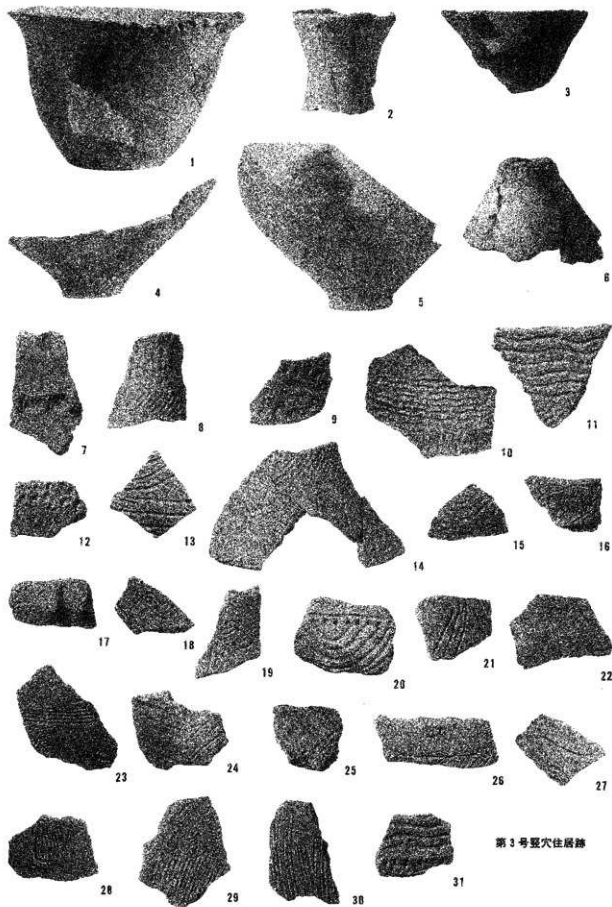
3. 第IIIトレンチB～E溝跡検出状況



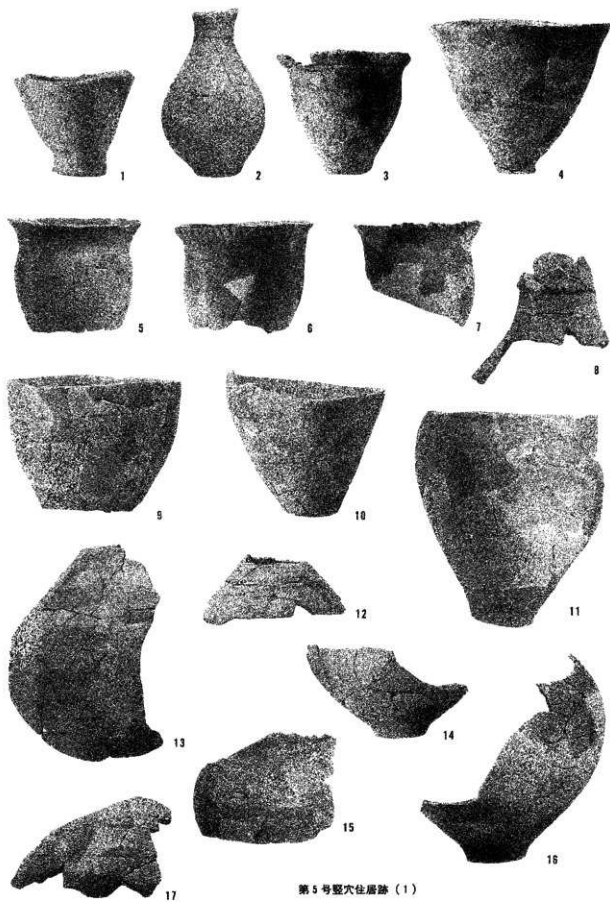
第 1 号窑穴住居跡



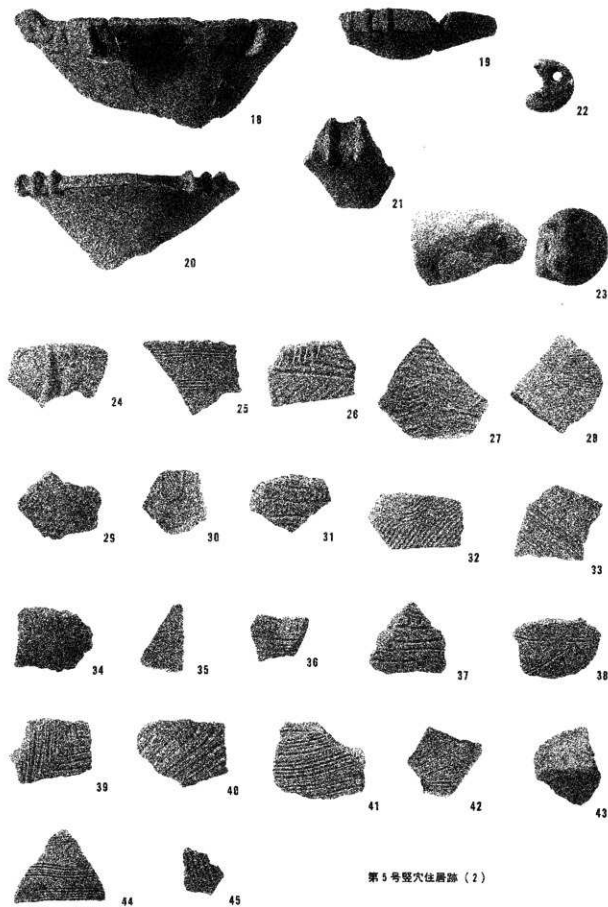
第 2 号窑穴住居跡



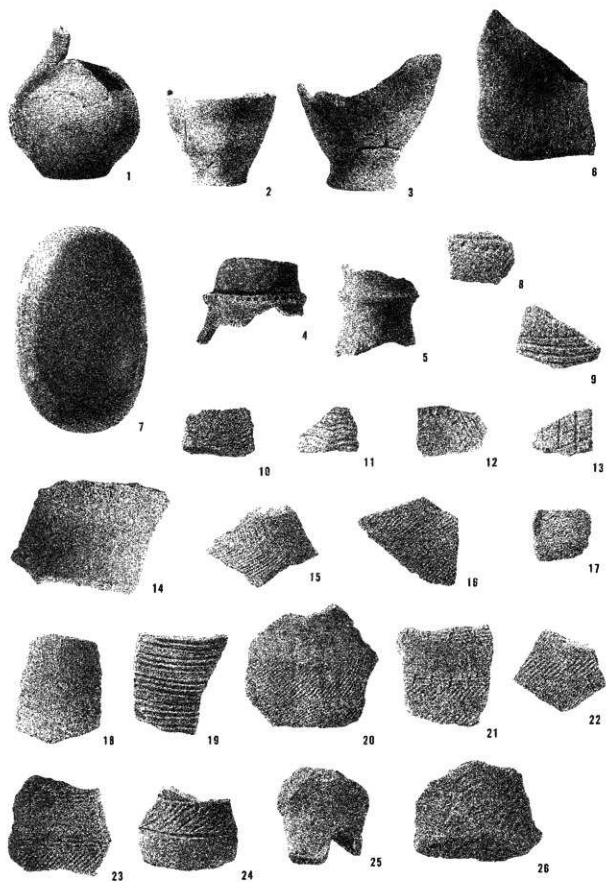
第3号竖穴住居跡



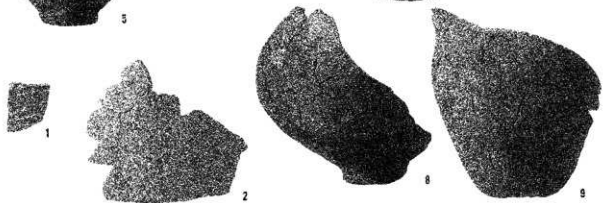
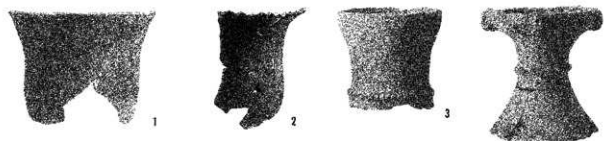
第5号竖穴住居跡(1)



第5号双穴住居跡(2)

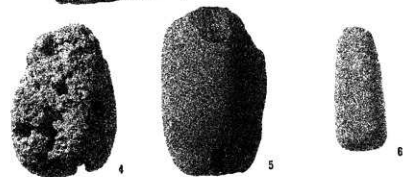
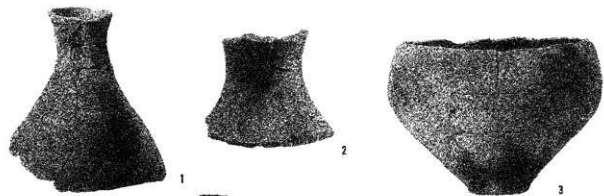


第 8 号墓穴住居跡

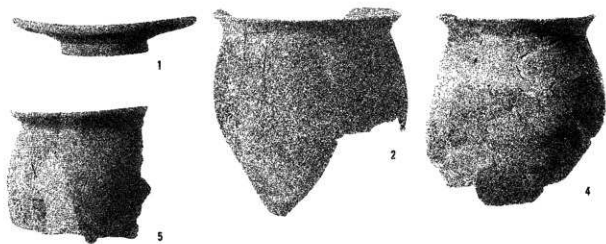


第9号整穴住居跡

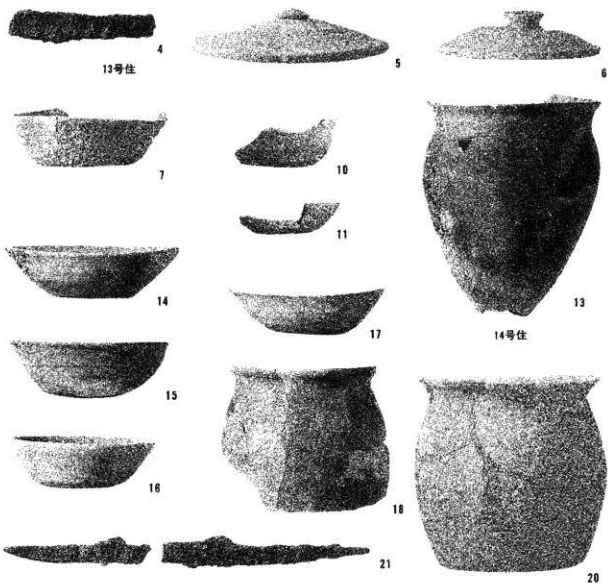
第8号整穴住居跡



第10号整穴住居跡

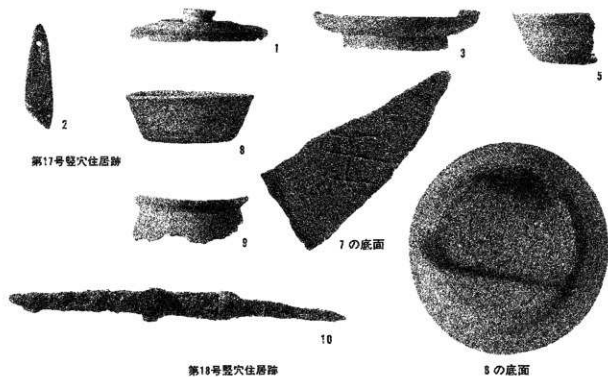


第12号整穴住居跡

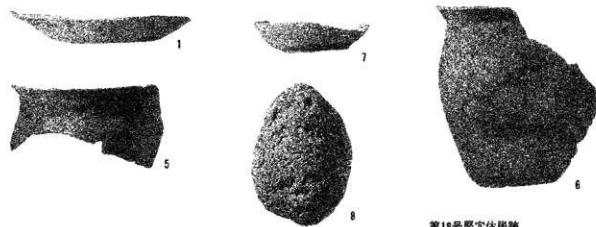


(第13~15号整穴住居跡)

15号住



第18号竪穴住居跡



第19号竪穴住居跡



第20号竪穴住居跡



第21号竪穴住居跡





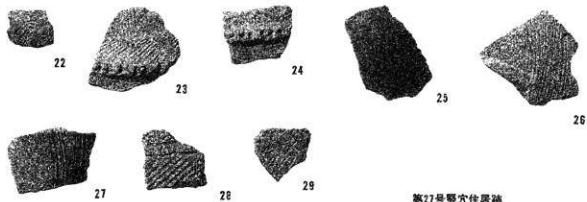
第22号竖穴住居跡



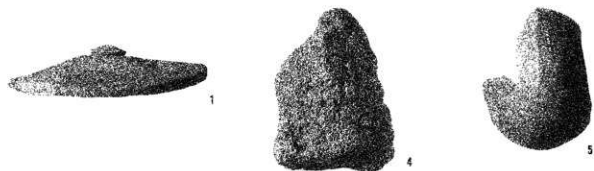
第24号竖穴住居跡



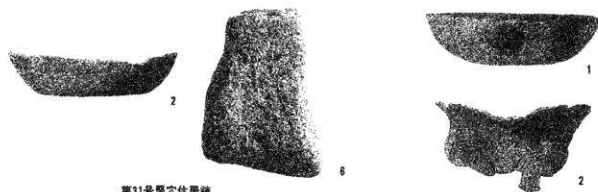
第27号竖穴住居跡



第27号竖穴住居跡

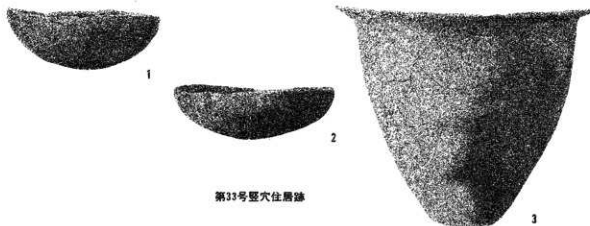


第28号竖穴住居跡

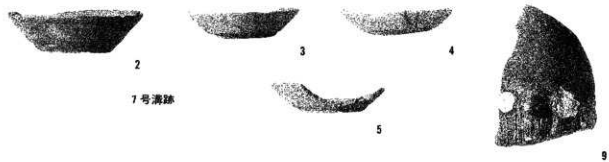


第31号竖穴住居跡

第32号竖穴住居跡



第33号竖穴住居跡



11、12号清跡



13号清跡

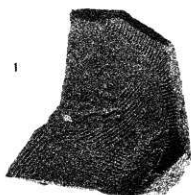


14号清跡

15号清跡



16号清跡





1

1号土坑



1



2



3



4



7



9



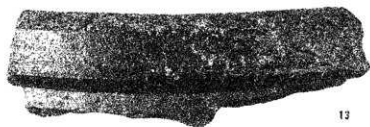
11



10



8



13



12

2号土坑



15



17



1

12号土坑



1



2



3

13号土坑

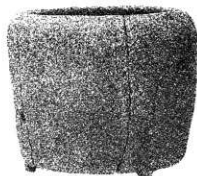


1

19号土壌



1



2



3



4

20号土壌



2



3



4



7



11

(5号掘立柱建物跡)



12



13



14



15



16

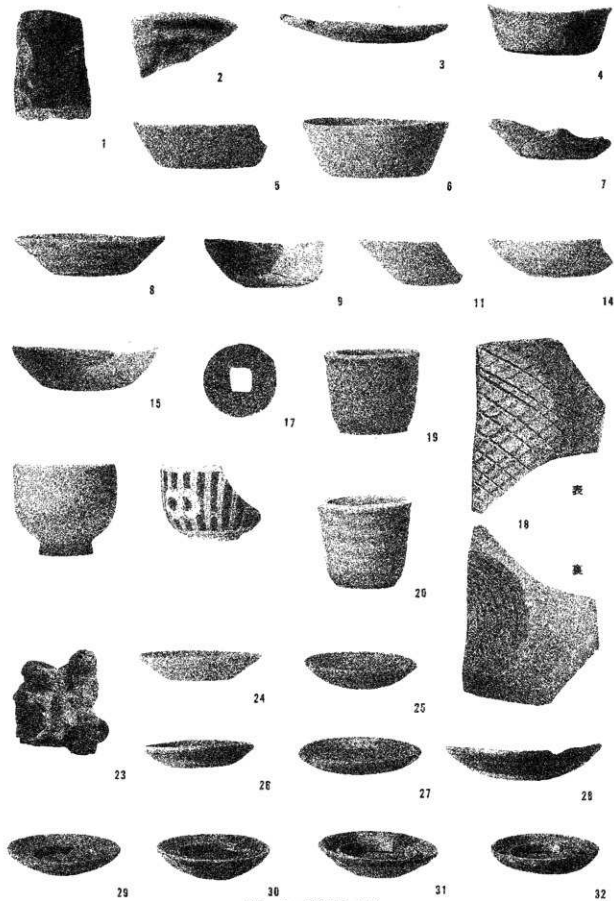


19



20

出土地点を有する遺物



グリッド-括等遺物 (1)



33



34



35



36



40



41



42



43



44



45



46



47



48



49



51



52



53

グリッド一括等遺物(2)

報告書抄録

ふりがな	ちばしいのはなじょうせき							
書名	千葉市猪鼻城跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	倉田義広							
編集機関	財団法人 千葉市文化財調査協会							
所在地	〒260-0807 千葉市中央区南生実町1210				TEL 043-266-5433			
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 '''	東経 '''	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
千葉市猪鼻城跡	千葉市中央区亥鼻1-23-1外	12101-1		35° 36' 3"	140° 7' 50"	1999. 7. 1～ 1999. 12. 25	4,412㎡ 博物館別館建設	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
千葉市猪鼻城跡	集落跡 //	弥生時代 古墳～平安時代	竪穴住居跡11軒 竪穴住居跡22軒	弥生式土器 土師器・須恵器		「厨」の墨書土器		
	城跡	中世	掘立柱建物跡棟 溝跡 地下式土壇 1基 土壇 基	土師質土器、古瀬戸瓶子、灰釉平椀、常滑壺・甕、天目茶碗、陶製狛犬				
	不明	近世	土壇 2基	土師質蔵骨器 焼塩壺・蓋 灯明皿、灯明受皿、乗燭、高田徳利				

千葉市猪鼻城跡

平成11年3月31日発行

編集・発行 千葉市教育委員会
千葉市中央区問屋町1-35
財団法人 千葉市文化財調査協会
千葉市中央区南生夷町1210
TEL 043-266-5433

印刷 株式会社 太陽堂印刷所
千葉市中央区末広1-4-27
TEL 043-222-1122